



# 地域人材育成研究

# 5

特集：各地の高校魅力化プロジェクトを紹介  
島根県立吉賀高等学校の高校魅力化（1）

編集・発行：地域人材育成研究会



## 地域人材育成研究会

わたしたちが考える地域人材とは、若者、ばか者、よそ者の人材であり、かつ Think locally, act regionally, leverage globally. ができる人材です。そのために学校が出来ること、しなければいけないことは多いと考えます。

地域人材として従来、語られてきたのは、若者、ばか者、よそ者でした。人によってこの謎めいた言葉の解釈は異なるのですが、わたしたちは、若者とはエネルギーがあり、古い習慣に囚われない者。ばか者とは地域の見慣れたもの・忘れられたものを地域創生の資源として活用する人、よそ者とは外部から地域を見る視点をもちさらに外部の人との繋がりがあの人だと考えています。

Think locally, act regionally, leverage globally. は現地で考え、地域の実情にあわせて行動し、グローバルの仕組みを活用し世界を変えようという意味だと考えます。

わたしたちはみなさまと協働で、若者、ばか者、よそ者の人材、かつ Think locally, act regionally, leverage globally. ができる人材を育てることを、研究したいと考えています。



## 島根県立吉賀高等学校







## 『地域人材育成研究』第5号の位置づけと使用について

『地域人材育成研究』第5号～第8号は、シリーズで島根県立吉賀高等学校を特集します。吉賀高校は島根県西部の中山間地域に位置する島根県で最も小さい県立高校です。2011年からスタートした島根県「離島・中山間地域高校魅力化・活性化事業」に初年度から参加した高校であり、いち早く県外生募集の他、寮、公設塾といったハード面での整備を行い、アントレプレナーシップ教育という地域の特色を生かした教育で起業家精神の教育やキャリア教育を行っています。第5号は歴代校長の語りから、吉賀高校の高校魅力化の発展の背景と意義をアーカイブ（記録）します。

第5号はやや教育研究（教育史、教育行政学、教育社会学）の色が濃い構成となっています。

中学生と保護者の皆様には今の高校魅力化を創り上げた教員たちの姿を吉賀高校を受験する際の参考資料として利用していただけると幸いです。行政と高校教員、地域の皆様には、高校魅力化を推進する参考資料として利用していただけると幸いです。

『地域人材育成研究』の研究上の位置づけは、地域人材育成研究会が行った調査のデータを公開しアーカイブ化することを目的としています。研究者の皆様や卒業論文の執筆等を行う若い皆様には、研究の資料として利用していただき、また、ご意見をいただけると幸いです。私たちは今後、本号の内容をもとに研究を進め、成果を公表する予定です。

最後になりましたが、『地域人材育成研究』の著作権の全ては本研究会に帰属します。ただし、出典を記載してあれば、本誌の一部または全部を、印刷物か電子データかの形式を問わず、複製や改変や再配布することができます。本誌をみなさんでご活用いただけましたら幸いです。

ただし写真に関しては、写真を抜き出して複製や改変して利用する場合には、島根県立吉賀高等学校の許可を得ることを条件といたします。本誌に使用されている写真は島根県立吉賀高等学校から提供を受け、本誌での使用の許可を得ています。

Print ISSN 2435-3604  
Online ISSN 2435-3612



# 地域人材育成研究 第5号

2021年12月  
編集・発行：地域人材育成研究会

特集

各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

## 吉賀高校の高校魅力化（1）

- 4 吉賀高校調査について
- 6 報告① 第19代校長齋藤雅典典先生（2013年度～2015年度）の語り  
——最初は、やること自体が目的—— 樋田有一郎
- 27 報告② 第20代校長熊谷修山先生（2016年度～2017年度）の語り  
——キャリア教育では「何を」と「どこで」が  
リアリティとして重要になる—— 樋田大二郎
- 54 報告③ 第21代校長渡部敏郎先生（2018年度～2020年度）の語り  
——（地元の）吉賀町にとって吉賀高校はどうあるべきか  
常に考えながらやっています。—— 樋田大二郎
- 70 論考  
高校魅力化の展開の事例研究  
——島根県立吉賀高等学校の試行錯誤と問い直しに着目して—— 樋田大二郎
- 95 寄稿  
吉賀高校アントレプレナーシップ教育の歴史 坂田紀之  
投稿
- 107 海士町の都市農村交流ツアー「AMAWゴン」の記録と  
隠岐島前高校再生に至る前史 尾野寛明



地域人材育成研究 第5号

2021年12月

島根県立吉賀高等学校

〒699-5522

島根県鹿足郡吉賀町七日市937



吉賀町  
YOSHIKA Town

## 1 吉賀高校をアーカイブする意味

普通科高校の教育の問い直しという観点から高校魅力化を考える必要がある。二度のベビーブーム期の量的拡大と個性化・多様化、そしてその後の量的縮小と特色化・魅力化を経て、普通科高校の意義・使命、方法が混迷している。

各高校の高校魅力化のきっかけは地方郡部の普通科高校の統廃合回避であることは間違いない。しかし、県政への陳情や生徒への補助金支出では一時的に存続できても生徒は増えないし、生徒の高校生活は輝きを増さない。

隠岐島前高校の高校魅力化がスタートしたとき、隠岐島前高校は自分たちが存続するためには、高校が魅力的になることが大切だと気づいた。しかし、魅力的になるとはどういうことかは当時もそして今に至っても答えは与えられていない。普通科高校改革の観点から重要であると思われるのは、隠岐島前高校を始め島根県の高校魅力化の原8校（スタート時に参加した8校）が、自分たちの普通科教育を問い直し続けていることである。

かつて、普通科教育が完成教育なのか進学準備教育なのか議論となったことがある。普通科教育は仮に後者の進学準備教育であったとしても出口教育ではない。職業教育であったとしても出口教育ではない。また、特色のある教育であったとしても専門教育ではない。それでは普通科教育とはいったい、どんな教育なのだろうか。吉賀高校の普通科教育の問い直しの結果は、結果だけを見ると奇しくも一九四八年の新制

# 吉賀高校調査について

高校発足時の地域と共にある普通高校という理念への先祖返りと見なすことができるものであった。

『地域人材育成研究』第5号は、吉賀高校はどのような経緯で問い直しを行うに至ったか、どのように問い直したか、問い直しの結果、どのような地域と共にある普通科高校となったかを高校魅力化スタート以降の五代の校長の時代に焦点を当て記録した。

## 2 調査概要

地域人材育成研究会と吉賀高校との交流の歴史は古い。研究会メンバーは二〇一三年から吉賀高校や吉賀町を度々訪問している。また、二〇一四年からは研究会メンバーが所属する大学の学生と吉賀高校の生徒の交流事業が行われている。二〇一六年度には吉賀高校の歴代卒業生約四〇名に対する聞き取り調査を行っている。

吉賀高校関係者への聞き取り調査は、二〇二〇年二月一三日～二月一五日、および二月二七日に吉賀高校および、吉賀町役場、吉賀町体育館、カフェ「草の庭」で半構造化されたインタビュー法を用いて行われた。インタビューアは地域人材育成研究会のメンバーである、青山学院大学・樋田大二郎、法政大学・寺崎里水、青山学院大学・大木由衣、日本女子大学・樋田有一郎が担当した。在校生四名への集団聞き取り調査は、吉賀高校教員同席のもとで行われた。

聞き取り内容はICレコーダーに録音して文字起こしを行い、インタビュー対象者に文字起こししたスクリプトの確認と修正を行っていただいている。

調査対象者は以下である【インタビュー実施順】

二〇二〇年二月一三日

吉賀高校第二二代校長・渡部敏郎先生

二月一四日

吉賀高校生徒四名、吉賀高校教諭・中村美楠子先生、吉賀高校第一九代校長・齋藤雅典先生、吉賀町副町長・赤松寿志氏、エコビレッジかきのきむら・井川保氏、吉賀高校コーディネーター・坂田紀之氏

二月一五日  
吉賀町役場職員・増本健治氏、吉賀高校主幹教諭（高校魅力化担当）・河井俊彦先生、吉賀高校卒業生二名

二月一六日  
吉賀高校第二〇代校長・熊谷修山先生

二月二七日  
吉賀高校教諭・岡崎真弓先生、カフェ「草の庭」オーナー・花崎訓恵さん

その他（二〇二三年三月一四日）  
第一八代校長・太田肇先生 ※第5号ではいただいた資料を利用している。



報告①

(特集) 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 吉賀高校の高校魅力化(1)

## 第19代校長齋藤雅典先生(2013年度〜2015年度)の語り

——最初は、やること自体が目的——

日本女子大学 樋田有一郎

第一九代校長の齋藤雅典先生(二〇一三年度―二〇一五年度)へのインタビューは二〇二〇年二月一四日に、吉賀高校の応接室で行われた。二〇二〇年度当時は非常勤で、吉賀高校で数学を教えていた。齋藤先生の前任校は津和野高校(二〇一一年度―二〇二二年度)であり、高校魅力化の高校から高校魅力化の高校への異動であった。二〇一三年度は吉賀高校の魅力化の三年目に当たり、第二〇代の熊谷修山校長が教頭として魅力化を推進している時期であった。

当時の吉賀高校は廃校回避が重要な課題であり、廃校回避への取り組みとして学力、中高一貫、生徒指導、生徒の自信回復、キャリア教育そしてそれらすべてに関連するものとして高校魅力化に取り組んでいた。齋藤校長は様々な人の支援を得て、様々なことに取り組んだ。「吉賀高校は走り続けなければ倒れる」と言うインタビューの言葉に齋

藤校長の決意の強さがうかがえる。

『地域人材育成研究会』にとっては、今日の高大協働探究活動(吉賀高校のアントレプレナーシップ教育の一部)につながる吉賀高校と青山学院大学・法政大学の学生の交流の提案をいただいたという意味で、齋藤校長先生との出会いは大きな出来事であった。高大協働探究活動は手探りで始まったが、齋藤校長の人を引きつけ・受け入れる包容力や高校生だけでなく高校魅力化に関わる者への学びの効果への信念が、高校生だけでなく高校魅力化に関わる者への学びの効果を成長させ、成長させ、大学教授同士の関係を成長させた。

吉賀町内でも様々なところで様々な成長が起きているが、吉賀町内に様々なエネルギーがあったことと齋藤校長の高校魅力化への姿勢が影響した結果といえるのではないか。

◇ 吉賀高校は二〇一三年時点で島根県内に四校しかない一学年二学級以下の普通科小規模校のうちの一枚であった。そして、前任校長は町内の中学生の人数を元に廃校の危機のシナリオを描き、様々な募集対策を行っていた。しかし、町内では吉賀高校存続への機運は高くなかった。

「何とかしないと吉賀高校がなくなる」、高校がなくなつたときの地域のマイナス点をいろいろと指摘して、「何とかしなきゃいけない」と言われる方もおられました。でも、その頃はそういう人は少数派かな、と私は受け止めました。

一年目の年に、町議会の委員会に呼ばれて説明をさせてもらったことがあるんです。その時も、どちらかというと、理解者よりも、「そんなことを言われても難しいですよ」という考えの方が多いように感じました。」(インタビューより引用。以下同じ)

◇ しかし、吉賀高校の場合、前任の太田校長のとき以来、関係者の廃校の危機意識は強かった。このことが島根県の「離島・中山間地域高校魅力化・活性化事業」への参加を促した。

「県教委の魅力化補助金は、魅力化できなかつたときの手切れ金ではないか」というようなことは、当然、意識していました。だから危機感を持っていました。魅力化事業の対象校に、遅れて参加した高校がありますよね。……そういう不審な気持ちがあつて、すぐには「参加します」ということにならなかつたんじゃないかと思うんです。吉賀高校もですし、……「とにかく、不安はあるけれども、お金を出していただけるといことは、とてもありがたい

たいことだから、魅力化に向かつてやってみよう」と始まつたんです。」

◇ 新しい取り組みを導入するに当たつて、齋藤校長は従来の教育目標と魅力化の教育目標の調整をしたという意識はないと述べた。それ以前の問題として「高校の存在価値をアピールするために」、「とにかく、良いことは何でも」やろうとしたのとのことであつた。

当時、アクティブラーニングということが言われていて、知識の詰め込みではない教育が必要なんだという動きがありました。吉賀高校の魅力化でやり始めている、地域へ出かけていつていろいろなことを学び、そこで考えたことを発表する、プレゼンテーションする、といったことは、高校教育の目標から外れているという意識はありませんでした。

吉賀高校の生徒の多くは、学力はそれほど高くなく、学習意欲も高くはないので、この魅力化の動きを通して、学習動機が生まれて、学習意欲が高まるとよいという思いでおりました。でも、そんなに簡単な話ではないですね。一番は、「この高校がなくなるんじゃないか」という思いです。……普通に考えると、まず、一学年一学級の吉賀高校がなくなると思ひます。その思いがあつたので、……「従来のことややってきて、それに限界があるから新しい方向を」というよりも、とにかく、良いことは何でもやって、吉賀高校の存在価値をアピールしなくては、という思いでした。



◇ 高校魅力化の取り組みのモデルとなったのは、隠岐島前高校と飯南高校であった。そして、「自転車操業的な意識」「走り続けなければ倒れる」という状況がおちついたときに目指した生徒像は学ぶ意欲のある自己肯定感の高い生徒であった。高校教育にとって基本ともいえることであり、令和三年の中教審答申が抱いた問題意識でもある（文部科学省『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申））。

最初は、「やること自体が目的」「意欲的に見えることをとにかくやろう」で始まったんですけど、いつまでもそれで続くはずがないので、「次は、それが学ぶ意欲につながるような仕組みを作らなきゃいけない、総合学習でいろいろな地域と連携した学習したことが、教科の学習意欲につながるようにしなきゃいけないではないか」と、私は思っていました。先生方も、そういうことは意識されていたと思います。」

荒れていた時代というのは、生徒たちは、自分たちは地域から「吉高生は、勉強ができん、やれん子だ」と見られていると思っっていたんじゃないでしょうか。それが、魅力化の取り組みの中で、地域に出かけて地域の人の前で発表し、新聞にも取り上げてもらうなど、注目してもらえるようになったんですね。生徒は地域に出かけたとき、決してひどいことをいわれることはなくて、むしろ、褒めていただくことが多いのです。そうしたことから、自己肯定感が高まっていったと思います。

◇ 吉賀高校は中高一貫（連携型）を募集対策の柱としてきた経緯が

あり、二〇二二年度の高校魅力化の取り組みでも様々な中高連携のイベントが行われた。翌年以降も様々な連携のための事業やイベントを連携の形式で行っている。しかし、齋藤校長が着任した二〇一三年度の高校魅力化の取り組みでは、今日のアントレプレナーシップ教育に発展することになる「聞き書き」と「地域クラブ」が大きな柱となっていた。

「今も続いているアントレプレナーシップ教育は、その年が初めてです。吉賀町の活性化のためにどんなことをしたらよいかというのを、地域に出かけて学び、活性化策を考え、プレゼンテーションするというものです。途中、何度か地域の方に来ていただいて、指導してもらいました。

「去年聞き書きをやったから、今年も同じようにやるんだというような気持ちでは、こういう形の授業は駄目になる」と考えていました。……「ある学年のときには、進学を目指す子にもつながるような内容にしたいという申し出がありました。つながるといふのは、受験勉強という意味じゃないです。例えば、将来看護師になる希望の生徒は、医療機関に出かけて、いろいろな問題を聞くというふうなことです。

それと、大きなことは、東京研修の中身の変更です。はじめは東京で東大を見るプログラムがあったのです。私も着任の年に東大へ行ったのですが、「ちょっとどうかな」という思いをもっていったところ、樋田先生にお目にかかり、学生さんにお互いの生活を紹介し合ったり青山学院大学を案内していただいたりする形に変えていただきました。次の年からは、学生さんに生徒の発表を

聞いていただき、そのことについて話し合うというようになりました。いいものになって、本当に感謝しています。

◇ この吉賀高校生と大学生の交流はその後、法政大学生も参加するようになり、さらに、大学生と高校生がただ話し合うだけでなく、相互に訪問し吉賀町と東京で一緒にフィールドワークを行う企画へと発展している。なお、「今年も同じように」はしないという伝統がいつの間にかできあがっており、毎年いろいろなことが起き、大人たちはその都度、それまでは見ることのなかった高校生や大学生の姿と出合い興奮することになる。

この魅力化に関することは、とても。私は、教員生活の最後に、津和野高校と吉賀高校に勤めさせてもらって、とつても良かったと思っています。勉強になりました、本当に。「学校がなくなるかどうか」という状況なので、「じゃあ、学校の役割は何だろうか」、「本当になくなったら困るのか」とか、「この状況で、学校は何をしなきゃいけないのか」とか、続くのが前提の学校とはちよつと違うことを、いろいろと考えさせてもらったことが、とても良かったです」

「私は、進学校も良かったです。進学校は、受験を目標にしたとは言いませんけど、結局、進学実績を求められているところがあるので、模擬試験の成績を気にします。また、クラス間で進度をそろえて授業をしますので、「この子まだわかつたらんのじゃないかな」と思いながらも、先へ進まなきゃいけないです。

ここでは、そういった世界とは全然違って、「この子のためにどうしたらええか」に集中することができます。また、人数が少ないので、たったこれだけしかいない子どもを、「わかっているけどこの子はええわ」とか、そんなことはあり得ないですね。これが、一クラス四〇人おれば、授業中下を向いたりする子がいて、「あの子、集中してないな」と思っても、それを全部気にしていたら、いつもそういう子を気にかけてやっていたら、授業ができません。それで、いつの間にかそういうことに慣れっこになって、自分がつまらん授業、話をしとつても、「あの子は集中力がないな」、「あの子、勉強せんな」という感じで過ごしてきた部分がいぶんあったという感じます。しかし、吉賀高校で魅力化に取り組む中で、もう一回考え直すことが多かったんです。」



### 1 着任した頃の吉賀高校の概要と魅力化（地域協働）の概要

——それでは、先生が吉賀高校に着任した二〇一三年頃のことを伺いたいんですけども。高校魅力化をめぐる地域の状況はどんなだったでしょうか？

齋藤・吉賀高校は、人口が多い時代にできた高校です。その頃は、「成績上位の人は津和野か益田の高校に行きなさい。そうしないと成績下位の子が入れる学校がないから。」、そういう声があったようです。ス

タートがそうですから、子どもたちも荒れていた時期があったと聞いています。

ですから、私が着任した頃、地域の方に、「そりゃ地元の学校だから、校長先生は吉賀高校に来させてくれって言うけど、でも、あそこにはあ行かせられんよ」と言われる方もおられました。一方で、「何とかしないと吉賀高校がなくなる」、高校がなくなつたときの地域のマイナス点をいろいろと指摘して、「何とかしなきゃいけない」と言われる方もおられました。でも、その頃はそういう人は少数派かな、と私は受け止めました。

一年目の年に、町議会の委員会に呼ばれて説明をさせてもらったことがあるんです。その時も、どちらかというと、理解者よりも、「そんなことを言われても難しいですよ」という考えの方が多いように感じました。

——当時の高校の様子と、それから、生徒さんの様子はどんなだったでしょうか？

齋藤・私が来た年の二年生から、今もやっているキャリア教育（アントレプレナーシップ教育）が始まりました。東京研修もその二年生が初めてです。

前任の校長から、生徒の様子は、「荒れていた時期から見ると、ここ数年はだいぶ落ち着いて、おとなしくて、やるべきことをきちっと素直にやれるようになった」と聞いてきました。しかし、二年生の学年に、たまたま指導の難しい子がたくさん集まってしまいました。小さい学校ですから、影響は大きかったです。



ひねくれて、反社会的とか、そういうことではありません。我慢できない、また、周囲に対する思慮深さがない、そうしたことから、平気でいろんなことをしてしまうということがありました。魅力化とは別のことですが、生徒指導面では多くの教員が苦勞をしたんですね。落ち着いて授業がうまくできないという状況も、ちらほらあったですね。

——先生、二〇一三年度からこちらですよ？

その二年生というのは、(一年生だった二〇一二年度に)東京研修を始めた最初の？

齋藤…そうですね、魅力化の最初の学年。三年生は、「自分たちの下の学年からいろんなことが始まって、自分たちには何もなかった」っていうふうに言っていましたよね。

——それで、先生がこちらにいらつしたときが高校魅力化の三年目で、二年目には、私たちが聞いているのは、聞き書きしていたと覚えていません。先生が赴任された当時は、高校魅力化とはどのようなものであると捉えて、どういう組織で、どういうことをなさっていましたでしょうか？

齋藤…もう当時から、今も続いている、町の教育委員会と月に一回の魅力化プロジェクト会が始まっておりました(二〇一一(平成二三)年一〇月開始)。「県教委の魅力化補助金は、魅力化できなかったときの手切れ金ではないか」というようなことは、当然、意識していました。

だから危機感を持っていました。魅力化事業の対象校に、遅れて参加した高校がありますよね。

——ありますね。

齋藤…そういう不審な気持ちがあつて、すぐには「参加します」ということにならなかったんじゃないかと思うんです。吉賀高校もですし、津和野高校も、「とにかく、不安はあるけれども、お金を出していただけるといことは、とてもありがたいことだから、魅力化に向かってやってみよう」と始まったんです。

その魅力化の取り組みの一つというのが、東京研修であつたり、聞き書きやアントレプレナーシップ教育であつたりしました。当時、現校長の前任の熊谷校長が教頭でおいりました。教頭と教務主任の二人が中心になって、魅力化のプログラムを立案していました。

——当時、ほかの先生方というのは、「魅力化って何だ？」というような理解とか、魅力化への協力とかはどうだったでしょうか？

齋藤…「魅力化って何だろう？」って思ひは、それはあつたと思うんですけども、ご承知のように、熊谷先生っていうのは勢いのある人ですよ。大きな声でパッパッパッパッって言うんで、「あ、だったら、いいことなんだろう」と、皆さん、そういうふうには巻き込まれてる雰囲気がありました。協力しないとか、そういう雰囲気はありませんでした。

先生方は、教科のことなどは自分が知っていることだからいいんですけども、魅力化で新しいことをやらなきゃいけないので、負担感は

あったと思います。けれど、私は、直接、「やりませんよ」という声を聞いたことはないです。

——従来の教科指導や進路指導と高校魅力化の考え方の違いで、混乱が起きることはなかったですか？

齋藤・魅力化の取り組みは、総合学習の時間が中心で、あとは行事的なことがあります。実際の授業の中で、いろんなことがどんどん変わっていったわけではないです。その総合学習のところは、コーディネーターが中心に、教頭と、さっき言った教務主任と三人で、実際のところ回しているところが多分にありました。もちろん、担任、副担任は関わりますが、「困ります」とか、「反対します」とか、そういうことはなかったですね。そのように私は受け止めています。

## 2 従来の教育目標と魅力化の教育目標の調整

——次へ進ませていただきます。

従来の高校教育の目標と、吉賀高校の高校魅力化の目標との調整をなさったのは、どなたがどんなふう調整なさっていたでしょうか？ 反対はしないまでも、「忙しいから嫌だ」とか、そういう考え方もあると思います。

齋藤・私自身が調整したという認識はあんまりありません。当時、アクティブラーニングということが言われていて、知識の詰め込みではない教育が必要なんだという動きがありました。吉賀高校の魅力化でや

り始めている、地域へ出かけていっているいろいろなことを学び、そこで考えたことを発表する、プレゼンテーションする、といったことは、高校教育の目標から外れているという意識はありませんでした。

吉賀高校の生徒の多くは、学力はそれほど高くなく、学習意欲も高くないので、この魅力化の動きを通して、学習動機が生まれて、学習意欲が高まるとよいという思いでおりました。でも、そんなに簡単な話ではないですね。

——「どのように魅力化を考えるか」について、他校の例で申し訳ないですが。横田高校とかだと、「中山間地域の進学校の限界を感じ始めた先生方が、だんだんカンパニーを始めた」と言うような話だったんですね。

その他の高校でも「こういうのをやると、不登校が減るし、学校適応もみんなできるようになる」というのを感じ始めていて、高校魅力化募集以前の取り組みの段階から、そういう効果があったというお話を伺いました。

当時、齋藤先生は魅力化をどういうふうに受け止められていましたか？

齋藤・一番は、「この高校がなくなるんじゃないか」という思いです。この地域は、横田高校がある地域よりもっと早く、子どもたちの数が減っていくだろうという予測が出ていました。この地域には、津和野高校があり、吉賀高校があり、さらに益田には四校も高校があるという状況です。普通に考えると、まず、一学年一学級の吉賀高校がなくなるだろうと思います。その思いがあったので、横田高校のように、



「従来のことをやってきて、それに限界があるから新しい方向を」というよりも、とにかく、良いことは何でもやって、吉賀高校の存在価値をアピールしなくては、という思いでした。東京へ行くこともそうですが、キャリア教育をやるにしても、子どもたちが地域の中に出て行っているような活動する姿を見てもらいたい、そういう思いです。一方で、吉賀町は、通学の支援など、吉賀高校へ入学することで得られる経済的なメリットも整えて下さいました。

——あと、雰囲気的にもしんどい時期があったと思うんですね。

齋藤…三〇年くらい前に吉賀高校に勤めていた教員から聞いたことがあります。教室を開けたらストーブの周りでたくさん生徒たちがたばこを吸っていたことがあった。また、土曜日の午後になると、校門の前に車がズラッと並んでいて、女の子がそれに乗ってどんどん出ていったとか、そういうようなことも聞きました。また、これは地域の方から聞いたことですが、体育祭ではデコレーションを作りますね。それに火をつけた子がいたとか。とにかく、当時の話を聞いていると本当に大変だっただろうと思います。

吉賀高校の生徒は、周りの状況を見ず、臆さず、感情をストレートに行動に表すようなところがあります。

私がいいたときに、外国人が来たことがあるんです。交流事業に応募したんです。「魅力化のために、いいことで目立つことは何でもやろう」と応募しました。体育館に二〇人くらいの外国人と生徒が集まって、自由に話しをする時間があったのですが、吉賀高校の生徒は、外国人と話すときも全然臆しません。終わったときに、「いやあ、楽しかった。

先生、私、メルアド交換した」って言うんですよ。中には英会話がおぼつかない子もいて、どうやってコミュニケーションができたのだろうと思いました。そういう物怖じしない、大胆さがあります。

昔の荒れている時期は、そうした面が悪い方にストレートに出たんじゃないかと思えます。ここは、本当に、ある意味で遠慮がないような気がします。逆に言ったら、それが良い面でもあります。さっき言った外国人との交流もそうですが、益田在住の写真の専門の人が、「吉賀の子の写真は面白い」って言うんですよ。ここの子は、ストレートに、感性で、ぱつと撮ると思うんですね。頭の中で、「こういう角度で、こう撮ったら、こうなるんじゃないか」とか考えすぎない、そういうことにとらわれない子どもだなというふうに感じます。

### 3 高校魅力化の目標とモデル

——先生が、この学校の魅力化の取り組みを行うときに、これまでのどの経験が役に立ったでしょうか？

齋藤…一番は、それはやっぱり隠岐島前高校です。私は島前高校に入っていますけども、隠岐島前高校の先生に、津和野ですが、ここにも度々来てもらっています。具体的に取り組み内容が参考になったというところもありますが、励まされたというか、「やっていることは間違いないんだ」と言うことを感ずることがとても多かったです。隠岐島前高校のコーディネーターの岩本悠さんは、私よりもはるかに年が若いですけど、発想が私にはないものがあり、私には無理な発想がどんどん出てくると感じました。島根県にとって、他の学校にとっても、

とても大きかったですよね。島根県の魅力化は成功したと思えますが、隠岐島前高校の取り組みがなかったら、多分、こうはなっていないと思いますね。

あと、飯南高校にも行かしてもらいました。教育長と一緒に行って、いろんな取り組みのことを聞いて、参考になりました。ここでは、具体的にやつとられることを参考にさせてもらったというのが多いです。

——当時の飯南高校は、飯塚校長先生ですか。

齋藤…心よく、親切にいろんなことを教えてくれました。当時は、飯南町の方が、吉賀町よりは魅力化に対する理解が進んでいました。

### 4 荒れていた時代とめざす生徒像

——それでは、続いて、先生の時代の吉賀高校についてお伺いしたいんですけども。まず、当時の吉賀高校が目指す高校生象、理念の部分と具体的な資質や能力・進路・意識・行動など、特徴的なところをお伺いしたいと思います。

齋藤…もちろん、教育目標や目指す生徒象は定めていましたが、学校を離れた今、正確な文言は頭にのぼってきません。校訓の「至誠・創造・努力」を教室に掲げたことを覚えてます。また、職員会議や全校集会で、努力すること、他者を大切にすることなどを話したと思います。特徴的なものではありません。

これまでの話しておわかりただけたかもしれませんが、当時の

私は、教育的な理念を考えるよりも危機感の方が強く、「吉賀高校は走り続けなければ倒れる」、いわば自転車操業的な意識が強かったと思います。一方で、さっき言ったように、生徒指導上のいろんな問題もありました。そうした中でやっていって、だんだん落ち着いてきたときに、魅力化の中でいろいろとやってきていることを、最近言われている「学ぶ意欲」、文科省の言う「学ぼうとする力」につなげたいと考えていました。最初は、「やること自体が目的」「意欲的に見えることをとにかくやろう」で始まったんですけども、いつまでもそれで続けはさすがないので、「次は、それが学ぶ意欲につながるような仕組みを作らなきゃいけない、総合学習でいろいろな地域と連携した学習したことが、教科の学習意欲につながるようにしなきゃいけないんじゃないか」と、私は思っていました。先生方も、そういうことは意識されていたと思います。

吉賀高校の生徒の学力は、ほんとうに多様で、中にはセンター試験で七〇〇点台をとった子だとか、推薦ではなくて一般受験で国立大学に合格していく子だとか、多くはないけれど、そういう子もいます。かたや、数学でいうと九九も怪しい生徒もいます。こういう非常に多様な生徒みんなの資質を高めることが、吉賀高校の使命です。魅力化の中でやっていることは、そういう目的に沿っていると考えていました。特にコミュニケーション能力が高まっている姿は、何度も目にしました。

——それでは次の質問です。当時のそういった生徒さんを指導する上で、あるいは「学力につなげたい」というようなことをする上で、先生の目から見た吉賀高校生の課題はどのようでしたか。

齋藤・課題は、やはり家庭学習の習慣が身につけていない生徒が多いことですね。「学習につなげたい」と思うのは、裏返して言えば、「家でそれほど勉強できていない」ということです。PTAの会で保護者さんと話しても、「家で、そりゃうちの子、勉強すりゃあせん」って言う方が多かったですね。

——そういった状況に対して、高校魅力化が、生徒さんの学力向上とか学習意欲にうまい具合に影響を与えましたでしょうか？

齋藤・私の退職から四年が経った今、非常勤講師として再び高校に来ていますが、荒れたような雰囲気は全くなく、全体的に落ち着いて学習に向かっているなという印象を受けます。中にとっても優れた子がいますね。この前見せてもらった地方紙の切り抜きの中に、「ヤングこだま」という投稿欄に吉賀高校の何人かの生徒の文章が載っていました。読んで驚きました。とつてもすごい、文章がとても知的で、内容は「三年だからやがてこの地を離れるけども、自分がいなくなってしまうらうけども、文章がとても知的です。」

——あらかじめ、私たちが想定していたのは、当時は、高校魅力化にワーツと向かっていって、高校魅力化を通して、この高校がどんどん変わっていく。あるいは、学校の教育が変わっていくというような、そんな図式が頭の中にあっただんですけども。必ずしも、そういうことではなかったということでしょうか？



齋藤…変わっていくのは、変わっていったんだと思います。

荒れてた時代というのは、生徒たちは、自分たちは地域から、「吉高生は、勉強ができん、やれん子だ」と見られていると思っていたんじゃないでしょうか。それが、魅力化の取り組みの中で、地域に出かけて地域の人の前で発表し、新聞にも取り上げてもらったりするなど、注目してもらえようになったんですね。生徒は地域に出かけたとき、決してひどいことをいわれることはなくて、むしろ、褒めていただくことが多いのです。そうしたことから、自己肯定感が高まっていったと思います。

荒れていた時代は、多分、自分が吉高高校生っていうことにプライドが持てない人が多かったんだろうと思います。コーディネーターのAさんに、「吉高高校の同窓会をやるうと言ったら、拒否する人がいる」と聞いたことがあります。

そういう雰囲気は、私が来る前からいろいろな方の努力で少しずつ変わっていったと聞いていますが、私がおる間にもさらに変わってきたなと思いますね。まだ、プライドを持つまではいってないかもしれませんが、普通に、素直に、吉高高校の生徒であることを受け止めていると思います。

——私たちの実感として、高校生は荒れているという感じもしなかったです。それから、そんなに自分を卑下しているようにも見えなかったですね。

齋藤…そう思います。さっき言った、来た年の二年生はいろいろなこ



とがありました。あの学年は特殊でしたね。担任の先生は苦勞されました。

## 5 着任時の高校魅力化の取り組み

(聞き書き、アントレプレナーシップ教育、地域クラブ)

——それでは、先生が、着任された最初の年に、高校魅力化という意識でなされた授業、あるいは、行事というのは、どんな内容のものがあつたでしょうか？

齋藤…私が来て新しく、ということですかね？

——はい。

齋藤…今も続いているアントレプレナーシップ教育は、その年が初めてです。吉賀町の活性化のためにどんなことをしたらよいかということとを、地域に出かけて学び、活性化策を考え、プレゼンテーションするというものです。途中、何度か地域の方に来ていただいて、指導してもらいました。

そして、聞き書きやアントレプレナーシップ教育の本身は、年によって少しずつ変わりました。「去年聞き書きをやったから、今年も同じようにやるんだ」というような気持ちでは、こういう形の授業は駄目になる」と考えていました。直接生徒を指導する教員が、去年のノウハウを見て、「こうしてやればいいんだな」と授業をこなしていったら駄目になると思います。先生方もそれは思っていて、「やるんだしたら、実

際に担当する自分が納得いくような形でやりたい」という気持ちを感じました。

ある学年のときには、進学を目指す子にもつながるような内容にしたいという申し出がありました。つながるといえるのは、受験勉強という意味じゃないです。例えば、将来看護師になる希望の生徒は、医療機関に出かけて、いろいろな問題を聞くというふうなことです。

それと、大きなことは、東京研修の本身の変更です。東京で東大を見るプログラムがあつたのです。私も着任の年に東大へ行ったのですが、「ちよつとどうかな」という思いをもつていたところ、樋田先生にお目にかかり、学生さんにお互いの生活を紹介し合ったり青山学院大学を案内していただいたりする形に変えていただきました。次の年からは、学生さんに生徒の発表を聞いていただき、そのことについて話し合うというようになりました。いいものになって、本当に感謝しています。

——このアントレプレナーシップ教育を始めたということ、あるいは、大学生との交流を始めたということは、先生の目から見ると、どのような効果があつたのでしょうか？

齋藤…大学生との話の中で、子どもたちが認めてもらう雰囲気がありました。私、本当に感謝しているんです。あとで、感想を見ると、「目が輝いていた」とか、大学生がそういうことを書いていました。そういうことが、生徒の自己肯定感の向上とか、地域を誇りに思うこととか、人生を肯定的に考えることとか、いろんなことにつながつたと思います。「じゃあ、家に帰つての勉強時間が増えたのかどうか」つ

てのは、まだ、そう簡単にはいかないですけども。

アントレプレナーシップにしても、地域の人の前で発表しますので、ここでもやっぱり、「自分は認めてもらった」と思っています。当時の教員の中に、プレゼンテーションの指導がとても上手だった先生もいました。二人でただ喋るんじゃなくて、演劇のような感じを取り入れた発表したグループがありました。会場でも好評でした。それが子どもたちの自信につながっていったと思います。

——当時、私たちの方に、浅田君という学生がいて、彼は一人でこちへ来たりしたことが思い出されます。

齋藤…ありがとうございます。

——こちらこそ、大学生が高校生と本当に親しくさしていただきました。そういう交流が、高校生にとっても嬉しかったということでしょうか。

齋藤…嬉しかったと思いますね。「駅伝でも全国的に有名な、あの青山学院大学の学生さんが、自分たちに注目してくれて、いろんな話をしてくれる」ということは、彼らにとっても大きいと思います。

## 6 吉賀町と地域の支援

——当時の取り組みをするための、人とか財政とか行政・コミュニティからの、支援の状況というのはいかがだったでしょうか？

齋藤…人の面では、吉賀町がコーディネーターを配置してくれていますよね。それが、やっぱり、とても大きいです、いろんな意味で。AコーディネーターもBさんも、どちらもとても大きな仕事をしています。吉賀町は教育委員会や企画課を通して、いろんな形で応援してくれました。例えば、町のイベントに高校生の出番を作ってくれたりとか、細かいことまで配慮して下さいました。

それから、地域もです。オープンキャンパスのときなどに柿木に行ったりすると、有機農業をしている人たちが、有機の食材で食事を作ってくれたりとか。いろんな応援をいただきました。

お金の面では、県が通常の管理運営費とは別に決まった額を補助してくれて、とてもありがたく思いました。その上に、町がたかさんのお金を出してくれるようになりました。路線バスの運賃補助とか、部活の帰りなど路線バスがない時間帯に特別にバスを運行してくれたりとか。これらは今も続いています。

一番大きいのは、寮のように利用させてもらっているサクラマス交流センターができたことですよね。これも、当時から見ると、本当に、よくお金を出して下さいました。

——「寮がない問題」ってというのは当時からあったのでしょうか。

齋藤…あったですね。当時、この会議室で、地域の吉賀高校応援隊（二〇一三（平成二五）年発足）の会議が何度も行われました。行政とは別の民間の有志の会です。「何をしなきゃいけないか」「っていうこと、寮を作らなきゃいけない」、「公営塾を作らなきゃいけない」、「隠

岐島前高校がやっているような体験ツアーをしなきゃいけない」、「広報をもっともっとするために、吉賀高校を紹介するDVDを作ったりすることもしなきゃいけない」と話したことを思い出します。

「いろんなアイデアが出ましたが、ツアー以外は、ほぼ実現しました。応援隊も学校も、お金はもっていないので、町が実現してくれたことは、とてもありがたいです。当時の中谷町長は、本当に感謝しています。」

——岩本町長の前の町長さんですね？

齋藤：はい、中谷町長ですね。

——サクラマス交流センターができたのは何年でしたでしょうか？先生がいらつしやるときに計画がスタートした？

齋藤：寮を整備しようという話はありませんでした。私がいる頃は、吉賀高校の寮か、六日市のある旅館を改修しようというような段階でしたけれども。私が退職して一年目くらいじゃないでしょうか、話が「もうできそうだ」というふうに変わっていったと思います。

——やっぱり、陳情し続けるものなんですか？つまり、「継続が力なり」なんですか？

齋藤：多分、私が知らないところでも、いろんな方が「やっぱり町内に高校がなきゃいけない」というふうにいる、高校の存在意義の理解が浸透して、議会が通るようになったんでしょう。私が来た年には、

議会が通らなかつたかもしれないね。「なぜ、吉賀高校のために、町がそんなにお金を出すのか」という人が多かつたでしょう。

——確かに当時、そういう話、私たちも聞きました。

齋藤：ええ、そうだと思います。

——その辺の、「吉賀高校を応援してやろう」みたいな機運が盛り上がったきた潮目になったのは、どんなことがあつたんでしょうか？

齋藤：隠岐島前高校の場合は、わかりやすいんですけどね。ヒトツナギツアアが全国的な賞をもらったことが大きかつたと本に書いてありました。吉賀高校では、何か特別な出来事はなく、何がきっかけだったのかはよくわかりません。

さつき言いましたように、立て続けに良いことで目立つことがいっぱいありました。高校のことではありませんが、人工芝の町営サッカーグラウンドができました。オープンときは、全国の常連の立正大学 湊南高校や米子北高校、また、サンフレッチェのユースも来てゲームをしました。吉賀高校サッカー部も試合をさせてもらいました。

それから、環境教育の全国的な組織があつて、当時の環境担当の非常勤講師の尽力で、全国環境サミットを吉賀高校と吉賀町で行いました。

また、昨日のようなアントレプレナーシップの発表会も、以前はなかつたものです。町の方もたくさん見に来てくれます。いろいろな形で、いいほうで理解が進んだと思います。

そして、吉賀高校のことではありませんが、隠岐島前高校の取り組みがテレビで何度も放送されました。多分、町の人もテレビを見て、「ああそうなのか。町に高校があることはやっぱり大事なんじゃないか」という理解が、進んでいったんじゃないかと思います。

——どっかの段階で、「高校が必要だ」ということ、「自分たちが応援したら、高校がどんどん改善していけるだろう」という、そういう予感や確信みたいなものが広がっていったということでしょうか？

齋藤…だと思えますね。

それと、中高一貫教育をしているので、町内の中学校と常に話が出てきていることもあると思います。生徒指導上の問題があったときには、中学校にも迷惑をかけたこともありました。しかし、「じゃあ、吉賀高校の応援はできません」ということはありません。そういう人間関係ができていくことも大きかったと思います。

中高一貫教育に関する入試制度を変えたですよ。四〇人全員が中高一貫教育に係る特別選抜の定員だったのを二〇人にして、残りの二〇人は町外からも受験できるようにしました。そのアイデアは、熊谷教頭が中学校の先生と話をして出てきたものです。中学校側もその方がいい、「吉賀高校を希望すれば、何もせんでもいける」というのは良くない、定員が減ると特別選抜で不合格になる可能性が出てくるが、そのことが、子どもの努力しなければいけないという気持ちにつながるだろう、ということ。地域の理解も「ああ、まるつきり努力しない子は、吉賀高校も不合格になるんだ」というように、変わってきていると思います。

## 7 学習の評価方法・取り組みの評価方法

——ちょっと観点が変わるんですけど。評価についてなんですけども。

高校魅力化という、授業自体の評価もありますし。それから、この高校が目指している生徒の学びというのが、どれだけ高校魅力化の関係でいうところの、これは総合ですから五段階評価ではなくなるわけですよ。

——どういう評価、まず、生徒さんを評価するときに、どういう評価基準を使われましたでしょうか？

齋藤…基本的には、文章評価です。私の記憶では、当時、二段階くらいでの基準でした。「非常に熱心に取り組んだ」のようなものと、「少し課題がある」のようなもので、その評価のための資料を集めるくらいのことをやっていました。生徒の評価はその程度のことだったです。「特別に素晴らしい」というようなものを設けて、五段階にするとこういうようなことはなかったです。

逆に、われわれの取り組みの評価は、いわゆる学校評価アンケートを用いました。生徒、保護者、それから、地域の人にも、中学校にもお願いしました。中高一貫教育をしている地域ですので、やっていることに対して、どういう捉えられ方をされているかということを探ねて、振り返りながらやっているという状況でした。

——あるいは、中高一貫ですから、「中学校側から注文する、あるいは、感謝をするようなかたちで、取り組みに対する評価がくる」というこ



ともあったんでしょうか？

齋藤：肯定的に捉えて下さる評価もありましたけど、否定的なものもありました。吉賀高校にそこまで子どもたちを向かわせたいわけではない教員もいます。赴任した最初の頃は、「町内だから、仕方なく付き合っている」という意識がうかがえるような意見も目にしました。

——これ、先ほど聞いたことと重なると思うんですけど、先生の見たところでは、吉賀高校や吉賀高校生は、どのように変わってきたのでしょうか？

齋藤：非常勤講師として、四月に久しぶりに来させてもらって、子どもたちが落ち着いていると感じました。全体としての雰囲気です。確かに、学びに向かっている雰囲気を感じます。そうでない子もたくさんいるだろうとは思いますが。

非常勤を勤め始めた頃、「すっかり普通の学校になったね」って言っただんです。「普通の」というのは変ですけども、私がいたときの、なんとなく不満があるような表情の生徒を見かけません。もっとも、私には生徒指導上の問題があった学年のイメージが強いのかもしれませんが。今は、そういうものはほとんど感じません。見てるとですね。

#### 8 吉賀高校応援隊―自主的な地域学校協働の組織と行政の対応―

——それでは、また、当時のことを振り返っていただきたいんですけど、今、「コンソーシアム」ってどういう言い方をするんですけども。当時のコ



ンソーシアムの状況、コンソーシアムというものになっていなかったかもしれないけども。地域のいろいろな組織との関係、先ほど、プロジェクト会ですか？の話が出ましたけども。どんな外部の組織とのつながりがあったでしょうか？

齋藤・プロジェクト会は、吉賀町と吉賀高校との会議で、町の教育委員会に、あとから企画課と産業課も加わりました。県教委の指示は、魅力化事業は、地元の行政と一緒に取り組むようにというものでした。お金が動くことにつながる会でしたので、とても有効に機能したと思っています。今も続いていて、よく続いているなと思います。

あと、中高一貫教育の会合が年間一〇回近くありました。これは、中学校の先生方との信頼関係を築く上で、とってもいい会だったと思います。

—— それでは、あと少しだけお願いします。

当時、コンソーシアム、あるいは、学校外の組織としては、そのプロジェクト会、あるいは、中高一貫教育の会があったようなんですけども。これを、効果的に運営するためのポイントというのは、どのようなものがあったでしょうか？

齋藤・基本的には、高校が中学校側に対しても、町に対しても、願っている立場でしたので、高校側が、具体的に会のねらいとか、そういうものがしっかりしてないと、うまくいかなかっただろうと思います。教頭を中心に、いろんなことをよく詰めて進んでたと思います。

公でない組織では、吉賀高校後援会がありました。同窓会や自治会、

町内のいろいろな団体の長などがメンバーで、年に一回総会がありました。吉賀高校の問題を町全体で考える場でした。

高校外の組織でいうと、もう一つ、応援隊というのがありましたね。この組織は、町との関係が難しくなりましたので、なかなかやりにくい面はありましたけども。ただ、住民の直の声、必ずしも町役場には行かない住民のいろんな気持ちとか、情報とかを吸い上げておられる人たちだったと思います。例えば、県外入試の最初の年に、県外の子に対しては、どっかに下宿をお願いしなきゃいけないですよ。そのときに、われわれ教員はわかりませんが、「あそこだったら受けてくれるかもしれないよ」とか、いろいろなかたちで助けていただきました。その人たちが、「いろいろあるけども、そりゃ吉賀高校へ行かせんさいや」って言うってくれるのと、「あんなどこ行かしちゃだめだ」って言うのと、全然違うと思います。そういう場があったと思います。

応援隊は、個性が強い、言葉が激しい方が多かったので、こちらが主導というより、その方たちが主導でした。私たちは、呼ばれて行っているというふうな状態でした。

私の在任中の終わり頃になると、応援隊と町とはかなり険悪な関係になっていくように感じました。間では、町長選もあり、他にもいろいろな対立があったりしたので、感情的に難しかったですね。しかし、今思うと、応援隊の人が言ったことが実現していますよね。これがすごいなと思いますね。

—— 吉賀町らしさですね。

齋藤・吉賀町は、あれだけ激しい言葉の応酬もあったのに、すごいな

と思います。

——当時はコーディネーターというような発想はまだ、定着してない時代だったと思うんですけども。校長先生の中では、コーディネーターの役割とか、高校の中での位置づけを、どのように考えていらっしゃるのでしょうか？

齋藤…基本的に教員は教科で採用されていますので、まず、教科のこと、それから生徒のことが中心です。新しいアントレプレナーシップのような授業をしていくためには、町内との交渉とか、いろんなことが必要になります。そうしたことを前面になってやっていただいたです。あるいは、デマンドバスのことなど、町の支援の窓口とか、そういったことをやっていただきました。そういうことをお願いしてたというふうに思っています。

——そういう意味では、町との関係が深い坂田さんを、コーディネーターとしてお願いしたというのは、意味があったということでしょうか。

齋藤…はい、ちょうど応募されて、よかったです、とってもですね。

## 9 苦勞とか、あるいは、面白かった点

——それでは、あと少しですので、申し訳ありません。

高校魅力化を当時、なさっていくうえでの苦勞とか、あるいは、面白かつ

た点。

齋藤…私、ここへ住めば良かったんですけども、住宅は借りていましたが、横田の家から通っていました。応援隊の会議などがあると夜遅くなります。それから、いろんなことをお願いしているの、町の行事とかで声かけしてもらったら、できるだけ行くようにしていました。土日も関係なく。小中学校の学習発表会とか、あるいは、ある地区でこういうイベントがあるよと言われれば、とにかく行かしてもらおうようにしました。それが、苦勞と言えば苦勞かも。勉強にはなつたんですけども。ただ、時間を相当使ったのは間違いないです。

しかし、やっぱり苦勞の一番は、応援隊と町との間に挟まって、とってもとっても心痛したことですかね。立ち位置って難しかったですね。

——自販機とか、もめましたね。

齋藤…自販機、そうですね。

私がいたときに、応援隊の人たちが業者にお願いして設置し、町内の人に「吉賀高校を応援する意味で、この自販機を使ってほしい。売り上げの一部を高校の支援に使うから」「応援ステッカーのついた自販機を置くだけでも、応援の意味がある」と始まったものです。

私の理解では、高校にお金をといるのではなく、例えば、「高校を応援するための看板とか、垂れ幕をつくるとか、そういうようなことをする」というふうに聞いていたんですが。その後、高校との関係が変わってきたのかなと思っています。



——面白かったところとか、興味深かったところとかは？

齋藤…すべてがとても面白かったです。この魅力化に関することは、とても。私は、教員生活の最後に、津和野高校と吉賀高校に勤めさせてもらって、とっても良かったと思っています。勉強になりました、本当に。

「学校がなくなるかどうか」という状況なので、「じゃあ、学校の役割は何だろうか」、「本当になくなったら困るのか」とか、「この状況で、学校は何をしなきゃいけないのか」とか、続くのが前提の学校とはちよつと違うことを、いろいろと考えさせてもらったことが、とても良かったです。

こうやって、皆さんとも知り合いになれたし、いろんな方に会うこともできました。

——そうですね。私たちも、本当にいろんなものをいただいたと思っています。

齋藤…いえいえ、とんでもありません。ありがとうございます。

——あとは、先生の方から自由に高校魅力化を振り返っていただけますか。

齋藤…さつきと同じことになりますが、私にとっては良かったということしかないですね。いろんな意味の勉強ができました。

私は、進学校も長かったです。進学校は、受験を目標にしたとは言



いませんけど、結局、進学実績を求められているところがあるので、模擬試験の成績を気にします。また、クラス間で進度をそろえて授業をしますので、「この子まだわかつとらんのじゃないかな」と思いながらも、先へ進まなきゃいけないです。

ここでは、そういった世界とは全然違って、「この子のためにどうしたらええか」に集中することができます。また、人数が少ないです。で、たったこれだけしかいない子どもを、「わかっけないけどこの子はええわ」とか、そんなことはあり得ないですよ。これが、一クラス四〇人おれば、授業中下を向いたりする子がいて、「あの子、集中してないな」とか思っても、それを全部気にしていたら、いつもそういう子を気にかけてやっていたら、授業ができないです。それで、いつの間にかそういうことに慣れつこになって、自分がつまらん授業、話をしとつても、「あの子は集中力がないな」とか、「あの子、勉強せんな」という感じで過ごしてきた部分がいぶんあったということを感じます。しかし、吉賀高校で魅力化に取り組む中で、もう一回考え直すことが多かったです。

## 10 インタビュー後のフリーなやりとり

——いろいろな本当に考え深いものがあるんですけども。

魅力化の初期の大変な頃に、先生が赴任されて先生が果たされた役割をいろいろ振り返らせていただきました。

先生、すごくいろいろな方と仲良くされるといふか、すごい根回しといふか、そういうのですごくご苦労されたのではないかなというふうに。

齋藤：はい。私がたまたま性格がそういう性格で、考えとしても、けんかをしたらだめなんです。その時は、いくらこっちが勝ったと思っても、言い負かしたと思っても、人間同士の付き合いは、それではないことにはならない。仲良くならないと、仲良くしていかないと、話が良い方向に向かわないですよ。

ただ、前にも言いましたけど、岩本さん（聞き手注：元隠岐島前高校のコーディネーター、現島根県教育委員会特命監・岩本悠さん）と何回も話しているし、一緒に飲んだりもしています。そういうのがないと、自分だけではできません。外部の視点から「自分のやっていることは間違っていないんだ」、「その方向でいいんですよ」ということがないと辛い。もちろん、樋田先生とのお話もそうですし。

それから、私が本当に運が良かったのは、文科省から何でかわからんけど電話があつて、「キャリア教育でやっていることの実践を発表しなさい」というようなこともありました。そういうことを言っただけでいいことは、やっぱり、「やっていることは間違っていないんだ」と受け止めます。本当に、運が良かったと思います。

——でもやっぱり、それは、先生のうまくいろいろな人と仲良くするとか、いろいろな人と信頼関係を結ぶとか、根回しをするっていうところがあつたから、そういうことが運が引き寄せられた、みたいなそんな感じですよ。

齋藤：なかなかそういうところは、わからんですけど。とてもいい人が、とても努力しても、うまくいかないことがいっぱいありますしね。



—— 県の高校改革担当と吉賀高校との、コミュニケーションの具合って、どんなだったんでしょう？

齋藤・それも、運が良かったことの一つです。担当者とは、私は仲良しなんです。彼が初任の学校に、私が先に勤めていました。その高校、当時大変荒れていて、荒れた学園ドラマの世界みたいな日常を一緒に過ごしました。だから、お互いに人柄はわかっています。吉賀高校のことを、「そういう事情があるんだ」とだんだんわかってもらって、それからは、定員を変えることも応援して下さったし、県外募集のことでも配慮してくれました。私がどういう人間かわかっているんですね。そういうことがわかってるといえるのは、とてもありがたいと思います。

—— 遅くまで、今日はありがとうございました。

報告② (特集) 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 吉賀高校の高校魅力化(1)

## 第20代校長熊谷修山先生(2016年度～2017年度)の語り

——キャリア教育では「何を」と「どこで」が  
リアリティとして重要になる——

青山学院大学 樋田大二郎

◇ 熊谷校長は、インタビュ時点では島根県立津和野高校校長であり、津和野高校で次々と高校魅力化改革に取り組んでいるところであった。インタビュは二〇二〇年二月一六日に地域人材育成研究会のメンバーが空港に向かう途中の益田市内の喫茶店で行われた。熊谷校長は吉賀町との縁が深く、妹さんは吉賀町内に住んでいる。教頭時代(二〇一二年度～二〇一三年度)と校長時代(二〇一六年度～二〇一七年度)の二回、管理職として吉賀高校に勤務した。

校長時代には、地元住民のほうから、こういう生産物(文化)があるけれど授業に役立つだろうかと提案がなされるような存在であった。なお、熊谷校長によると、地域の特色を活かした教育や地域課題解決型学習は吉賀高校は農業が盛んな吉賀町の状況を反映し、津和野高校は観光の町である津和野町の状況を反映しているというが、そのこと

は別の機会に詳しくお聞きしたい。

◇ 熊谷校長が吉賀高校教頭(二〇一二年度～二〇一三年度)から他校に異動して、校長として戻ってきたのは二〇一五年度であった。インタビュの冒頭で二〇一二年度の頃の吉賀高校のことを話していただいた。その話の中で、その後の吉賀高校の魅力化を方向付けることとなった「聞き書き」について、以下のように語っている。

(コーディネーター) Aくんがどうしても「聞き書き」やりたいて。これは面白いなと思って、魅力化の取り組みとして「聞き書き」をやりました。その時の吉賀高校の魅力化の取り組みは、部活でTシャツ作って中学生に配るとか、校名の入ったクリアファイル



を作ったりとか、ペン作っていたのかな？ 何かそういうネーム入りの、ノベルティグッズを作るような、とりあえず「魅力化」として何かやらなくちゃいけない、だから、お金があるからそれができるものを作ろうというような流れだったかな。 熊谷校長 インタビューより引用。以降、同じ。

このように「とりあえず『魅力化』として何かやらなくちゃいけない、だから、お金があるからそれができるものを作ろうというような流れ」の中で、「面白いな」と感じるところがあつて「聞き書き」は始まつた。

◇ 熊谷教頭（当時）が面白いと感じた背景には、おそらく吉賀高校以前の高校でのキャリア教育や進路指導の経験があつたと思われる。

推薦入試になつた時、一番必要なのは志望理由書なんです。志望理由書を生徒に書かせた時に、そのリアリティに何が入ってくるかというと、もちろん第一は将来の夢ですが、それと将来の夢を「どこで」やるかというのが非常に重要になってくるわけです。そうすると浜田高校の生徒たちが、「将来は」って言った時に「浜田で」っていうのがプラスされるわけです。われわれ教員が生徒に対して「これいいけどさ、これどこでやるの？」って訪ねた時に、生徒が自分で「将来はここ浜田でやりたいですね。」と素直に答えられるんです。

吉賀高校振興会総会で（聞き手注…後援会に当たる所）、私が「やっぱり子どもが将来Uターンするためのことを考えていか

ないといけないですよね。」っていう話をそこで最初にしたんです。そうするとサクラマスっていう言葉の持つイメージと、われわれが吉賀高校としてもUターンのをきちっと増やしていかないと、どんなにIターンの人が増えても、町が変わりましたではないけないという話をしました。そういう部分に対しては非常に共感を持っていただいたかなと思っています。だから、吉賀で私苦労した感じが全然ないんです。

◇ 熊谷校長は、生徒が将来の夢を持つこと、そしてそれをどこでやるのかを考えることが推薦入試の実績の向上に役立つたという。しかし、熊谷校長は志望理由書を書く指導は出口指導にとどまらせてはいけないと考え、キャリア教育の枠組みの中で推薦入試の指導を考えている。

キャリア教育です。将来像を、自分のキャリアの全体像を考えさせる。で、その将来という所に、「何を」というのと「どこで」というのが非常にリアリティとして重要になる。だからそこを考えさせる。そうすると意外に（地元）帰ってくるのではないかな？みたいな。結構浜田高校の時には「市長になりたいです。」という子もいたりするんで面白いなと思って、だからそこは案内楽しんで取り組んでいたところがあります。

やっぱり推薦とか使うとだんだん合格していきます。……でもその推薦というのは合格させるための推薦だった。……出口指導です。ところがやっぱりそうじゃなくて志望理由書というのも、

もっと将来像とかいろいろ考えていこうという感じは、そっちの方向にどんどん転換していったというか、こうしましょうというよりも、魅力化としてそうするしかない流れがありました。特に「転換するぞ。」というふうに転換した記憶はないけど、だんだん検討会とかやれば「こういうふうにやらせよう」とか。

◇ 熊谷校長は、キャリア教育としてアントレプレナーシップ教育を構想した。すなわち、高校魅力化に取り組む中（教頭時代は主として「聞き書き」）で、地元で生活する人にふれあうことで生徒のキャリア発達を促そうとした。ただし、熊谷校長は決して吉賀町内でのキャリアの夢を持たせることにこだわっていない。しかし、「どこで」という問に対して町内だと考える生徒は少なくない。また、関係人口となることだと答える生徒も少なくない。

生徒が授業で地域に出て行った（顔を見せた）影響や町や地域住民が高校を支援する場面が増えた影響は、新しい側面での地域の活性化をもたらした。

「聞き書き」というのが……これで子どもたちが地域に出て行くっていう形がスタートしたかな。これは部活とかではなくて、子どもたちの活動が地域の人の目にとまる。でもそのことで「聞き書き」ですから地域の方で語る人がいるわけです。その語る人たちも元気になるというような構図が少しずつ形となって出来上がっていきこうとしていて、それでやっぱり広く受け入れてもらえるようになったですかね。

◇ やがて、吉賀高校を応援する風土が形成されていく、この風土の中で組織されたのが吉賀高校応援隊である。この吉賀高校応援隊の事例は、地域学校協働の中では協力も対立もあること、対立の中で提起されたアイデアが実現されることがあることを示す事例である。「おらが高校」の存続・発展は、それだけ重要な関心事なのである。

吉賀高校応援隊については本誌掲載の第一九代齋藤校長インタビューの中でも「(応援隊)は、町との関係が難しくなりましたので、なかなかやりにくい面はありましたけども。ただ、住民の直の声、必ずしも町役場には行かない住民のいろんな気持ちとか、情報とかを吸い上げておられる人たちだったと思います。……町長選もあり、他にもいろいろな対立があったりしたので、感情的には難しかったですね。しかし、今思うと、あれだけけんかした相手の応援隊の人が言ったことを町が実現していますよね。これがすごいなと思いますね。」と語られている。

この吉賀高校応援隊に対して、熊谷教頭(当時)は高校を応援することと町を応援することがリンクしていることを訴えかけている。

高校を応援することがひいては町のためにちゃんとなるんだ、町の活性化に絶対につながっていくんだと、こういう文言を入れてほしいと伝え、それを入れてもらいました。だからそれはさっきのサクラマスもそうだし、振興会の時にUターンをとということも、高校の魅力化が町のためになるという点で全部共通していると思うので、そういう感覚で、皆さんに集まってもらったっていう、ここ結構重要だったと思います。

だけどその元をたどっていったら、結局「寮」や「塾」というのは応援隊の人たちが……町長さんにガーツ言って戦ってくれたからできたような面もあるので、だからそういう意味では私がない二年間って多分一番苦労されたと思うんです。私が行ったらもうできることになっていたので、「ありがとうございます。」という世界だし、最後町長さんも……「県が吉賀高校潰す言うたらなあ、わしは町営にしても、町立にしてもやっていこうちゃうくらい気持ちをもっととるんじや。」と言って、怒られとるのか、励まされとるのかすぐわからない感じだったけど、……結果的には寮もできて塾もできてという点ではこっちの望んでいることが完成されている。

◇ 吉賀高校は中高一貫教育(連携型)を募集対策の柱にした時期があった。四〇名の定員を町内四中学校からの特別選抜に割り振っていた(定員割れしていたので実質勉強がでなくても合格していた)。しかし、二〇一七年度入試からは四〇名定員の五〇%ほどを特別選抜枠とし、残りを一般選抜にした。

やっぱり「吉高来てよ。」っていうところは、荒れるから入学者は少なくなる。だから「来てよ。」って言うってちよつと増えるけど、その分余計荒れるみたいなの。そういうレベルでの波を繰り返していったということでしょう。……「中高一貫教育で誰でも入れるや。」っていう感覚が非常に強くて、それをずっと感じていました。何とかしなくちゃいけないみたいな感じはあつたんです。あれが大きな転機です。やっぱり齋藤先生が思い切って中高一



貫教育を五〇%の枠にされたというのがすごく大きかったと思います。

◇ つづいて、「聞き書き」の発展過程をお話しいただいた。最初は、「みんなどうやるかわからん、とにかくコーディネーターが言うように子どもら連れて行ってとにかく聞いて帰ってくるみたいな形をやったんです。」という状況であったが、そのあと今日のアントレプレナーシップへの発展につながる二つのポイントがあったという。

一つの分岐点は、「聞き書き」をやるのはいいけど、聞いて書くだけだったら知識が付くだけです。「へえー。」で終わってしまふ。だからある先生が「子どもらはそれでどんな力が付くんや？」っていう話をしました。「聞き書き」が二年目になる時に、彼が一年生の担任になるので、「聞き書きを返させてくれ。」というのを言ってきたんです。結局要は抽象化する作業とか、まとめるといような作業がないと子どもの力が付かないじゃないですか。それでその時に作ったのが吉賀町マップです。

もう一つ大きいのがそこからアントレプレナーシップです。「結局聞き書きしてどうするんですか？」っていう……話になった時に、吉賀町にこないものがあるってわかったんだったら、そのいいものを使って商売しようと考えました。……要はウターンしてくるのに、結局「先生仕事がないけん、帰られんわ。」っていうのが多いのに対して、「じゃあ、仕事自分で作ればええじゃん。」って言うためには、やっぱりアントレプレナーっていう言

葉自体も知った方がいいじゃないですか。それが啓発になり得るなと思ったので、だからアントレプレナーっていう言葉を敢えて残して、かといって起業だけではちよつと聞き書きの要素がなくなるので、アントレプレナーシップと、だからその時私は起業家精神を学ぶんじゃなくて、「起業家精神に学ぶ」としたのはそなんです。

◇ 熊谷校長は、学歴至上主義的教育観や産業主義的教育観を超えて、地域主義的な教育観を語った。かつての島根県の高校教育の「黄金期」には、生徒が東京に出て大企業や中央官庁で働くことを是とし、そうしないことが予想される生徒に対しても入試の学力や価値観を形成することを高校の役割と考える傾向があった。これに対して、「一つの責任」として、将来吉賀町に戻るための教育を考えることの重要性を語っている。

やっぱり将来吉賀町に戻って何かしたいっていう意思を育てるっていうのは一つの責任だかっていうふうには思っています。それは今でも津和野でも全然変わらないので、ただそのためには自分の出身地吉賀町に対して良さを知る、そして誇りを持つって重要だと考えていました。

そうすると良さを知るって、……重要なのは吉賀町の人と出会うっていうことだと思っていました。そうすると誇りを持つってどうなのかって言った時に、誇りを持つための仕掛けとして、吉賀町について自分の言葉で子どもが語る、子ども自身が語るって

重要です。だからアントレにしても聞き書きにしてもそうだけど、発表というのはずごく重要で、そしてそれをキャリア教育テーマみたいな形で町の人の前でも語る。

◇ 学歴主義や産業主義の観点からは一般に成績のよい生徒ほど都会で暮らすことを志向すると思われるし、実際に成績の良い生徒は大会の大学に進学し、大都会で生活してきた歴史がある。あるいは、大都会の大学に進学し、地方のエリートとして地方中核都市で生活したり、県の職員として県内各地を移動して生活したりしてきた歴史がある。ともすると、地元に残ることや大都市からUターンすることは自信のなさや挫折のイメージと結びついた。

しかし、高校魅力化に取り組む生徒はUターンを前提にしたり、関係人口となることを前提に町外への進路形成を行うケースが現れてくるようになった。

でもそれって誇りを持っていないと語れないかもしれないけど、語ることによって誇りを持つことはあり得るだろうっていう所はありますよね。……やっぱりいい学校でないとダメだし、だけれどいい学校だから誇りを持てるんじゃないかって、自分たちが積極的に関わっていくってどうか、いい学校にしておくことでいい学校になるっていうのがあるじゃないですか。

……自分がやりたいこととか、やったことをちゃんと自身持って発表できるようにしていったら、結局いい学校になるじゃないですか。それが誇りにつながっていくだろうっていう所は思ってますか。

いました。特にやっぱり西部の中山間地の子どもらってというのは、そもそもいい子は外に出て行くって感覚でいるから、そう考えたら古賀に残るってことはそれだけで自信をなくすような要因だとすると、もつと子どもらが自信を持ってくれるような、……自信を自然に持つような仕掛けを作っていく重要さをずっと考えていました。

なんとなく「もういいや、これでいいです。」みたいな感じで卒業していくような感じにならないようにするために、結局そういうアントレだとかをやるっていうことです。それは子どもらの能力の開発・開拓というか、何か育てるといえるのはこの子のこんな能力があるみたいなのがあわかってすることじゃない、そうじゃなくてこの子らどういう能力があるのか全然わからない状態というスタートで、そういうことをしていかないといいんじゃないかというふうに思います。

◇ ◇

### 1 吉賀高校の魅力化初期のこと

——本日はよろしくお願ひします。

熊谷…浜田高校に九年いたので教諭としては異動はそんなに多くないほうだと思っんです。ただ管理職になってやっぱり二年ごとにポンポン動いていますので増えました。それで矢上高校の最後の年、五年目

が平成二三年なんです。そこで魅力化が開始されているんです。ただし矢上はその時のⅡ期校なので、二三年にはまだ取り組んでいなくて、計画を立てなさいという段階だったんです。矢上高校では進路部長だったので、計画に携わったのがその年のいよいよ終わりです。二四年から吉賀ですので、魅力化のスタートの所から結構やらせていただきました。

—そのころのことを、もしわかれば教えていただきたいんですけど、吉賀はこの魅力化の話を受けたわけですけど、これは受けたいとか受けたくないじゃなくて指定されたようなそんな感じになるんですか？

熊谷…そこは、最初の吉賀が二三年にどうやって受けたかっていうのはわからないです。

矢上は躊躇したんだと思うんです。だから一年待つて取り組もうという形にしたので、その一年間で考えなくちゃいけないという所だったですね。吉賀は私の前任の教頭が飯塚先生で、太田校長先生ですから、何かやらなくちゃいけないという感じだったんじゃないですかね？

太田校長先生は吉賀の校長で最後三年やって終わられて、その三年目の所で私が赴任しました。

—先生が吉賀に行かれたのは、そつすると平成の？

熊谷…二四年です。



——二四年ですね？ 平成二四年ということは二〇二二年、高校魅力化がスタートした翌年に来られた。

熊谷…そうですね。二〇二一年から吉賀はスタートですので、私が行った時にはもうスタートしていました。

——そのころのことをお伺いしたいんですけど……。

熊谷…そうそう、吉賀は一人コーディネーターで先にいた人が、私が赴任した時にはもう異動していたんだけど、彼が吉賀を音楽の町にしたいという壮大な構想があつて、魅力化も音楽部を作ろうというので、ドラムだとかギターだとか、ごそつとそのお金で買っていると思うんです。だから私が教頭で行つて整理したのは、その音楽部の位置付けでした。多分校内の十分な合意もなくやっていると思うんです。「とりあえず、そうしよう。」ということのみんな買って、買ったはいいいけど、「音楽部つて何するの？」つていうような、行った時にはそういうレベルだったです。だから一応魅力化の中で音楽部の位置付けというのはちよつと整理しました。それからコーディネーターの方が代わつていて、男性Aくんつていう彼が。

——Aさんにはお会いしたことあります。

熊谷…彼がコーディネーターになつていて、

——僕、Aさんが初代だと思つていました。

熊谷…前に人はいました。私が行つた時にはAくんだったので、Aくんがどうしても「聞き書き」やりたいつて。これは面白いなと思つて、魅力化の取り組みとして「聞き書き」をやりました。それから、その時の吉賀高校の魅力化の取り組みは、部活でTシャツ作つて中学生に配るとか、校名の入ったクリアファイル作つたりとか、ペン作つていたのかな？何かそういうネーム入りの、ノベルティグッズを作るような、とりあえず「魅力化」として何かやらなくちゃいけない、だから、お金があるからそれでできるものを作ろうというような流れだったかな？ ただしサクラマスプロジェクトのサクラマスは、何さんだったかな？

——魚の人です、吉中さん。

熊谷…そうそう、吉中さんの発案で、サクラマスプロジェクトという名前は決めていたと思います。（聞き手注…吉中力さん。著書に『高津川不思議探検隊』、『魚酔の詩』があり、サクラマスについても書かれている。）

——二〇年前から実は言っていたつて本人もおつしゃっていました。

熊谷…そうそう。戻ってくるという意味では、すごくフィットするなと思つたので、私はそのサクラマスプロジェクトという言葉は積極的に使っていました。（聞き手注…海降型のヤマメの呼び名で大きく育ち遡上する。）

## 2 吉賀高校以前のキャリア教育・進路指導の経験

——各校の話聞いてると、高校魅力化は当初、お金はあるけど何に使えばいいのかよくわからないから、何かとにかく用具を買えばいいのかなみたいな、よくわからないことになってしまっケースも多々あったというふうな話も聞くんですけど。

熊谷…そうですね、まさにそうだと思います。それで、私、浜田高校、矢上高校の五年のもっと前、浜田高校で、最後に進路部長やっただんです。そうしたらその所で、ちょっとその辺は長くなってもいいですか？

——はい。

熊谷…いろいろあつて進路部長になってすぐの時から、推薦入試に取り組むことになったんです。そうすると推薦入試になった時、一番必要なのは志望理由書なんです。志望理由書を生徒に書かせた時に、そのリアリティに何が入ってくるかって言うと、もちろん第一は将来の夢ですが、その将来の夢を「どこで」やるかというのが非常に重要になってくるわけです。そうすると浜田の子たちが志望理由書を書いた時に、「将来は」に「浜田で」っていうのがプラスされるわけです。われわれ教員が生徒に対して「これいいけどさ、これどこでやるの？」って尋ねた時に、生徒が自分で「将来はここ浜田でやりたいですね。」と素直に答えてくれるんです。そういう経験があったものだから、矢上に行っても二年目の時に三年の学年主任だったんだけど、結構生徒が推薦出

願しているんです。その時にも結局生徒の書いた志望理由書には、「将来は地元邑南町で……」という言葉がたくさん出てくるんです。そうすると、これは何年も経ってんですけど、実は今矢上、邑南町の役場には当時のそういう子たちがすごく帰ってきているわけです。やはり生徒が自分で将来のことを語るこの意味があると。子どもたちが自分で将来こうしたい。「ここ邑南町でなんとかしたいです。」とか「役場で……」っていう言葉が嘘ではないという感覚があつて、私は生徒が志望理由書を一度書くことがすごく重要だと思ふようになっていました。そのあと、進路部長の時にも推薦でやっばり生徒が志望理由書を書いて、だからその年代の子も結構地元に戻ってきているんです。

そして矢上でも魅力化にちよつと携わっていたので、そういうイメージを持ちながら吉賀に教頭で行ったんです。そういうイメージがあるから、最初の年の太田校長先生の時の、六月にやっった吉賀高校振興会総会で（後援会に当たる所で）、私が「やっばり子どもらが将来Uターンするためのことを考えていかないといけないですよね。」っていう話を最初にしました。サクラマスっていう言葉の持つイメージと、われわれが吉賀高校としてもUターンをきちよつと増やしていかないと、どんなにインターンの人が増えても、町が変わりましたではいけないという話をそこでした。そういう部分に対しては非常に共感を持っていただきたなと思つています。だから、吉賀で私苦労した感じが全然ないんです。

——ちよつとよろしいですか？

熊谷…どうぞ。



——二つ話があるんですけど、推薦やろうってことになったのは、おそらくこれ二〇〇〇年の前後ですね？

熊谷…そうです。

——そうするとまだ島根県では、島根方式で、進学指導がかなり盛り上がっていた時期ですよ？

熊谷…そうです。だから結構国立大の数字とかがすごかったです。山間地以外で、要するに都市部の大規模校と言われる所で、当時私が行った時九クラス、途中で八クラス、八クラスになって、六クラスになる前に私は出たのかな？ そんな感じだったんですけどその中で、そういう規模の進学校で、推薦入試に、学校全体として取り組むなんて島根県ではなかったんです。ある意味すごく特殊なことをやっているって感じがしました。

——やるしかなかった？

熊谷…ただやるしかなかったです。

熊谷…結果的にそれはキャリア教育です。将来像を、自分のキャリアの全体像を考えさせる。で、その将来という所に、「何を」というの「どこで」というのが非常にリアリティとして重要になる。だからそこ



を考えさせる。そうすると意外に(地元)帰ってくるのではないかな? みたいな。結構浜田高校の時には中には「市長になりたいです。」という生徒もいたりするんで面白いなと思って。だからそこは案外すごく楽しんで取り組んでいたところがあります。

——はい。では、そのイメージで吉賀に戻ってきて、吉賀は部活のほうを活発にさせようとか、何かグッズでお金を使うとか、しているような状況だった。

熊谷…そうです、状況だったです。

——魅力化を行うことで、サクラマスのことを行うことで、進学実績とそれからUターンを増やすお話をその場所でなさったら、比較的に受け入れられたと?

熊谷…そうです。私はその点で苦労した感は全然ほとんどないです。

### 3 吉賀高校応援隊

熊谷…(応援隊のBさんは)すごく協力的で、何かそういう吉賀でこうしなくちゃいけないということに賛同してもらったっていうところもあって、職員の会議に出てもらって「先生方ありがとうございます。」なんてBさんがいきなり言われたというようなこともありました。その中で支援者は何かやっていかにかいけんという感じで、すごく高校に対して協力的でした。だから私の中では苦労したというような感じが無いんで

す。

——なるほど。

熊谷:また、私がソフトテニスの指導をしていたものだから、吉賀でジュニアのソフトテニスの指導にちよつと顔出す感じで行ってたら、別の支援者さんの子どももそこに入っていたんです。お子さんが中学生のその支援者さんと、「今吉賀高校はこうなんですよ。」ってその人に話していたら、彼がすごく熱い人で、「応援しよう。」っていう感じになつてくれて、BさんやCさんの声かけで吉高応援隊を作ろうということになりました。私が教頭の最後には高校でシンポジウムをしました。地域のの人に学校に集まってもらって、つながりの中で多くの人で「吉高応援隊作るぞ」と。で、吉高の応援隊ができて、吉賀高校に一回集まってまず状況を聞こうとか、その後にもワークショップやって吉賀を盛り上げるにはどうしたらいいかって話そうという会を持ってくださって、それで私が出たあとには教員と飲み会までやっているんです。

私が在職中に、吉高応援隊が吉高を応援しようっていうピラを作ってくれたんです。そうしたらそれには「吉高を応援しよう。」までだったんです。吉高を応援しようという会を作って、みんなで集まって吉高を応援しようまでだったんです。そこで私が、「吉高を応援することが町のためにちゃんとなるんだ」ってこれ入れてほしいと。「高校を応援することがひいては町のためにちゃんとなるんだ、街の活性化に絶対つながっていくんだ。」と、こういう文言を入れてほしいと伝え、それを入れてもらいました。だからそれはさっきのサクラマスもそうだし、振興会の時にUターンをとということも、高校の魅力化が町のため

になるという点で全部共通していると思うので、そういう感覚で、皆さん集まってもらったということが結構重要だったと思います。

——この段階で、もう吉高を元気にすることが町を元気にするんだというふうには、熊谷先生がおっしゃって、そのことが応援隊にいるような方のレベルでは了解して？

熊谷…そこに共感してもらったというのが大きかったと思います。

#### 4 聞き書き

——はい。応援隊のことを中心に当時の地域の状況をお伺いしましたが、ほかに当時の地域の状況で押さえておくことがありますか？

熊谷…コーディネーターが中心にやっていた「聞き書き」というのが、私が行った一年目なんですけど、これ聞き書き甲子園とか出たりしているんですけど、これで子どもたちが地域に出ていくっていう形がスタートしたかな？

これは部活とかではなくて、子どもたちの活動が地域の人の目にとまる。でもそのことで「聞き書き」ですから地域の方で語る人がいるわけです。その語る人たちも元気になるといような構図が少しずつ形となって出来上がっていくようにして、それでやっぱり広く受け入れてもらえるようになったですかね。だから柿木（地区）の奥のほうにも行ったりとかいろいろな方々のところに、夏なんかでも生徒が行くのを私も見て回ったりしたんですけど、とても面白いなと思ってい

ました。

——コーディネーターが始められたというのは、なんで「聞き書き」だったんですか？

熊谷…彼自身が、都会地出身の人で、田舎暮らしに強い関心があって、聞き書き甲子園が面白いということで関心を持っていたんじゃないかな。

ただ、それは主催がNPO法人だったと思うんだけど、その関係があったのかどうか。それが面白いということで、コーディネーターのAくん自身は地方に来てから、地方の素材をもっとクローズアップしたいという意識はあったので、「聞き書き」は面白いということをやったんだと思います。でもやったのはすごく正解だったと思うのは、そのことで生徒が地域に行くことが、吉賀町で一般化されたっていうのが重要だったです。魅力化とすればそうやって地域の人に生徒の様子も見ってもらって、吉賀高校を認知してもらおうというんですか。

それから吉賀高校の中高一貫教育（連携型）の完成がたぶん平成一八年ぐらいかな？ 当時はやっぱりいろいろ話を聞くと、中高一貫だから子供はみんな吉賀高校に行かなくちゃいけないというような強制的な制感があったようです。その強制的に対する抵抗感からか、あまり協力的でないような流れというかあったのかなというふうには思っていました。

そこでとにかく吉賀に行くからは、魅力化について議論もいろいろあったのですが、やっぱり中学生が来たいと思ってくれるような仕掛けを作っていく。その時に認知されるのは大事だから、さっき言っ

た「総合的な学習の時間」を使った「聞き書き」で子どもらが出て行って、「あ、吉高の生徒頑張っているね。」って言うようになるっていうのは非常に重要な要素だったと思うんです。

それから、ただ姿が見えるだけではなくて、やっぱり発表まで持つていくことによって「聞き書き」の対象になった人たちに学校に来てもらって、「こんなふうにとめました、どうでしょう？」って聞くような形の発表をするのがすごく大事で、「やっぱり吉高生徒頑張っているよね。」というのを少しずつ広げていくようなイメージだったです。

## 5 中高一貫教育

——私たちが昔の卒業生にインタビューした時に、その人の高校時代に結構な荒れ方をしてたということでした。中高一貫のころの荒れ方というのは昔から同じようだったでしょうか。

熊谷…ある程度ずっと、でしょう。それは私が若い時に勤めていた時にもいろいろありましたから。

——そうしますと一瞬荒れた学校が回復したということではなくて、ずっと教育が困難だった学校が変わったという、そういう認識でいいんですか？

熊谷…そうですね。(生徒の荒れは)波はありながら、やっぱり「吉高来てよ。」っていうところは、荒れるから入学者は少なくなる。だから「来てよ。」って言うってちょっと増えるけど、その分余計荒れるみたいいな。

そういうレベルでの波を繰り返していたということでしょう。

——今の吉賀高校は全然そんな雰囲気ないんですけど、そういう意味では魅力化が上手くいったのでしょうか。

熊谷…進路変更もないっていう話ですから今すごいですよ。

——魅力化導入した前後と校長先生になって再び赴任された時の両方についてお伺いしたいんですけど、学校の状況とか教員集団の様子とか、それから入学してくる生徒の様子はそれぞれどうだったのでしょうか？

熊谷…私が教頭で行った年が、女性Fが一年の担任だった時、

——女性F先生というのは今もいらっしやる女性F先生？

熊谷…そうそう、その頃はサッカーも結構力入れていたので、サッカーのいい子たちが来てくれるような流れがある程度できて、私が行ったのは彼らが一年生の時。ただ「中高一貫で誰でも入れるや。」っていう感覚も強くて、それをずっと感じていました。

——なんとかしなくちゃいけないという感じはあったんです。とはいえあの年はサッカーの子が元気で人数も入ってきて、体育のサッカーの教員が指導してくれていて、だいぶ熱を入れて中学高校のサッカースクールにも参加したりということまでつながりができて、それで……。

——県大会でいい所までいった時の指導者の方ですか？

熊谷…そう、だからあの時は強豪の私立高校とやって相手はBチームではあったけど、惜しくも負けたみたいない試合はしたんです。

その前の学年は少なかったです。二〇何人、いよいよ(統廃合の)ギリギリの所だったかな？ その段階ではまだ全員が中高一貫教育で入ってくる流れだったですかね。それで「勉強せんでもいいや。」という雰囲気があって、それでなんとかせにゃいけんと思っていました。私が教頭の二年目の時に、中高一貫教育の名古屋大学の付属中等教育学校が主催する、中高一貫教育の全国研究大会があって、その時に私が横浜国大の付属高校に行ったのかな？

その所でいろいろ発表を聞いていたら、神奈川で中高一貫教育をやっている学校で、中高一貫教育んだけど何人かの枠を確保しているだけのところがあって、その話を聞いて「あれ？ 吉賀高校も全部中高一貫にする必要ないんじゃないか。」と思って、戻ってきて齋藤校長先生に「中高一貫を五〇%ぐらいにしたらどうですか？」っていう話をしました。翌年齋藤先生が中高一貫教育を五〇%にするということを、中高一貫教育の中学の校長先生方にも了解をとって実際にされたんです、それは私が出たあとですけど。あれが大きな転機です。やっぱり齋藤先生が思い切って中高一貫教育を五〇%の枠にされたというのがすごく大きかったと思います。

## 6 先生方の高校魅力化への参加

——先生方はどうでしょうか？ 聞き書きなんかですとコーデイナー

ターの方が頑張っておられました。

熊谷…やっぱり最初は教員がよく指導していました。

——教員もなさっていました？

熊谷…「聞き書き」については、それはただ、ICレコーダー買って録音して、それを文字にただ起こすだけ。でも聞き書き甲子園って実際そうなんです。標準語に直すんじゃないくて、聞いたレベルをそのまま文字にするというか、「わしゃー、やれんかったいのー。」というのを、「わしゃー、やれんかったいのー。」って出すやり方だったんです。最初はみんなどうやるかわからず、とにかくコーデイナーが言うように子どもら連れて行ってとにかく聞いて帰ってくるみたいな形をやったんです。

それで次に分岐点があるんです。一つ分岐点は「聞き書き」をやるのはいいけど聞いて書くだけだったら知識が付くだけです。「へえー。」で終わってしまう。だからある先生が、「子どもらはそれでどんな力が付くんや？」っていう話をしました。「聞き書き」が二年目になる時に、彼が一年生の担任になるので「聞き書きを変えさせてくれ。」というのを言ってきたんです。結局要は抽象化する作業とか、まとめるというような作業がないと子どもの力が付かないじゃないですか？ それでその時に作ったのが吉賀町のマップです。大きなマップを作ったんですけど、それが、私が行った二年目の時です。

ただ聞いて書くだけじゃ子どもの力が付かないから、もうちょっとまとめるような作業をして、地図に落とし込むことをやりました。そ





れはもう「聞き書き」と言ったら失礼だから、『古高版聞き書き』っていうことにしよう。」っていうような感じでやりました。これ一つのは分岐点です。

そこから「聞き書き」が変わっていくわけです。もう一つ大きいのが「聞き書き」の次のステップのアントレプレナーです。「結局聞き書きしてどうするんですか？」という話になって、「じゃあ、二年目どうする？」って話になった時に、「同じことしても仕方がない。」ということで、私が浜高の進路時代に広島大学に一週間缶詰になって聞かされた話の中とか、進路指導の全国大会で、アントレプレナーで小学生が枯れ葉を集めて肥料にして会社作って、それで売っているっていう話が面白いなと思っていました。だけど到底教員だけじゃできないと思うってたんですけど、それで次のステップ、吉賀町にこないものがあるってわかったんだったら、そのいいものを使って商売しようと考えました。商品開発とかそういうことをしたらどうだっていう話で、ちょうどその時に女性Gさんが来てくれたんです。アントレプレナー教育ということで、『アントレプレナーシップ教育』っていう言葉自体もちょっと取り組みの名前としては非常に不自然なだけ。要はUターンしてくるのに、結局「先生仕事がないけん、帰られんわ。」っていうのが多いのに対して、「じゃあ、仕事自分で作ればいいじゃない。」って言うためにはやっぱりアントレプレナーっていう言葉自体も知ったほうがいいじゃないですか？それが啓発になり得るなど思っていたので、だからアントレプレナーっていう言葉を敢えて残して、かといって起業だけではちょっと聞き書きの要素がなくなるので、アントレプレナーシップと、起業家精神を学ぶんじゃないかって、「起業家精神に学ぶ」としたのはそこなんです。

ただ本当に起業だけじゃなくて、いろんな所で無から有を生み出すような精神まで持ってくれたらなど、そういうふうに考えたのがそこです。ですから「ただ起業しましょう。」じゃなくて、そこで接遇の研修も入れて、女性Gさんが非常に活躍してくれました。それから男性Iさんっていうアジサイを作っておられる方がいて、私が教頭の二年目になる時、もう女性Gさんとすぐに二人でその男性Iさんのビニールハウスを訪ねていって、「学校でこんなことを考えているんで、ぜひ脱サラして起業したんやっという話を生徒にしてください。」ってお願いしました。

それから島根県内のある町で古本屋をやっていた男性がいますよね？ その方にも最初に来てもらいました。それがスタートだったかな？ 「聞き書き」一年目でやっていいもの知るんだから、二年目は『アントレプレナーシップ教育』でそれを使って何かをすることで、生徒の能动性・主体性を引き出そうと。そうすると子どもたちが「吉賀町ってこないい所があるんですよ。」「じゃあそれを使ってまた商品開発とか、観光開発だとかそんなことをしよう。」「っていうことになる。二年にビジネスコンテストに出したんです。

——ビジコンですね？

熊谷：はい。それで、女性Fさんのクラスの子どもらを二組は私が見て、一組は女性Fさんが見ました。女性Fさんが指導したほうは、都市部の付属の市立小学校受験があるじゃないですか？ そのお受験のためには体験が重要だと、それを吉賀でやって、それを旅行会社と一緒にやって誘致してというようなビジネスアイデアを考えました。私は男性B

さんの娘さんとチームだったので、米がいいので米をなんとか売ろうと、そうすると結婚式の時に大体やるじゃないですか？

——生まれた時ですか？

熊谷：そう、生まれた時の体重分の米を用意して、それだったら引き出物みたいな感じで配ったりもできるから、いいんじゃないかというアイデアを出したんだけど、私のほうは落ちて、女性Fさんのほうはトップ一〇〇に入って表彰もされたのかな？ それが授業とは別にやったんだけど、でもアントレプレナーシップの最初のスタートとしては面白いですよ？ 「こんなふうにやるんだ。」という感じで、それ結構インパクト大きかったと思います。

——それが二〇一三年度ということになりますか？

熊谷：なります、二〇一三年にそれをやりました。で、『アントレプレナーシップ教育』というのはいくつかをやっていくんだというのはいくつか知ってもらったかなって思います。そうするとそれは町にとってもいいじゃないですか？ リアルタイムでもいいけど、将来子どもたちがこういうことを吉賀でできるかもしれないと言って帰る気持ちになるという点でも動機付けにはしなないかなという所です。

## 7 高校魅力化と高校教育目標

——それでは校長先生が赴任した当時すでにあつた、吉賀高校の教育

目標と、高校魅力化の目標、例えば推薦入試に力を入れようとか、それから従来型の学力とは違う学力を付けることでリターンを促進させるというふうな話でしたけど、従来型の学力と高校魅力化の学力の関係はどのようでしたか。

熊谷…男性Cさんの娘さんが広大に通ったんです。

——広大に、推薦で？

熊谷…いえ、一般で。それは教員皆で応援したんだけど、それがあつてすごく感謝されているんです。吉賀高校の進路指導に対して、男性Cさんはそれが実はスタートなんだけど、その時はまさに従来型です。偏差値のみ、だから一般入試で合格しているので教員皆で添削したみたいな形なんです。そのあとはもう推薦やAOに挑戦するべきだということ、かつては本当に何年かに一人国公立大つてというのが、段々合格していきます。それはアピールしていました。齋藤校長先生の前の太田校長先生の時からそれは増えて来ていたのですが、でもその推薦というのは合格させるための推薦だった。

——出口指導の？

熊谷…出口指導です。ところがやっぱりそうじゃなくて志望理由書というの、将来像とかもつといういろいろ明確に考えていこうという方向にどんどん転換していったというか、こうしましょうというよりも、もう魅力化としてそうする流れがありました。特に「転換するぞ。」と

いうふうに転換した記憶はないけど、段々検討会とかやれば「こういうふうにやらせよう。」となつていった。だから校長の最後の年は医学部の挑戦もありました。ある生徒の時はみんなから無理じゃないかってあつたけど、本人やりたいんだつたらやればいいんじゃないっていう感じでやりました。すべてが成功した訳ではないですけど。

## 8 目指す高校像

——先生が考えていた高校生像、どんな高校生像だったんですか？あるいはどんな将来のキャリアを想定されてましたでしょうか？

熊谷…吉賀高校ですか？

やっぱり将来吉賀町に戻つて何かしたいっていう意思を育てるっていうのは一つの責任だとは思っていました。それは今でも津和野でも全然変わらないので、ただそのためには自分の出身地吉賀町に対してその良さを知る、そして誇りを持つって重要だと考えていました。

その良さっていうのは例えばお米が美味いとか、それも重要なんだけど、それ以上に吉賀町の人と出会うということが重要だと思っていました。そうすると誇りを持つってどうなのかって言った時に、誇りを持つための仕掛けとして、やっぱり吉賀町について自分の言葉で語る、子ども自身が語るって重要です。だからアントレにしても聞き書きにしてもそうだけど発表というのすごく重要で、そしてそれをキャリア教育デーみたいな形で町の人の前でも語る。

でもそれって誇りを持っていないと語れないかもしれないけど、語ることによって誇りを持つことはあり得るだろうっていう所はありま



すよね？ そういう所は吉賀高校の生徒像として、これは吉賀高校OBである中学校の先生と話していると非常に良くわかるんだけど、彼は自分の高校時代荒れていたとマイナスの言葉が出る感覚がすごく良くわかるわけです。ところが吉賀高校が私の時に志願倍率が夢の一倍を超えたことがあったんです。一・二倍っていうのが出た時に一番喜んでくれたのはその先生なんです。自分の高校に誇りを持つってどういうことかなっていうのは、その先生と話しているとすごく良くわかります。やっぱりいい学校でないだとダメだし、けどいい学校だから誇りを持てるんじゃないかって、自分たちが積極的に関わっていくっていうか、いい学校にしておくこといい学校になるっていうのが大切なのではないかと思います。

けど子どもたちに「いい学校にしよう。」なんていう責任はいつでも負わせたことなく、学校生活の中で自分がやりたいこととか、やったことをちゃんと自信持って発表できるようにしていったら、結局それが誇りにつながっていくだろうなっていう所はずっと思っていました。特に島根県の西部の中山間地の子どもらっていうのは、そもそもいい子は外に出て行くって感覚でいるから、そう考えたら吉賀に残るってことはそれだけで自信を無くすような要因だとすると、もともと子どもらが自信を持つてくれるような、「自信を持って。」って言うんじゃないかって、自然に自信を持つような仕掛けを作っていく重要さをずっと考えていました。

そうするとメディアに出ることも大きかったです。やっぱり発表の所なんか新聞に出たりしてすごく大きかったと思います。一番は吉賀高校の生徒であることに誇りを持って欲しい、自信を持って欲しいです。県外募集っていうのはその意味があるだろうと思っていて、あれ



は強調しました。ほらほら、こんなに県外から来てくれるんだよ、地元の人もそんなにすごいものがあるって思ってたなくて、小さい町で何もなくて言ってるけど、よそからこれだけ来てくれるんですよ、こんなに来てくれるってことはいい所だと思って来てくれてるんですよってという言い方によって、それを刺激して地元の子が自信を持ってくれるようになった。結構意識しているんな所で語ったりはしていたかな、地域の人にも語りました。

それでもう一つは吉賀高校の生徒であるっていうことに対して自信、誇りを持ってもらうためにポロシャツ作ったんです。街中見ていろんな人がポロシャツ着ていたら、「俺吉賀です。」って言えるじゃないですか？ 役場の人だって吉賀高校の卒業生だって言いにくい世界じゃ絶対にいけないわけで、そうするとああいうものを、もうほんと安く、実費だけで購入してもらって浸透させていって、どこ行っても「あれ、そのポロシャツどうしたんですか？」みたいな話になって、視覚的にも浸透していく、そうしたらいろんな所で「吉い高」（聞き手注：吉い高はTシャツの文字）なんていうのを見たら子どもらは自信持つじゃないですか。「あ、みんな着てくれてるんだ。」っていう。これは絶対効果あるなと思って津和野でもやっています。

——そうなんですか？

熊谷…そうです。津和野ではウィンドブレーカーも作っています。そういう意味では一応意識と行動とは一貫しているつもりなんですけど。子どもが自信を持つ、誇り持つことは、吉賀高校出てもちろんとこういう仕事就いてキャリアがしっかりするっていうのは非常に重

要だということと、それから実は資質、能力については埋もれていると思うんです。自信がないから「もういいや、もうだめです。」とかってそういう感じになる子たちが多いので、だから開拓・開発をしなくちゃいけないと思うんです。それってやっぱり先ほどの誇りを持つってことにつながっていくんだらうけど、現状として結局自信がないから積極的にチャレンジしないから、気付きもしない。なんとなく「もういいや、これでいいです。」みたいな感じで卒業していくような感じにならないようにするために、結局そういうアントレだとかをやるっていうことです。何か育てるといえるのはこの子はこんな能力があるというのがわかっていてすることじゃない、そうじゃなくてこの子らどういう能力があるのか、もう全然わからない状態というスタートで、そういうことをしていかないといけないんじゃないかなというふうに思います。

——いわゆるカリマネとかの関係があるんですけど、どんなふうにされましたでしょうか？

熊谷…これは難しいですけど吉賀ではあまりカリキュラムマネジメントまでできていなかったかなという感じはあります。だから内容的に「じゃあ一貫してこういうことをやりましょう。」はなかったと思うんですけど、ただ、吉賀の時代から「社会に開かれた」というのは保護者さんにもPTAとかで話していたと思うんです。それは、かといって英、数、国全部開くってなかなか難しいから、「アントレなんかでやっているというのは社会に開かれていますよね？」っていう言い方をしていて、それから「主体的、対話的で深い学びにつながる、対話



のスキルって結構こういうアントレとかで付けられるんじゃないんですか？」というところで、それはPTA総会なんかで言っていました。「こんなことを目指しています。」と、学力観も三要素は、これは吉賀でも言っていました。吉賀ではとにかく男性BさんがPTA会長の時から、私が教頭の時からだけど、「学校のこと良くわからんからPTA総会で話してくれ。」って言われてずっと私が話していたので、そこではそういう学力観、学力の三要素のことも言うし、社会に開かないといけないですよっていうことも言ってきました。そして校長になってから主体的、対話的で深い学びの重要さと、対話のスキルは授業だけではなかなか難しいけど、『アントレ』とかでいろんな人と話すことによつて磨くことができるというのは言えていたと思うんです。ただ、内容的にカリキュラムマネジメントとしてはあまりできていないかなっていう感じはしていました。

## 9 高校を取り巻くコミュニティの状況

——誇りを持たせる、自信を持つ仕掛けをする等の観点からして、人、財政、行政、あるいはコミュニティの状況は当時どうだったんでしょうか？

熊谷…私は協力者がいたことで、つまり応援隊があったことでそんな苦労していないので、だけど前任の齋藤校長先生とかはちょっと苦労されたかなという所はあります。

——応援隊と学校と行政というの、どついうふうに調整するかって

いうのは、初期の頃は苦労されたということでしょうか。

熊谷…そうですね。齋藤先生が苦労されたんです。だから私全然苦労してないんです。私が校長で戻った時には寮ができることになっていました。それからその年に塾も作らにゃいけんという話になっていたので結局苦労されたのは齋藤先生なんです。

だけどその元をたどっていったら結局寮や塾というのは、応援隊の人たちが振興会の総会とかで町長さんにガツ言つて戦ってくれたからできたような面もあるので、だからそういう意味では私がいない二年間って多分一番苦労されたと思うんです。私が行ったらもうできることになっていたので「ありがとございます。」という世界でした。

最後、町長さんも引退される直前だったけど、関西だったか関東だったか吉賀会というのがあって、吉高だけじゃなくて吉賀会なんですけど、参加した時に町長さんが、「県が吉賀高校潰す言うたらなあ、わたしは町営にしても、町立にしてもやっついこうちゅうくらいの気持ちを持つとるんじゃない。」と言つて、怒られているのか、励まされているのか全くわからない感じだったけど、町長さんもそこまで言ってくださったので、すごく感動したのを覚えてます。確かに取り組みを推進するという点では最初なかなか動かかなかつたけど、結果的には寮もできて塾もできてこちらの望んでいることが完成されている。

ただそのイメージは、実は男性Cさんとかと私、教頭時代にすごく語っているんです。コーディネーターのSさんにも「NPO法人作つてさ、生徒らのアントレの内容をNPO法人が引き受けて、それを実際に事業にして儲けた金で塾運営できるといいですよね。」という話をしていました。男性Cさんらにも、「あとはもう県外募集することにな

れば、やっぱり寮と塾は必須だよな。」という話もして、シンポジウムでもそんな話が出ていたりして、それで応援隊の人らが「寮をなんとか作ろうや。」っていうふうに戦ってくださった。だから私は、けしかけといて大事な所いなくて、戻ってみたらできていたみたいな、そういう意味ではすごく楽をしました。

それからコミュニティという点では、「聞き書き」で公民館を中心にいろいろ手助けをしていただいて、少しずつ理解が進んで行ったところがすごくあります。男性Eさんっていう元同窓会長さんが公民館の館長で、そこ一緒にやったりとか。ただなかなか学校近辺の人は子どもがウロウロしたりするので、あんまり評判の良くない所があったかもしれないです。逆に見えすぎて。

——当時教育委員会はとうだったですか？

熊谷…教育委員会は……。

——今はもう教育委員会がすごい「やりましょつ。」という感じで、参加してくれています。

熊谷…そうですね、それはありがたいことです。

——去年はもう河原で教育委員会が中心になって中、高校、大学生が大サバイバルカレー作りアンド地元の若い人の人生を聞く会みたいなのをしました。

熊谷…それはすごいですね。私がない間が石井教育長さんで、私が教頭の時には石井さんが企画課長でした。部活帰宅バスは石井さんが作ってくれたんだけど、私と石井さんと一緒に話していて「よしやるう。」って石井さんが言ってくれて、部活帰宅バスになってからすごく生徒の利用頻度が上がっていると思うんです。石井さんが教育長になって積極的だったのかなとは思っていて、だからその時でしょう、寮も作るうという決断があったのは。

## 10 評価の視点

——それでは次お伺いします。生徒の学びをどのような方法で、基準で評価をされたのか？そしてそれは従来からの大学進学、出口の結果で評価するような高校教育の評価とどう違っていたのでしょうか？

熊谷…難しい所です、やっぱり評価というのはいつまで経っても。私は数字的に評価するというのは、なかなか魅力化についてはそぐわないだろうとは思っているんです。だから例えばもし数値で言うならば今の吉賀高校、いわゆる不登校みたいな子はいないわけでしょう？これは最高の評価になると思うんです。すごくいい状態だと思ってるんです。津和野高校でも現実はいまですけど、人数が増えれば当然絶対値は増えます。それでもやっぱり子どもが学校の中で楽しく過ごせている、やる気を持って過ごせていると不登校少ないですよ。それは結構重要な指標になるんだらうなと思ってます。それから県外からもそうやってきちっと目指してきてくれるというのは目に見える数字だらうなと思っています。

それから、津和野高校の例で言うと国立大の指標が合わなくなっているんです。関東から来てすぐ活動した子が有名私立大を目指しているという、だから今年も残念ながら青学には受からなかったんですけど、立教、法政、立命大に合格しました。テレビで取り上げられた子が立命大、それから動画を作ったもう一人の子が立命大に行った。そういうような志向がすごく出てきていて、今までの国立大何人という指標では測れなくなってきたりかなと。それはそうですよね？例えば立命大に行った子なんて三年間うちで過ごしているけど、埼玉県の川口だから家から通える大学なんです。そのほうが安くつくっていう感覚だから、すごい理にかなっていますよね？ やりたいことを見つけて地元に戻って、SDGsなどもっと勉強したいって言うってすごくいい形だと思うので、従来の指標で考えるところならば、津和野高校は国立大の比率はむしろ減っているっていう所です。

ただ吉賀高校の場合にはまだまだ吉賀高校からでも国立大へ行けるよっていうのは地元へのアピールがあるので、これは重要なんだろうなと思います。ただしそこに、ただ数字だけではなくて、何を学びに行くかという中身が問われてくるだろうなという気はしました。今の吉賀町の動向としてやっぱり勉強して進学をバリバリ目指したいって言ったら都市部の高校に行くっていう、そういう子を取り込まなくちゃいけないってことになると、吉賀高校であれだけ楽しもうにやっついてちゃんと国立大に行けたよねっていうのは非常に大きな指標になるだろうと思います。今年も広大に行く彼女が、生徒会長までやった子が、彼女が行った……。

——Tさん。

熊谷・Tさん、そうそう、Tさんが行ったなんて、すごく重要な指標だろうな、しかも推薦AOで行った子かな？

——AOだったと思います。

熊谷・はい。すごく重要な指標、それが全国にというより地元に向かっですごく重要な指標であることは、これは間違いないです。しかし、単純に数字でというよりも、その一つ一つの意味が問われてくるのかなっていうふうには思っています。だから国立大何人行ったというよりも、こういうことを学んで、こういうやりたいことを見つけて、それでこういうことを学びたいと言って大学に行っただんですっていう話のほうがより意味を持つような感じになってきたかな。

——一点、聞いてもいいですか？ インタビュの前半で学校適応の話しを教えたいたんだんですけど、その吉高と津高それぞれ新しい魅力化が入る以前の状態が、位置付けが違うとは思ってますけど、それぞれで始まったことによって、学校適応にそれぞれ変化があったでしょううか？

熊谷・変化はあったと思います。そもそもそれまでは吉賀高校は、地元の子が入学してくるだけだったですから。津和野高校もそこは同じ条件だったと思います。それで、魅力化が始まった時に入学してきてやっぱり不適応を起した子がいたらしく、進路変更したと聞いています。



——それは県外生ということ？

熊谷…そうですね、県外生。吉賀も最初はそうでした。県外募集がスタートした時の、結局男の子が辞めたんです。

寮に移ってから、やっぱりちょっと適応できない県外から来た男の子が。それからその次の年も、県外から来た子が辞めて。そういう意味では魅力化が始まって質が変わってきているかな？ 魅力化が始まってから、生徒募集をするときには、「小さい学校で、和気あいあいとしていて、一人ひとり大事にしますよ。」って募集するわけです。そうすると、やっぱり「大きい学校で、ギクシヤクしていて、どちらかというと埋もれている子」が、いろいろなことをリセットする気持ちで希望してくれる度合いが高いんです。しかし、そういう子は、中学時代にすでに不登校を経験している場合が多くて、高校入学後と同じような状態になることもあるわけです。

——町内生にとっても魅力化への転換というのはプラスに働いていまずでしょうか。

熊谷…それはめちゃめちゃ働いていると思います。私は、当初から県外生を受け入れると、中学時代に不登校などを経験した生徒が必ず一定数いることは受け止めなければいけないと言ってきたんですが、実際にはむしろ県外からはそういう子の方が多かったです。ところが、高校側も慣れてくると、そういう子への対応も次第にできるようになるんです。町役場でも高校支援係の人が丁寧に対応してくれたり、保健

師さんを派遣したりしてくれて。そうすると、現実には中学時代に不登校を経験した子も、学校を休まずに通えるようになるんです。そうなれば、学校としても落ち着きがあるということになりますよね。私もそれはPRに使っていたということもありますが、町内でもそれが評判になれば、地元の子どもたちにとっても「いい学校」ということになりますよね。

ただ、津和野の場合、県外から地域で活発に活動したいという子が入ってくるようになって、地元のおとなしい子がむしろあおりを受けて、不応を起こしているような面はあるかもしれませんが。

## 11 コンソーシアムとプロジェクト会

—— コンソーシアムとプロジェクト会について聞きたいんですけど、コンソーシアムというのが最近の言葉なので、当時は振興会ですかね？

熊谷…はい。

—— は、どんな感じだったんでしょう？

熊谷…今がよくわからないですけど、当時は振興会は、これは非常に難しく町長さんが会長でやっている大きな組織については結局実態がないというか、総会だけやって応援団としては集まってもらったのは非常に意味があったけど、男性しくんだって役場の囑託職員じゃないですか？ 男性Eくんだったって教育委員会だし、だから実態がないん

です。それは、また振興会の会長が男性Kさん、同窓会長で町から振興会にお金が出るんだけど、なんか二本立て三本立てのような感じで、非常にわかりにくさがあったんです。

—— プロジェクト会のほうがもうちょっと実態があったということですか？

熊谷…そうですね。プロジェクト会のほうが、吉賀町でやっぱり大きかったと思います。今でも毎月開いていると思うんですけど、

—— なんか今月が一〇〇回目になると聞いています。

当時の校長先生の役割というのはどんな役割でしたでしょうか？ プロジェクト会とか振興会とか……。

熊谷…私は積極的に提案していくほうなので、あれやりましたよ、これやりましたよ。教頭時代もそうですけど、例えば中高一貫ロードレースなんて当時の体育の男性Nさんと一緒にやるんだけど、その時に「どうですか？」って言って多分提案したのは私だったと思います。校長になつてからも全体を見渡して必要なことを「やりましたよ。」って言って、吉賀高校にも、吉賀町にも良くてこののを一番見える立場にいたんじゃないかな。その立場からこういうことができたらいよいよねって夢であっても語っていたと思います。もちろん、できていないことも山ほどあります。だけどそういう姿勢ではいた。そしてその提案ができるために、さっきの男性Bさんや、男性Cさんともそうだけど、私自身が情報の結節点というか、外と内との結節点というイ



メージだった。渉外担当のような感じで。そうするとその中でやっぱり学校運営上は私自身が何らかの決裁をしなくちゃいけないんだけど、その時にも情報を持ちながら関係者と「こんなんでできるだろうか？」って話していました。中高一貫ロードレースも今、結構定着していますよね？

キャリア教育デーは大学の先生方においていただいた。それは齋藤先生の時もそうだったかもしれないですけど、中学生の発表も入れて、高校生だけじゃなくて、先生には高く評価していただいたりしたじゃないですか？ 吉賀中の生徒だけでも「どうだろうか？」って言うって、要は中高一貫やっている以上は中高一貫で何かやったっていうのを、体育的にはロードレース、文化的にはキャリア教育の発表会のように「こうなっていたらいいよね？」っていうのを。

私は、その時に急いで呼び掛けて全部（の連携校）でできないとダメだって発想持っていないので、できる所からまず一回実施することが重要だと思っているので、そういう突破口を開いていく。だからみんなにプレッシャーかけないように、吉中だけで十分だよな。」っていうレベルで発想して提案していったかなという感じですよ。だからその時に、根底にはこっちがこういうことをやっていたら役場が動かざるを得なくなるようなことを考えながら、小さい突破口を作っていくっていうスタンスでやってきました。

## 12 コーディネーターの役割

——あともう一つ聞いておきたかったのは、コーディネーター制度というのが先生の教頭時代からあって、段々定着していくわけ

ですけど、先生の時にはどんなふうな形で考えて、どんなふうに変化させていきましたでしょうか？

熊谷：吉賀時代は、女性Gさんが最初にコーディネーターじゃなくて進路支援の形で入ってくれたんです。その時は、私はもうコーディネーター的な役割をしてもらおうと思っていたので、平成二五年に。だから私は女性Gさんについてはバックアップは私がするので、方向性を話して、こんなことをやりたいって全体的な目標があるから、それを実現できるようにとにかくやってくれということで、具体的な計画なんかも任せてやってもらっていました。

それから吉賀が今どうなっているかわかんないですけど、私が出る時には、教頭と主幹教諭がいて、ベシッくなれば教務の業務、それから総務の業務、進路指導の業務、そういう所の統括は教頭、それに対して生徒募集というような「魅力化」で新しく加わったものの統括は主幹教諭で、それは総務部長だっというふうに置いて出たんです。津和野でも今年度から改めて同じように、ベシッくな業務は教頭で、魅力化ということで生徒募集とか個別の対応なども主幹教諭がやっています。しかもうち三人いるコーディネーターの統括が主幹教諭だと。だからコーディネーターが「学校どうなつとるんだろうか？」「あれやりたいんだけど、これやりたいんだけどどう提案したらいいんだろうか？」といういろいろ悩んでいた所を、統括を主幹教諭にしたので、それまではコーディネーターが職員会議に出させてくださいという形だったのが、もう主幹教諭から全部情報が伝わるし、何か提案したい時には主幹教諭に「こんなことをやりたいんだけど。」って言って、主幹教諭が運営委員会とかに提案してくれるから、職員会議でなくて

もよくなって、逆に自由度が高まった。だけど情報はちゃんと伝わるようになっているっていうふうにはなっていると思います。

——本日は、お忙しいところをありがとうございました。今後ともよろしく願います。



## 報告③

（特集）各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 吉賀高校の高校魅力化（1）

## 第21代校長渡部敏郎先生（2018年度～2020年度）の語り

——（地元の）吉賀町にとって吉賀高校はどうあるべきか

常に考えながらやっています。——

青山学院大学 樋田大二郎

島根県立吉賀高等学校第二二代校長の渡部俊郎先生（二〇一八年度・二〇二〇年度）に対するインタビューは二〇二〇年二月一三日、アンブレプレナーシップ教育の発表会の終了後に行われた。

従来の発表会は、選ばれたチームが前に出て行う形式であったが、渡部校長の代からはすべてのチームが中・高校・町民を町の体育館に招待してポスターセッションの形式で行うようになった。

渡部校長の前任校は島根県立出雲高等学校であり、出雲高校は文科省のSSHとSGHを同時に行う高校で、渡部校長は教員集団をとりまとめ運営を担ってきた。

渡部校長が赴任した二〇一八年度は、吉賀高校の高校魅力化・活性化事業が二〇一一年度からスタートしてから七年が経過し（第三期の二

年目）、二〇二二年度に聞き書きが始まって六年が経ち、聞き書きから発展したアンブレプレナーシップが二〇一三年度に始まってから五年が経ち、島根県の「地域系部活動設置促進事業（島根の未来実現事業）」（二〇一四年度・二〇一五年度）の助成を受けて吉高地域クラブが始まって四年が過ぎていた。同事業は名称を変えて二〇二〇年度まで実施された。ハードの面でも町の支援で寮（名称は交流センター）と公設学習塾（名称は吉賀塾ネクスト）がスタートして一年が経っていた。そして、後述するように渡部校長の赴任の年から、高校魅力化の主幹教員が配置されるようになった。このように主要な取り組みだけ見ても、毎年のように新しい取り組みが開始されていた。

◇ 渡部校長は、赴任時の吉賀高校の状況について次のように語った。

私の仕事とすると、そのセンターとか、よしか塾とか、吉賀町や町の皆さんとの関係を円滑に軌道に乗せていくような役割を果たすことが求められていた状況でした。……本校の高校魅力化の柱とすると、総合的な探究の時間を利用したアントレプレナーシップ教育と、全校生徒が所属する地域クラブ活動です。これ地域に出向いて行って、地域と一体となって学校生活を創っているというようなのが、生徒の状況でした。(インタビューより引用。以降同じ)

◇ 前述のように渡部校長の赴任に合わせるかのように、島根県では高校魅力化の主幹教諭の制度が始まったが、渡部校長は次のように、主幹教諭を位置つけた。

主幹教諭の授業時数を週四時間に抑えて捻出した時間を、生徒募集やアントレプレナーシップの総括者として、まさに魅力化事業の推進責任者として動いてもらっています。その成果は絶大で、県外からの志願者への手厚い対応が可能となり、またアントレプレナーシップ教育は更なる深まりを見せています。ここ数年で生徒にとってより魅力的な学校になっていると思います。

◇ 渡部校長は沿岸部の地方中堅都市に位置し有名大学への進学実績を誇る出雲高校から中山間地域の吉賀高校に異動して、地元「吉賀町」として吉賀高校はどうあるべきかは常に考えながやっています」と語る。

魅力化事業が進んでいって、県の主導で町と一体となった高校魅力化が進むようになり、町の支援も手厚く定着しています。だから県立高校だけれど、実際には町からの手厚い支援をいただいているので、これはもう町の発展を無視しては県立高校だと言って、高校が町とかかわらないというのは、今の島根県はそういう時代じゃありません。吉賀町にとって吉賀高校はどうあるべきかは常に考えながやっています。

◇ 渡部校長はアントレプレナーシップの活動について、吉賀町にとつての吉賀高校を考える中では、生徒が広い視野をもつこと、自分の適性や能力を育てたり見極めたりすることが大切な課題になるが、「このアントレの活動つてすごく役に立っています。」と高く評価している。

小規模校なので、視野が狭くなるので。できるだけ広い視野をもつて欲しいなと思っています。町内の子はずっと子どもの頃からみんな知り合いで、かなり閉塞的な人間関係で上がってくるわけです。良いところは良いところですがごくあるんですけれども、外に向かって視野を広げにくいという一面があります。……いろんな可能性、いろんな人たちと出会って、視野を広げて欲しいです。高い視点と言うか。自分の適正や能力も見極めて欲しいです。そのためには、結構、教室の勉強はもちろんなんですけど、このアントレの活動つてすごく役に立っています。生徒たちの言葉のなかに、「役割分担ができるようになった」とか。「自分の強みはこういうことを広めること」、「しゃべることは自分の得意なこと」だとか、上手に役割分担をグループのなかでしてい





るのです。だから、自分の強みを人と一緒にやる中で見出すことができているんです。だから、自分の強みを人と一緒にやる中で見出すことができているんです。」

渡部校長は吉高地域クラブの活動についても、その成果を次のように高く評価している。

課外活動として地域クラブという組織があります。本校の校内的な魅力化は、アントレプレナーシップ教育と地域クラブです。地域クラブとは非常に便利な言葉で、明後日に開催される吉賀町サクラマスプロジェクトフォーラムを回していくファシリテーターもうちの生徒なのです。これも地域クラブの一環として参加しています。町教委からの依頼に応える形で有志の生徒たちが出ていっています。そういうのが年間何回かあるんです。特に町教委との連携が密になってきたので、今年はそういう機会が増えました。

◇ 地域学校協働については、プロジェクト会議を評価すると共に、地域のリタイアした人たちの支援が助かっているということであった。

コンソーシアムは総務課高校支援室が中心となって動かしているのですが、コンソーシアムの委員会が機能している形になっています。

ポイントはそのコンソーシアムの下部組織として実行的な小会議、いわゆるプロジェクト会議が機能していて、コンソーシアム自体も円滑に進行しています。」「(高校魅力化を運営していくう

えでの人的支援の状況は) 人生のベテランと言いますか、退職された一般の方、そういうベテランの方たちが入ってくれています。だから地域の伝統行事であるとか、そういうものは結構仕事をリタイアされた方は豊富におられて、協力してもらっています。あと、いわゆるＩターンで入ってこられたような方には今回も入ってもらっています。……自営をしておられるような程度ゆとりをもった勤務形態の方にお手伝いしてもらっています。あと、働き世代で言うと、圧倒的に連携しているのは役場関係です。役場とか商工会とか、介護施設の方であるとか。町の課題見つけるという点では大変ありがたいです。

◇ 募集対策に関連しては、意欲の高い子からの出願を期待している。

まずは推薦に出してきてほしいです。学力よりも、意欲です。意欲の高い子が来てくれたほうがいいのです。逆に推薦で思いをいろいろ語ってくれて、本校に対して本当に来たいと思う子に入学して欲しいです。……県外から新しい価値観が入ってくるので。県外じゃなくても、益田市でもいいですし、浜田市からでも。吉賀町はあまりにも中山間地として孤立しているので、やっぱり他地域からの違った生育環境で育った子たちが入ってきたことは本当に良かった。いいですね。

◇ 渡部校長は自らの体験から、高校魅力化の取り組みについて、以下のように貴重な取り組みであると考えている。

生徒募集において、都会地で苦しんでいる子や、その子たちの家族に新しい道を示すことができるのは、新たな経験でした。都会から来てくれた生徒やご家族の笑顔を見るなんていうことは今までなかったのです。すごく新鮮な経験です。島根留学や地域みらい留学は、いろいろな人を生かしている取り組みだと思います。……新しい場所で何かを変えたいと思っている子たちがたくさん来てくれて、すごく大事な役割を担ってくれています。これは島根県にとっても吉賀町にとっても、貴重な取り組みだなと思います。

吉賀高校に来て良かったと思っています。魅力化事業は魅力化校にいない人は知らないですから。町の人たちが一生懸命になつて支えてくれていることをすごく実感できて、大変貴重な経験をさせてもらっています。あと、財政的な支援には本当に感謝しています。県や町からの財政的支援によっているんなことができます。その点では校長として島根県の魅力化事業は本当にありがたいと思います。

◇ ◇

1 二〇一八年度赴任時の高校魅力化の状況

——ありがとうございます。先生が赴任した頃から、今日まで、吉賀高校の高校魅力化のとりくみがどんな感じで進んだかということをお伺いしたいと思います。

まず、先生が赴任した頃の吉賀高校の概要と当時の魅力化の概要、そして高校魅力化をめぐる地域の様子はどうだったでしょうか。

渡部：私が赴任した半年前に、町長さんが新しくなられました。今の岩本町長さんの選挙公約として「吉賀高校を支援する」ということが挙げられていました。そのこともあり吉賀町は全面的に吉賀高校を手厚く支援する方向で動いている時でした。そして、今のサクラマス交流センターという寮が完成して一年が経過したところでした。

また、よしか塾ネクストという塾も設立されてちょうど一年が終わったところで、ある程度のハード面のサポートができていたところで、私の仕事とすると、そのセンターとか、よしか塾とか、吉賀町や町の皆さんとの関係を円滑に軌道に乗せていくような役割を果たすことが求められていた状況でした。

——当時の高校魅力化をめぐる学校と生徒の状況はいかがだったでしょうか。

渡部：本校の高校魅力化の柱とすると、総合的な探究の時間を利用したアントレプレナーシップ教育と、全校生徒が所属する地域クラブ活動です。これで地域に向向いて行つて、地域と一体となって学校生活を創っているというようなのが、生徒の状況でした。

ただ、アントレプレナーシップ教育自体が、外から入ってきたものにとつてみると、今ひとつ担当者次第というところがあって、学年全体、学校全体としての組織的な動きに欠けていました。担当者の思いややり方で、学年によって全然できあがってくる内容がまちまちで、あま

り組織的に回つてないというのを感じました。

あと、町のお祭り等は定期的に安定して行事もありますので、地域クラブについては、コーディネーターを中心に有志の生徒を募つて、積極的に出て行つていような状況は伺うことができました。

——先生が、吉賀高校に赴任されたのが二〇一八年度から。

渡部：二〇一八年度です。

——吉賀高校は二〇一一年度から高校魅力化をされていますが、先ほど、学校全体としての組織にはあまりなっていなかったということなのですけども、具体的に状況はどんな感じだったでしょうか。

渡部：過去を紐解くと、一年生で「聞き書き」、二年生で「吉賀町を考える」という取り組みをしていた時期がありました。その当時は実はかなりしつかりとした内容で、それぞれの班が同じような様式でまとめているんですね。けれども、その後、統一感のないまとも方になってきたようで、報告書を見ると具体的な成果物として一貫したものがないという感じで、地域とつながっていることはあるのですけれども、「統一してこういう形でとか、年間を通してこんな力をつけさせて、こういうことをやらせよう」という一貫したものになっていない状況でした。

——先生が赴任した頃の魅力化と、地域共同、コンソーシアムであるとか、学校内の体制であるとかは、いかがだったでしょうか。

渡部…コンソーシアムという形ではなくて、吉賀高校後援会というのが存在しています、それを積極的に解体して、二〇一九年の二月にいわゆるコンソーシアムという吉賀高校支援協議会を、町総務課吉賀高校支援室が中心となって、町長さんや県議さんにも出席してもらって立ち上げることができました。

— その他、プロジェクト会と称して毎月一回、吉賀高校の校長、教頭、事務長、主幹教諭と、吉賀町役場総務課高校支援室、吉賀町教育委員会、吉賀町企画課、産業課の代表で定期的に開いています。今年この二月末で一〇〇回目を迎えます。

— 一〇〇回目ですか。

渡部…一〇〇カ月続いています。魅力化事業が始まることからスタートしたようです。

— そうしますと後援会と呼ばれている段階から……。

渡部…後援会とは別の組織として、もつと小回りのきく会です。

— プロジェクト会自体は……。

渡部…非常に小回りのきく会合として機能しています。

— 太田校長先生の時でしょうか。

渡部…だと思えます。一〇〇を一二で割ると、八・三年ですから。ちょうど、被ります。魅力化にとりかかると、もしくは学校を存続させる、多分そのためのプロジェクトっていう意味を込めて名前がついたみたいですね。

— わかりました。

渡部…この存在が非常に大きいというか、赴任当初「これだな」と思って、この会に皆さんに積極的に出てきてもらうようにしました。特に教育委員会との関係が密になったのは今年に入ってからでしょうか。去年まで城戸さんというお一人だけだったので、今は小学校からの派遣主事である水上さんにも今年から入ってきてもらって、どんどん教育委員会との連携が密になっています。今回の成果発表会も、町のサクラマスプロジェクトフォーラムと抱き合わせた形で実施できましたし、夏に河原でのサバイバル体験という名でカレージを作ったのも、町教委の主催で一日やってもらいました。このプロジェクト会のお陰で町教委との距離がぐっと近づいたと思っています。

## 2 高校魅力化の校内組織

— 次に移りたいと思います。従来の高校教育の目標と吉賀高校の高校魅力化との調整のようなことは、ご苦労があったと思うんですけど、どんなことがありましたでしょうか。

渡部…本校の教育目標は、中高一貫でもあるので中学校との共通の目標を目指す必要があります。したがって、ふるさを見つめ地域とともに生きる生徒、基礎基本を身につけ課題解決にとりくむ生徒というのが中学校と連携した目指す生徒像です。

それに加えて、吉賀高校の高校魅力化事業には、島根留学に関わる生徒募集があります。基本的に校長、教頭、主幹教諭とコーディネーターが、その役割を担って、一般の先生方が、生徒募集に行かれることはありません。

アントレプレナーシップ教育については、たまたま私が赴任したと同時に主幹教諭というポストができ、教員が加配になったのです。なので、主幹教諭の授業時数を週四時間に抑えて捻出した時間を、生徒募集やアントレプレナーシップの総括者として、まさに魅力化事業の推進責任者として動いてもらっています。その成果は絶大で、県外からの志願者への手厚い対応が可能となり、またアントレプレナーシップ教育は更なる深まりを見せています。ここ数年で生徒にとってより魅力的な学校になっていると思います。

——主幹教諭のこと、確認したいんですけども、一年生の担任、二年生の担任が居ると思うんですけども、それとアントレの担当者は、イコールなのでしょうか。それとも……。

渡部…今は、イコールです。

——一年生も二年生も。そうしますと主幹教諭はどういう立場になるのでしょうか。

渡部…主幹教諭はアントレプレナーシップの総括です。一年の学年付きになっていまして、探究活動の教職員研修なんかも直接担当してもらっています。あと、地域クラブの総括責任者です。だから、主幹教諭が、高校魅力化を回す係として去年から入ってくれたので、非常に円滑に発展的に動き出しています。

——仮説検証、その検証のしかたも、フィールドワークだったり、アンケートだったりとか……。

渡部…一年生は、まさに型にはまってどの班もあまりやり方に大きな差がないのです。それは一年生でのやり方、教え方で必要なことです。

二年生は二年生で、担当の教諭が毎回計画一覧表を作って全先生方に示して進めています。だから表面的には生徒たちが主体的に活動しているように見えますが、実は教員のしかけの結果だと私は思っています。

——それでは次に、校長先生自身のこれまでの教育経験というのが、吉賀高校での魅力化の取り組みに、どのように役に立ったか、あるいは戸惑ったかというようなことをお話ください。

渡部…私は理科担当なので、こういう探究型の活動というのは最初採用された時から自然科学部の指導等で関わっていました。また理数科を設置している学校での勤務経験が長く課題研究の指導には長らく関わっていました。



その他教諭としての最後となる業務として大規模校でのSSHの立ち上げと申請担当をしました。そのプログラムは全校生徒の探究活動であり、各学年一学年で五〇数グループができるんです。それをとにかく全教員で回すのです。だから、先生方の不満なところか不安なところとかは、一応わかっているつもりです。

うちの魅力化とか、アントレを進める時でもやり方さえ間違わなければ絶対回るだろうと思っていました。だから、たまたま今年はいい回し方をするそれぞれの教員がメイン担当者でついでくれたので、一気にうまくいっていると思っています。

### 3 視野を広く持たせたい

——続いて、高校生についてお伺いしたいのですが、理念とか目標のレベルで、吉賀高校が目指す高校生像、理念と具体的なこんな資質能力、こんな進路など、どんな生徒さんを育てたいというふうにお考えですか。

渡部：吉賀町はサクラマスプロジェクトと名付けて、将来的に吉賀町に関わってくれる人材の育成ということを謳っています。私も基本的に中高一貫もありまして、吉賀町を見つめ、吉賀町とともに生きる生徒、またはなんらかの形で定住人口や関係人口になる吉賀町と関わりをもつ生徒を育てなければいけないと思います。そのための必要な資質や基礎学力を身に着けさせなければいけないとも強く感じています。

——そのへん、今だと、そういう言葉もそんなに不思議じゃないかも



しれませんけど、もともと県立高校ですよ。県民を育てる高校という部分もあったと思うんですけども、そんななかで吉賀町、あるいは地域に根付いた生き方をする生徒さんを育てるといふふうには、ちょっとした転換だと思っただけですけれども、そんなことを経験されていかなかったでしょう。

渡部：私もかつて（中山間地域の）矢上高校に勤務していましたが、その時は、町とは全然関わりがないのです。平成の初めの頃はそういう時代でした。けれども魅力化事業が進んでいって、県の主導で町と一体となった高校魅力化が進むようになり、町の支援も手厚く定着しています。だから県立高校なのだけれど、実際には町からの手厚い支援をいただいているので、これはもう町の発展を無視しては県立高校だと言って、高校が町とかかわらないというのは、今の島根県はそういう時代じゃありません。吉賀町にとって吉賀高校はどうあるべきかは常に考えながらやっています。

——もうちょっと踏み込んで、具体的にこんな資質とか、こんな能力とか、こんな進路とかをとらわけ意識されているというようなことは何かありますでしょうか。

渡部：小規模校なので、視野が狭くなるので、できるだけ広い視野をもつて欲しいなと思っています。町内の子はずっと子どもの頃からみんな知り合いで、かなり閉塞的な人間関係で上がってくるわけです。良いところは良いところですがごくあるんですけれども、外に向かって視野を広げにくいという一面があります。

内輪の中ではすごく明るく、ざつくばらんなんですけれども、あんまりいろんな人と同世代でも出会わないので、悪い意味では人と比較ができていく、客観的に自分の良さとか自分の個性とか、自分の強いところを見出しにくいんじゃないかと思っています。そのためには、まず地域の大人たちともたくさん出会わせて、少しでも視野を広げてほしい。校内だけだったら、対大人というのは教員だけです。やはり成長に限りがあります。

だけど、世の中の一般の大人の人たちとこういう多感な年代にまじめな話をすると、一気に成長します。だから生徒たちを、外の大人と出会わせることによって、生徒を大人にしたいという気持ちはすごくあって、できるだけ視野を広く持たせたいと思っています。そういう点では、県外からの生徒の存在も非常にいい効果をもたらしています。

自分の能力が、客観的にわからないから、あんまり高みを目指そうとしないのです。例えば、今、大学の一般入試に挑戦する生徒は一人だけなんです。その生徒は圧倒的に学校の中ではできるわけです。けどずっと数学教師志望できていたのに、本当に進路を考えた時に、実は「僕、理科です」ということになって、自分は校内で理科もダントトップ、数学もダントトップ、自分には何が向いているのかなど、（誰かと）話すことも少ない。数学ができる人にもいろんなレベルがあるんじゃないですか。理科ができると言ったって、どういう理科ができるのかも。そういう、学力や適性という点で、生徒同士であまり比較ができない。そういう切磋琢磨が少ないところ、小規模校の弱みかなと思います。

だからできるだけ外の人たちとつながってほしいと思っています。視野を広げる機会をさらに創ることがうちの課題と言えるでしょうか。

——すでに課題も出てきていますけど、その他、課題はどのようなものがありますでしょうか。

渡部…いろんな可能性、いろんな人たちと出会って、視野を広げて欲しいです。高い視点と言うか。自分の適正や能力も見極めて欲しいです。そのためには、結構、教室の勉強はもちろんなんですけど、このアントレの活動ってすごく役に立っています。生徒たちの言葉のなかに、「役割分担ができるようになった」とか。「自分の強みはこういうことを広めること」、「しゃべることは自分の得意なこと」だとか、上手に役割分担をグループのなかでしているのです。だから、自分の強みを人と一緒にやる中で見出すことができます。

——役割分担ができるようになるという話、ほかでも聞くんですけど、具体的にどんな様子なんでしょうか。

渡部…例えば、パワーポイントを作るのが得意な子であったり、構成を考えるのが得意な子だったり、ポスターを作るのが得意な子であったりとか、それが多分自分のなかでわかるところなんです。だからそれを上手に子どもたちのなかで役割分担していると思います。

#### 4 望ましい高校生を育てる取り組み

——カリキュラムや実際の取り組みについてもお伺いしたいのですが、子ども、望ましい高校生像をどのような取り組みのなかでどのように今

育てられていますでしょうか。

渡部…地域社会に開かれたということで、総合的な探究の時間をベースにして、そこにそれぞれのグループにコーディネーターが、地域の方をつないで、吉賀町の課題を発見したり、その解決に向かったりする。基本的にはその総合的な探究の時間を入り口として個別の学びが深まるようにと考えています。カリキュラム・マネージメントの体制としてたら主幹教諭がその中心の役を担ってもっています。

——主幹教諭制度というのはどうしますと、かなり……。

渡部…これがなかったらすごく大変です。今の中山間地域の八校はみんなついてますから。だから、そういう点では非常に上手く回っています。

あと課外活動として地域クラブという組織があります。本校の校内的な魅力化は、アントレプレナーシップ教育と地域クラブです。地域クラブとは非常に便利な言葉で、明後日に開催される吉賀町スクラマプロジェクトフォーラムを回していくファシリテーターもうちの生徒なのです。これも地域クラブの一環として参加しています。町教委からの依頼に応える形で有志の生徒たちが出ていっています。そういうのが年間何回かあるんです。特に町教委との連携が密になってきたので、今年はそういう機会が増えました。

——教育委員会が、今年あたりになってから、いろいろ参加してくれるようになったいきさつというのは？

渡部…教育委員会の中で小学校からの派遣主事が今年からプロジェクト会に出席されるようになって、ものごとがすごく早く進み出しました。その方が絡んでくれたお陰で、かなり円滑に進んでいます。特に一年生の県外生はやる気が旺盛で、その子たちが今乗っかって、「地域の人たちが作った」始まりの会」（聞き手注…高校魅力化を支援する地域住民の会）にも進んで参加してくれています。

—私もつねづね思うんですけども、人の要素って大きいですよ。

渡部…とても大きいですね、高校規模の小さいところでは。

## 5 評価の方法と基準

—評価についてお伺いしたいのですけども、高校が目指している生徒の学びをどのような方法や基準で評価するのか。また従来の方法や評価基準との異同、限界など。

渡部…評価基準とかいうのは、今はないです。

ポトフォリオはやっています。ポトフォリオの担任による評価とか、自己評価を四段階的に行って、それを担任が集約をしています。次年度からは身につけたい力のルーブリックによる自己評価を行う予定です。

—それでは先生の見たとところで、吉賀高校や吉賀高校生はどのよう



に変わったでしょうか。どのような観点から見られているかというところが、興味があるのですけども。

渡部：アントレに対しての自信ができたのじゃないでしょうか。自分たちのやっていること。内容についても自信があり、やっていることの意義を自分たちが見出し、アントレ活動についての学ぶ意欲が非常に高まったと思います。

一年生も二年生も年間計画を生徒にきちっと示しているのです。この時までこれをしようと。それが、結果的に生徒の自信になります。

これがあるから楽しいと言っている生徒も多いです。そういう子たちの生きる力になると本当にいいなと思います。

## 6 地域学校協働の体制

——地域との協働のところにいきたいのですが、コンソーシアムの体制と組織と実際の運営について。コンソーシアムの機能をより果たしているのは、先ほどのプロジェクト会でしょうか。

渡部：そうです。プロジェクト会は小回りがきいていいです。

コンソーシアムでは委員会を作って、今既存の町と一緒に取組んでいる学校行事をその委員会に落とし込んで、年間計画を作っています。コンソーシアムは総務課高校支援室が中心となって動かし、コンソーシアムの委員会が動いている形になっています。

ポイントはそのコンソーシアムの下部組織として実行的な小会議、いわゆるプロジェクト会議が機能していて、コンソーシアム自体も円滑に進行しています。

——プロジェクト会で、校長先生の役割というのはどんな役割になるのでしょうか。

渡部：プロジェクト会のトップは、以前は町の教育長さんだったので、今は総務課の課長さんがトップです。学校側代表は校長です。

——大学関係者や専門家との関係。こちらは特にSGHとかやっているわけではないので、運営委員会は存在してないですか。

渡部：運営委員会は存在しません。

——先ほどのコンソーシアムにも……。

渡部：大学関係者等の外部関係者はおられません。

——専門家も入っていないということでしょうか。

渡部：これが、本校コンソーシアムの弱いところだと思っています。本校は県教委も認める高校と地域との連携がすでにできあがって上手くいっている、すごくいい例なのですけれど。結局誰もうちの学校には飛びついてくれないわけですね。何故かという、県内の主要都



市部から距離的にかなり遠いことと学年一クラスの高校は他に例がなくモデルになりにくいのだと思います。参考にはなっても真似するよ  
うな対象じゃないのです。小さすぎるのですね。

——それでは、この地域の人的支援、高校魅力化を運営していくうえ  
での人的支援の状況はどうなっていますでしょうか。

渡部：若い方は少ないですけど、人生のベテランと言いますか、退  
職された一般の方、そういうベテランの方たちが入ってくれています。  
だから地域の伝統行事であるとか、そういうものは結構仕事をリタイ  
アされた方は豊富におられて、協力してもらっています。あと、いわ  
ゆるＩターンで入ってこられたような方には今回も入ってもらって  
います。

——そういう人材は豊富ですか。

渡部：豊富というわけではないです。日頃サラリーマンとかだとまず  
ムリなので。自営をしておられるようなある程度ゆとりをもった勤務  
形態の方にお手伝いしてもらっています。あと、働き世代で言うと、  
圧倒的に連携しているのは役場関係です。役場とか商工会とか、介護  
施設の方であるとか。町の課題見つけるという点では大変ありがたい  
です。

——コーディネーター、ここは地域協働学習支援員であって、コデー  
ネーターという名前だと思つたのですが、コデーネーターの役割

と、高校内での位置づけはどのようになっておりますでしょうか。

渡部：いわゆる吉賀町総務課つきですので、基本的には。お二人が、  
AさんとBさんって方が、高校に机を置いてもらっています。

Aさんについては、今年はアントレの二年生担当で地域とつないでい  
くのがメインの仕事です。あと、支援室としての仕事で、吉賀町から  
の支援のバス券の発行や、事務処理も担っていたいただいています。

Bさん（女性）のほうは、サクラマス交流センターで寮の関係の支援  
皆さん男性ばかりなので、女性としての支援をしてもらっています。  
この二人でだいたい土日の地域活動、地域クラブの活動にどちらかは  
必ず出てもらっています。勤務の関係上なかなか休日先生方にそこ  
出てもらうというのが簡単ではないので、教員の代表としては主幹教  
諭が主に参加してくれています。

## 7 苦労したこと

——吉賀高校の高校魅力化を行う苦労工夫、あるいはおもしろさみた  
いなことを聞いていきたいんですけど。まず、どのような苦労があり  
ましたか。

渡部：苦労という点では、私が校長になった時はハード面が整備され  
ていましたので。それをいかに、円滑に回していくか。特に、センター  
（聞き手注：サクラマス交流センターⅡ町営寮）ですね。週に一回、会議をもつ  
て、私は入っていないんですけど、教頭が学校側のトップで、生徒部長、  
養護教諭、センターのハウスマスターの方と総務課と一緒に、週に一回、

これも定期的に情報交換しています。

——一般受験で入る子が増えて欲しいということはありますでしょうか。

渡部…うちの場合、定員は一年四〇人しかなくて、そのうち県外生を八名と決めています。まずは推薦に出してきてほしいです。学力よりも、意欲です。意欲の高い子が来てくれたほうがいいのです。逆に推薦で思いをいろいろ語ってくれて、本校に対して本当に来たいと思う子に入学して欲しいです。

県外の子は、今の子どもたちは覚悟をもってやってきています。だからみんなの前で発表するなんて、ここに一人で飛び込んでくることと比べたら、大したことないと思います。

今日発表した子なんか。「ここに来たい」と親に言ってきたわけです。ここに来たこと自体に比べたら、みんなの前で発表することなんて多分大したことないのです。

中学校の時は学校に行けなかった子たちもいますが、今、うち不登校いないのです。全員学校にきています。これはすごくうれしいことで、何か学校に足を向けるものが吉賀高校にあるのだなと思っています。

——一言でまとめちゃうと、高校が魅力的なわけですね。

渡部…だと思えます。県外から新しい価値観が入ってくるので。県外じゃなくても、益田市でもいいですし、浜田市からでも。吉賀町はあまりにも中山間地として孤立しているので、やっぱり他地域からの違っ

た生育環境で育った子たちが入ってきたことは本当に良かった。いいですね。

## 8 高校魅力化の面白いこと、興味深いこと

——高校魅力化をやっていて、おもしろいとか、興味深いと感じたところはどんなところでしょうか。

渡部…まず生徒募集において、都会地で苦しんでいる子や、その子たちの家族に新しい道を示すことができるのは、新たな経験でした。都会から来てくれた生徒やご家族の笑顔を見るなんていうことは今までなかったのです。すごく新鮮な経験です。島根留学や地域みらい留学は、いろいろなを生かしている取り組みだと思います。

新しい場所で何かを変えたいと思っている子たちがたくさん来てくれて、すごく大事な役割を担ってくれています。これは島根県にとっても吉賀町にとっても、貴重なとりくみだなと思います。

——校長先生で自身が高校魅力化の取り組みから得たものがあるとしたらどんなことでしょうか。

渡部…教員以外で、本気で学校のことを考えている一般の方がこんなにおられるのだと言う、感謝の気持ちというか、驚きもあるし、すごいなと思いました。役員関係の人はもちろんですけども、一般の方からも、応援してもらえるとと言うか、地域のあたたかさはずっと感じます。これは都市部では、ないですよ。ありえないし。市内だったらいつ

ばい学校ありますよね。その学校だけ応援するわけにもいかないし。行政あげて応援してくれるなんてことは、ありえないです。

## 9 高校魅力化の課題と展望

——吉賀高校の高校魅力化の今後の課題と展望について。

渡部：今進めている魅力化を、メンバーが変わってもできる組織づくりですよ。メンバーが変わりますので、教員が。とにかく長い人でも五年しかいませんので。短ければ講師の人たちは二年とか三年で、定期的に変わっていきます。

高校魅力化の三本柱では、まず生徒募集については、町の支援室やコーディネーターがおられる以上は、主幹教諭のポストが続けばブレないで進んでいきます。アントレ活動は教科書的なワークシート等の「指導の型」の積み重ねができれば、誰が変わっても動いていくと思います。そしてこれも主幹がとりまよめの役を担って、回していきますので、大丈夫なのです。最後に地域クラブも、コーディネーターというポストが続き主幹教諭もきちんとしていければ、これも回っていきます。小規模校なので教員数は今が上限です。したがって無理をして大きく広げず、メンバーが変わっても、今やっている持続可能な教育システムを維持していくことが、一番の課題、無理のない展望だと思います。

——今のお話を伺うと、三本柱のすべてに主幹教諭……。

渡部：主幹教諭なのですよ。

——なんですね。

渡部：もし主幹がいなくなったら教頭でしょうね。

——主幹教諭とか教頭が、高校魅力化、あるいはこういう中山間地域の小規模校ということがしつかり理解できていければ、比較的安心。

渡部：ですね。もちろん校長が最も理解していることが一番ですが。

——聞いていて、非常におもしろいと思ったのですけども。校長、教頭、主幹がしつかりしてれば、それ以外の教諭も自分の方向とか、自分の仕事量とかを理解できる。しかし、校長、教頭、主幹がしつかりしてなければ、非常に優秀な先生が来たとしても上手くいかないことも考えられる。

渡部：島根県の管理職の方は、皆さん魅力化事業をよく理解しておられますのでご安心ください。要は優秀な先生がどこに優秀な力を使ってくれるかですよ。私は校長として、適材適所でそれぞれの先生方の強みを発揮してもらおうよう心がけています。

## 10 最後に

——それでは最後になりますが、その他思っていること、感じている



こと考えていること、自由に教えていただければと思います。

渡部：吉賀高校に来て良かったと思っています。魅力化事業は魅力化校にいない人は知らないですから。町の人たちが一生懸命になって支えてくれていることをすごく実感できて、大変貴重な経験をさせてもらっています。

あと、財政的な支援には本当に感謝しています。県や町からの財政的支援によっていろんなことができていることも事実です。その点では校長として島根県の魅力化事業は本当にありがたいと思います。

——これで終わります。お忙しい中、ありがとうございました。

論考

## 高校魅力化の展開の事例研究

### ——島根県立吉賀高等学校の試行錯誤と問い直しに着目して——

青山学院大学 樋田大二郎

#### 1 終わらぬ問い直し——吉賀高校魅力化の原動力——

島根県立吉賀高等学校の魅力化の事例は自己を問い直し続ける再帰的教育改革の事例（樋田有一郎二〇二二）であり、次の特徴をもつ。

①吉賀高校は普通科教育とは何か、自分たちの使命は何かを常に問い続けている。

②吉賀高校は試行錯誤を繰り返しながら自らを問い直し、問い直した結果に応じて具体的な方法を試行錯誤している。実際、高校魅力化のスタート時、吉賀高校は中高一貫の充実と音楽活動によって魅力を高めようとしていた。しかしその後、聞き書きを実施したことをきっかけに地域の特色を活かした教育（地域課題解決型学習）に取り組むようになり、やがてキャリア教育を根幹に据えたアントレプレナーシッ

プ教育を様々に試行している。

③試行錯誤と問い直しの結果として、吉賀高校の取り組みは住民を巻き込んだ（地域活性化を伴う）地域学校協働へと進んでいる。

④吉賀高校は学校、地域が自分たちを問い直すだけでなく、生徒も自分自身の学びの目的と方法を問い、授業作りをするキャリア教育（地域課題解決型学習）へと発展している。

吉賀高校の事例は先行事例を模倣したり文科省の提唱を後追いつた実践ではない。

二〇二二（令和三）年の中央教育審議会答申が「地域社会に関する学科」といったモデルを提唱（中央教育審議会二〇二二）するよりも前に地域社会を学び地域社会に関わることを試行錯誤している。さらに



二〇一六（平成二八）年の中央教育審議会答申が「社会に開かれた教育課程」やその方法としてカリキュラム・マネジメントを提唱（中央教育審議会二〇一六）するよりも前から、様々に試行錯誤している。

二〇一六年答申では「①……よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。②（これからの子どもたちの）資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。③教育課程の実施に当たって、……学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。」（中央教育審議会答申二〇一六・一三―二四）としているが、二つの答申以前からそして今も吉賀高校は、高校教育を問い直し、高校と地域の関係を問い直し、試行錯誤している。

模倣や後追いではない試行錯誤をくり返す吉賀高校は文科省がカリキュラム・マネジメントの方法として例示するPDCAサイクルから、結果的に（意図したわけではなく）外れた実践をしている。吉賀高校がリアルタイムで社会に開かれ続けていること、および、教育を問い直し続けていることが原因である。吉賀高校の実践は昨年は一昨年とは違う取り組みをした。そして今年も昨年とは違う取り組みをしている。それだけではない。地域や生徒の学びの状況に合わせて年度途中でも取り組み内容を変えている。第二二代渡部俊郎校長へのインタビュー（『地域人材育成研究』第5号所収）では、教育委員会と高校との関係の変化によって、その年に新たな取り組みが生まれたことが語られている。試行錯誤と問い直しというPDCAサイクルから外れた実践は、よい意味で計画性にとらわれず、よい意味で手順にとらわれない実践である。

吉賀高校は島根県の「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」に開始時点から参加している原8校のうちの1校である。同事業は高校だけではなく、地域も事業の実施主体となることや地域の特色を生かした教育を行うことを条件としており、地域と学校がウィンウィンの関係を構築する地域学校協働を促進する事業である。同事業は今、日本中に広まっている高校魅力化の原点であり、地域学校協働の原点である。

吉賀高校の高校魅力化の試行錯誤や問い直しは混乱を伴って始まった。高校魅力化は地域が高校存続のために介入する際のマジックワードであり、高校が地域による支援を受け入れやすくするマジックワードである。二〇一一年のスタート当時の高校魅力化や地域学校協働は今日よりもっとマジックワード的であり、具体性や計画性は乏しかった。高校と地域にとつて予想しなかった改革であった。それ以前の誰が、町から派遣されたコーディネーターが職員室に机をもつと予想しただろうか。誰が、普通科高校の生徒が町民と協働して起業すると予想しただろうか。誰が、現役高校生が当たり前のように地元の町に貢献すると予想しただろうか。誰が、成績の良い生徒ほどUターン志向が強くなると予想しただろうか。

吉賀高校の高校魅力化のスタートでは、理想や理念、マニュアルがないまま、ローカルな事情を色濃く反映した手探りの試行錯誤が行われた。そして、始めてみると、高校魅力化の改革は広く深いものであった。以来、吉賀高校は何をしたらいいかを問い続け、それだけでなく、そもそも何をしたらいいかを問う自分は何をしたいのか、いったい吉賀高校とは何者なのか（どのような存在なのか）を問い続けている。



吉賀高校の場合は、「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」という主旨は明確だが個々の目標や方法は高校任せの事業に参加したことが吉賀高校の終わることのない問い直しへの扉を開いた。しかしその成果は豊かであり、統廃合回避の道が開かれ、出口指導の先までを視野に入れた進路指導や新しいキャリア教育、新しい「おらが高校」(＝地域学校協働)が生み出されることとなった。

本稿はその後、高校魅力化初期の元校長先生へのインタビュー結果(『地域人材育成研究』第5号所収)および、収集資料から吉賀高校の高校魅力化初期の試行錯誤の内容とそ中で現れてきた「問い続ける」という方向性を検討する。

- ・ 第一八代太田肇校長(二〇一〇年度～二〇二二年度)
- ・ 第一九代齋藤雅典校長(二〇一三年度～二〇一五年度)
- ・ 第二〇代熊谷修山校長(二〇一六年度～二〇一七年度。ただし、二〇一三年度～二〇一三年度に第一八代太田校長の下で教頭として吉賀高校に勤務し高校魅力化に取り組んだ経験がある)
- ・ 第二一代渡部敏郎校長(二〇一八年度～二〇二〇年度)

## 2 吉賀町の歴史、産業、文化

吉賀町は島根県西部岩見地区の山々に囲まれ、自然豊かな中山間地域に位置する。高津川とその支流に沿い平地が開けている。吉賀町のホームページに以下のように紹介されている。

「この地域は、古くから吉賀地方と呼ばれ藩政時代は吉賀三領

「上領」「中領」「下領」に属し、参勤交代にも使われた主要街道筋で宿場町でもありました。受け継がれてきた多くの伝統芸能や文化資源があり歴史の重みを感じさせます。また、当地域の気候と清水により生み出される美味な米は、藩主の食する御米として微用されたと言われており清流に恵まれた土地でもありました。」

〔吉賀町の概要〕『吉賀町ホームページ』二〇二二年八月一四日閲覧 <https://www.town.yoshika.jp/about/shoukai/>

高津川は「清流日本一」に何度も選ばれている川であり、高津川とその支流沿いに集落が広がっている。高校のすぐそばを流れており、高校生たちのアントレの授業では高津川に関わるテーマがたびたび選ばれている。

交通は、中国自動車道が町内を走り、町内に六日市インターチェンジがあり交通の便が良い。この交通の便を見込んで町内に自動車会社の大きな下請け企業が二社立地している。車での所要時間は萩石見空港から国道で一時間強、広島駅からだと高速で一時間半ほどの距離である。ただし、卒業生の住まいを見ると、県内や近県の大学や専門学校に進学する場合は下宿になる。

平成の市町村合併に際して、島根県からは鹿足郡四ヶ町村（津和野町、日原町、柿木村および六日市町）で合併して一つの町となるように提案された。当初は提案の方向でやむなしという雰囲気になった。しかし、町名と本庁舎の位置を巡って混迷し、最終的に津和野町と日原町、そして六日市町と柿木村が合併することとなった。新町名は、一般公募の一次選考で「吉賀町」のほかにも「高津川町」、「水源町」が残ったが、この地域は古くから柿木村、六日市町を合わせて「吉賀地方」と呼ば

れており、住民が吉賀という呼称になじんでいたことから、「吉賀町」が新町名に選定された（六日市町史編纂委員会二〇〇七・五一九―五二八）。

旧柿木村は有機農業で有名な地域で、住民は有機農業に誇りをもっている。多くのＩターン者が旧柿木村に移住して有機農業を行っている。なお、吉賀高校の寮は柿木の食材を用いた食事が安全でおいしいことを県外生募集の目玉の一つにしている。

旧六日市町地区は、前述のようにインターチェンジがあり、高速道路関係の会社や広島に本社のある自動車会社の下請け企業がある。下請け工場では外国人労働者が多く働き、吉賀町は県内でもっとも外国人（労働者）の比率が高い町となっている。ただし、この下請け会社は高卒就職する会社とは見られておらず、吉賀高校生の新卒就職は少ない。吉賀高校生は町内に希望する就職先がほとんどなく、高等教育機関も看護学校が1校あるだけなので、就職進学のために高卒後にいったん町外に出る。卒業生のＵターンの事例は多いが、家業を継ぐ世代や親の世話をする世代のＵターンが中心である。

文化面では、東京スカイツリーの設計で知られる澄川喜一氏が吉賀町の出身であり、町内にいくつかのオブジェがある。そのうちの一つは吉賀高校の正面玄関横に置かれている。また、ファッションデザイナーの森英恵氏も吉賀町の出身である。町民は森氏の蝶のデザインは子ども時代にみた原風景をモチーフにしていると語っている。そのほか、吉賀町には八久呂太鼓、石見神楽（抜月神楽、白谷神楽、黒淵神楽、獅子舞）の伝統芸能が引き継がれており、高大交流の中で白谷神楽を見た大学生は怖い場面で逃げ惑う迫力であった。白谷神楽のメンバーによると日本各地で公演する機会があり、後継者も育っているという。

### 3 吉賀高校の沿革

地方郡部には今でも「おらが高校」という感覚があるが、吉賀町住民にとって吉賀高校はまさにおらが高校となっている。「おらが高校」の経緯は吉賀高校の沿革に見ることが出来る。吉賀高校の開校までの歴史を見ると、新制高校発足時に地元が費用を負担し分校を開校した。その後、以下に見るおよそ二〇年間に及ぶ地元の期待と精力的な働きかけと支援で高校に格上げされることとなった。

昭和二三（一九四八）年四月に学校教育法に基づいて新制高等学校が発足し、島根県では同年に三五校が開校した（島根県教育委員会・島根県公立高等学校長会 一九六八・九九）。吉賀町内には高校は開設されずに、益田農林高校七日市分校、津和野高等学校六日市分校、益田産業高等学校柿木分校の三つの分校が設置された。この時点では吉賀高校や吉賀分校という名称はない。

『六日市町史 第三巻』（六日市町史編集委員会、二〇一七）の記述から吉賀高校の沿革を見てみよう。

分校のうちの一校は益田農林高校七日市分校であり、一九四八年六月に設置決定、八月に現在の吉賀町七日市地区に益田農林高校定時制（四年）の分校が開校された

新制度により、農村型、勤労青少年を対象とした定時制高校が設置されるようになり、門戸は大きく開かれることになった。七日市分校の設置にあたり、当時の村長松前長三郎は、設置のために素早く精力的に動かれ、長年の悲願であった当地区の青少年教育条件整備に力をそそぎ、同年六月、七日市分校の設置が決定し

たのである。

出典：六日市町史編集委員会、二〇一七、『六日市町史 第三巻』、五九一―五九二

認可条件が人件費以外すべて設置町村負担であり、村財政にとっては誠に厳しいものがあり、三十八年独立校となるまで財政負担は続けられた。本校の益田農林高校は二十四年、益田高校と統合し益田高校と改称。二十八年に再び分離独立し益田産業高校と改称され、七日市分校もその度に分校名を改称した。同三十三年、津和野高校六日市分校が七日市分校に統合され、同三十五年、定時制課程と全日制課程となった。

この間、生徒数の増大等で、学習展開上にも支障を生じ、校舎の新築、増築、設備の充実、教職員の配置等々多くの改善がなされ分校として発展を遂げたが、昭和三十八年、吉賀高校として独立校となり十五年間の七日市分校は終わりを迎えた。

出典：六日市町史編集委員会、二〇一七、『六日市町史 第三巻』、五九一

吉賀町内にあつた残りの二つの分校は津和野高等学校六日市分校と益田産業高等学校柿木分校である。津和野高等学校六日市分校は一九四九（昭和二九）年に、六日市地区に開校された。

昭和二十九年四月一日、六日市町、蔵木村を中心とした地区住民の強い要望と財政的負担により、六日市町立公民専修学校を母体とし普通課程定時制（四年制）が津和野高校の分校として設立された。



開校当時は六日市中学校の一部を仮校舎とし、同年七月新校舎が竣工した。分校主任外五人の定数で、本校から随時必要に応じ講師が派遣されていた。初年度の入学生徒数は、定員五十人に対して二十七人であった。

昭和三十三年「県立高等学校教育刷新充実計画」が発表され、この基本方針に基づく高校再編計画は、諸事情を勘案しながら、可能なものから逐次実施することとなり、七日市分校と六日市分校は統合され、津和野高校から分離して、益田産業高校七日市分校となり、一期の卒業生を送り出しただけで、わずか四年間という短い六日市分校の歴史は閉じられた。

出典：六日市町史編集委員会、二〇一七、『六日市町史 第三巻』、五九一

前述のように吉賀高等学校の誕生は一九六三（昭和三八）年のことであつた。

分校発足以来進学生とも次第に多くなり、定時制から全日制へと課程の変更、校舎の新改築、設備の充実、教職員の適正な配置など、学校の条件が整って三十二年頃本校から分離独立、高校昇格への気運が高まった。三十四年全日制高等学校設立期成同盟が結成され、結束して実現運動を展開した。その結果、昭和三十八年四月一日、益田産業高校から分離独立し、柿木分校と統合して島根県立吉賀高等学校が誕生した。

出典：六日市町史編集委員会、二〇一七、『六日市町史 第三巻』、五九三

吉賀高校柿木分校は一九六九（昭和四四）年に吉賀高校本校と統合され、

分校開設から二一年後にこうして吉賀地方唯一の県立高校となった。

吉賀高校の母体となった三つの分校はいずれも地元が要望し、財政負担をいとわずに開校したおらが分校であった。そして、全日制高等学校設立期成同盟を結成し、「結束して実現運動を展開した」結果、おらが高校である吉賀高校が誕生したのであった。

吉賀高校は県立高校となったが、その後も町内の全四校の中学と高一貫（連携型）を形成するなど、「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」以前において、地元地域との密接な関係は続いていた。

#### 4 高校魅力化スタートの頃の吉賀高校の特徴

高校魅力化スタート時の吉賀高校の特徴を見ると、第一の特徴は入学者数が少なく廃校の危機にあつたことである。町民の間では危機感には十分には共有されていなかったが、少なくとも高校と町は強い危機感を抱いていた。

一番は、「この高校がなくなるんじゃないか」という思いです。この地域は、……生徒の数が減っていくだろうという予測が出ていました。この地域には、津和野高校があり、吉賀高校があり、さらに益田には四校も高校があるという状況です。普通に考えると、まず、一学年一学級の吉賀高校がなくなるだろうと思います。出典：『第一九代齋藤雅典校長インタビュー』『地域人材育成研究』第5号所収。以降、「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」とする。

第二の特徴は、学習意欲が高いとは言えず、学習習慣が身について



いるとも言えなかったという問題の存在である。

「吉賀高校は、人口が多い時代にできた高校です。その頃は、「成績上位の人は津和野か益田の高校に行きなさい。そうしないと成績下位の子が入れる学校がないから」、そういう声があつたようです。スタートがそうですから、子どもたちも荒れていた時期があつたと聞いています。ですから、私が着任した頃、地域の方に、「そりゃ地元の学校だから、校長先生は吉賀高校に来さしてくれって言っうけど、でも、あそこじゃあ行かせられんよ」と言われる方もおられました。

出典：「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」

吉賀高校の生徒の多くは、学力はそれほど高くなく、学習意欲も高くはないので、この魅力化の動きを通して、学習動機が生まれて、学習意欲が高まるとよいという思いでおりました。

出典：「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」

課題は、やはり家庭学習の習慣が身につけていない生徒が多いことですね。「学習につなげたい」と思うのは、裏返して言えば、「家でそれほど勉強できていない」ということです。PTAの会で保護者さんと話しても、「家で、そりゃうちの子、勉強すりゃあせん」って言っう方が多かったですね。

出典：「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」

その前の学年は（入学者は）少なかったです。二〇何人、いよ

いよ（統廃合の）ギリギリの所だったかな。その段階ではまだ中高一貫教育でみんな入ってくるみたいな流れだったですかね。それで「勉強せんでもいいや。」みたいな雰囲気がありました。

出典：「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」「地域人材育成研究」第5号所収以降、「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」とする。

第三の特徴は、生徒の学力の多様性や生徒指導上の問題が存在していたことである。高校魅力化は、これらの問題の克服に追い風となった。

……我慢できない、また、周囲に対する思慮深さが無い、そうしたことから、平気でいろんなことをしてしまうということがありました。魅力化とは別のことですが、生徒指導面では多くの教員が苦勞をしたんですね。落ち着いて授業がうまくできないという状況も、ちらほらあつたですね。

出典：「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」

……生徒指導上のいろんな問題もありました。そうした中でやっていって、だんだん落ち着いてきたときに、魅力化の中でいろいろとやってきていることを、最近言われている「学ぶ意欲」、文科省の言う「学ぼうとする力」につなげたいと考えていました。

出典：「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」

吉賀高校の生徒の学力は、ほんとうに多様で、中にはセンター試験で七〇〇点台をとった子だとか、推薦ではなくて一般受験で国立大学に合格していく子だとか、多くはないけれど、そういう子もいます。かたや、数学でいうと九九も怪しい生徒もいます。

こういう非常に多様な生徒みんなの資質を高めることが、吉賀高校の使命です。

出典：「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」

第四の特徴は、島根県で当時中高連携を行っている高校はわずかしかなく、そのうちの1校であったことである。中高連携では教員の交流や部活動の交流、イベントの交流などが行われ、中学生に吉賀高校のことを知ってもらうことができた。吉賀高校は、次節で見る生徒数減少による閉校回避の方法として中高一貫（連携型）を推進し、多様な取り組みを行った。

第五の特徴は吉賀高校は島根県で唯一の一学年一クラスの小規模校であったことである。このことは、教科の教員の確保（物理など）を困難にさせるなどの不利をもたらしたが、意思決定や授業設定の小回りがきくという利点ももたらした。教師集団の高校魅力化への理解も比較的容易であった。

第六の特徴は他の中山間地域の高校にも通じることであり、三節で見た沿革にもあらわれているが、住民にとって吉賀高校は「おらが高校」であり、「聞き書き」を始めとした高校魅力化をきっかけとして吉賀高校に対して大きな関心を寄せたことである。

## 5 生徒数減少と閉校

島根県では二〇一一年度（平成二三年度）から「離島・中山間地域



の高校魅力化・活性化事業」が開始された。吉賀高校は事業の対象となった原8校のうちの1校である。

筆者が初めて吉賀高校を訪問したのは二〇二二年度末の二〇一三年三月一四日であり、県外生募集の聞き取り調査を行うためであった。当時の太田肇第一八代校長（二〇一〇年度～二〇二二年度）が離任する半月前のことであった。前述のようにこの当時、統廃合の危機にあつたのは生徒数が減少したからであるが、吉賀高校は、生徒数減少を単に高校がなくなる問題とせず、地域が疲弊する問題という視点から捉えていた。

### 5-1 地域活性化問題としての高校存続——生徒数減少と過疎化のスパイラル

高校の閉校が過疎化に与える影響について、吉賀高校と吉賀町では資料一のように、二〇一二年度という高校魅力化の初期段階から、高校魅力化を教育問題としてだけでなく、経済問題、文化問題、地域の疲弊（社会問題）、絆（社会関係）等の問題としてとらえていた。吉賀高校と吉賀町は吉賀高校廃校の影響を負うスパイラルとして構造化してとらえていた。そうすることで町民の危機意識を高めようと試みていたものと考えられる。地域人材育成研究会が、高校を地域の生命線としてだけでなく、地域活性化の最前線や地域活性化のエンジン（樋田有一郎二〇一四）としても描いて好循環のスパイラルで捉えていたのは対照的である。

①子どもの機会減少（受け皿が無くなる。選択肢が少なくなる。）

高校に行けない者が出る。）

← ②親の負担増（教育の負担が増加する。親子の時間が無くなる）

← ③人材の不足（小学生の身近なモデルが無くなる。地域と子どもとの関わりが減る。地元就職や神楽、盆踊りなどの吉賀町を担う人が減る。Uイターンにとつての魅力が減る。）

← ④経済の衰退（先生がいなくなり地元商店街の売り上げが減り七日市が寂れる。長期的に町内の消費が減少する。ゆうちょ、銀行支店が統合される。）

← ⑤文化の衰退（町内のサークル活動が衰退する。ふるさとの体験をする機会が減少する。吉賀町の良さを知らずに育つ。）

← ⑥地域の疲弊（高校が廃墟になり、治安が悪化する。若者がいなくなり、町の元気がなくなる。子どもに自信をもって住みなさいと言えなくなる。自分なら住み続けようと思わない。）

← ⑦絆の喪失（ふるさとの友が町外になり、つながりが無くなる。つながりを求めない。Uイターンのみの町になる（無縁社会化する）。町民と子どもが関わる時間が減少する。同窓会が無くなる。）

← ⑧人口減少（人口が減少する。高齢化が実質的に進む。Uイターンの減少、町外流出、空洞化、親世代の減少。）

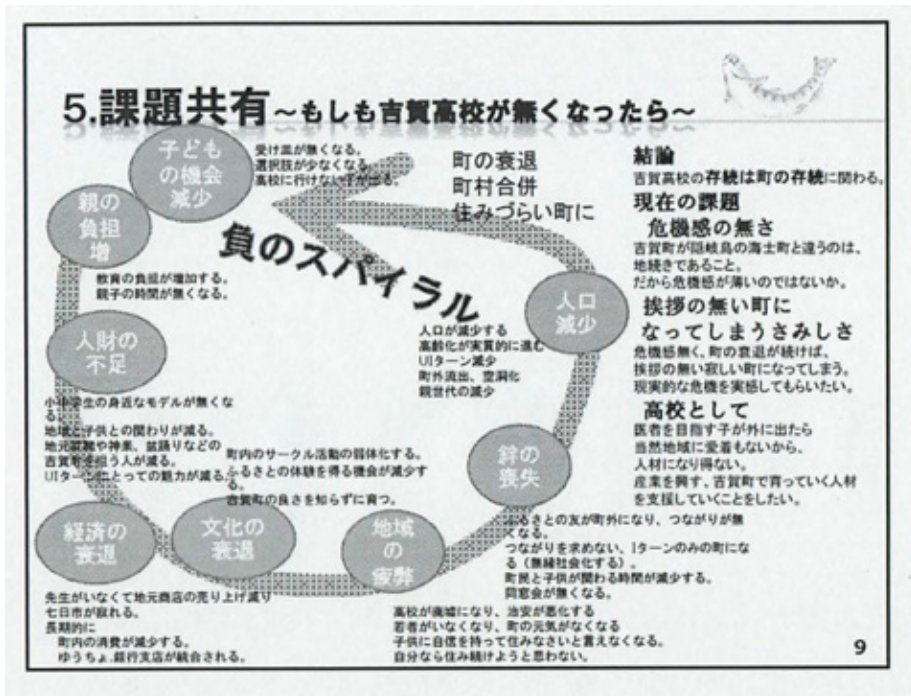


図1. 生徒数減少と負のスパイラル 出典:吉賀高校,2013 a,「5. 課題共有～もしも吉賀高校が無くなったら～」 『島根県立吉賀高等学校(1期)「離島・中山間地の高校魅力化・活性化事業実施報告』

←  
①そしてそれらの結果としてのさらなる子どもたちの機会減少(受け皿が無くなる。選択肢が少なくなる。高校に行けない者が出る。)

吉賀高校、二〇一三a、「5. 課題共有～もしも吉賀高校が無くなったら～」  
『島根県立吉賀高等学校(1期)「離島・中山間地の高校魅力化・活性化事業実施報告』(※2013年訪問時の収集資料)。

吉賀高校の「吉賀発 サクラマス・プロジェクト」は負のスパイラルの結論として 吉賀高校の存続は町の存続に関わる。危機感のなさが現在の問題である。危機感の無いまま、町の衰退が進めば、挨拶の無い町になってしまう。危機感をもって貰いたい。産業を興す、吉賀町で育つていく人材を支援していくことをしたい、としている。

どのようにしてサクラマス人材を育てるのかというビジョンは、この時点ではふるさとを知りふるさとを愛する教育に留まっており、地域活性化のエンジンとしての高校への目覚めや、地域課題解決型学習による当事者性の育成や、地域貢献、起業の体験的学習は二〇一二年度開始の「聞き書き」が発展する中で意識されていくことになる。

5-12 町外高校進学の実態

表1で生徒数の推移を見てみよう。吉賀高校は二〇〇三(平成一五)年までは定員八〇名、一学年二クラスの高校であったが、入学者数の減少が進み二〇〇三(平成一五)年には二三名、二〇〇四(平成一六)年には二五名となった。そして、二〇〇四年度から四〇人一クラスの

表1. 吉賀高校の入学者数と町内入学率の推移

年度	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
入学者数	42	46	23	25	43	44	35	40	38	33	27
年度	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	
入学者数	33	31	27	33	27	37	40	32	40	33	

出典：吉賀高校、2013 d、「2013年3月地域人材育成研究会訪問調査時の説明資料」と『めたせこいあ』（学校通信）の各号

※中高一貫教育（連携型）の導入時期は吉賀中学がH13年度、六日一中学・蔵木中学がH15年度、柿木中学がH18年度

※県外生募集の導入時期 平成27年度（同年度から中高一貫の特別選抜枠を40人定員の50%に縮小）

定員となった。

入学者数の減少が進んだ背景には少子化のほかに地元中学からの入学率が下がり（町外高校への進学率が上がり）、その後、入学者数は持ち直すものの、吉賀町内から吉賀高校への進学率はおよそ50%と、中高一貫教育導入後の目標としている80%よりは低い値で安定した。

吉賀町からクルマで一時間ほどの沿岸部の益田市には高校が四校あり、隣の津和野にも県立高校がある。吉賀高校は進路保障や部活動だけを見ると、それらの高校よりも不利であると見なされていたので、前述のように統廃合の対象となる可能性が高い高校であると危惧されていた。実際、高校魅力化の事業がスタートした二〇二一（平成三三）年度には二七名まで減少している。その後、二〇一四（平成二六）年度と二〇一六（平成二八）年度にも入学者が二七名にまで減少している。

当時の島根県の統廃合検討基準では、吉賀高校の場合は三学年合計で六三人（中山間地の一クラスの定員を三五人で計算して全校の生徒数の五分の三）に満たないことが閉校の目安であった。太田校長の町内の小学生数に基づいた予測（町内中学卒業生の50%が吉賀高校に入学するという試算）（吉賀高校二〇一三 d）では、吉賀高校の三学年合計生徒数は二〇一八（平成三〇）年度に六八八人、二〇一九（平成三二）年度には六四人、二〇二〇（平成三三）年度には六六人となる恐れがあった。

しかし実際には次に見るように、高校魅力化の取り組みを始めた様々な取り組みが功を奏し、生徒数は二〇一八（平成三〇）年度に一〇〇人、二〇一九（令和一）年度には一〇四人、二〇二〇（令和二）年度にも一〇九人を確保できた（『めたせこいあ』（学校通信）97号、109号、121号の各号より）。



〈生徒数（三学年合計）の予測と実際〉

二〇二二年度時点の予測

二〇一八年…六八八人

二〇一九年…六四四人

二〇二〇年…六六六人

実際

二〇一八年…二〇〇人

二〇一九年…二〇四人

二〇二〇年…二〇九人

生徒数で見ると、吉賀高校は大いに「魅力的」になったと言える。本稿は、このあと、吉賀高校がどのようにして魅力的になったのかを考察する。

### 5-3 町外高校進学理由

第一八代太田肇校長（二〇一〇年度～二〇二二年度）の当時、吉賀高校は町内中学生が町外高校へ進学する理由を次のように分析していた。

- ① 理系の進路対応ができる高校へ進学する。（吉賀高校では、理科の教員が生物担当の一名しか確保できず、物理・化学への対応が難しい。）
- ② 吉賀高校にはない部活動を求めて他校へ進学する。（野球、バ

スケッチボールなどの体育系部活動や、吹奏楽などをするために他の学校へ進学する）

③ 近隣の他の普通科高校へ進学する。（進学に関してより実績のある大きな高校へという意識は根強く残っている。）

④ 推薦により経済的な得点を得て、私立高校へ進学する。

⑤ 普通科以外の高校へ進学する。

出典：吉賀高校、二〇二〇、「中学生の進路選択と中高一貫教育の課題」『中高一貫教育基本構想（H二三年四月）』

これら五つの理由のうち、①と③（と⑤）が高校の進路指導に関わる理由であり、②が部活動、④が経済性に関わる理由である。高校魅力化を経験する以前の高校教育を評価する基準は、生徒自身も高校も進路の幅の保障（高い進学実績）、部活の保障、経済性の三つが大きな評価基準だったのである。

吉賀高校はこのように分析された町外高校進学理由に対応するために、二〇一〇年の時点では学習指導・進路指導、部活動指導を強化しようとしていた。また、経済性に関わっては、吉賀町の助成でスクールバス制度を整えた。さらには、後述するように中高一貫（連携型）のショーウィンドウ効果によって生徒数減少に歯止めを掛けようとした。

### 6 吉賀高校の高校魅力化スタート時点の試行錯誤

太田肇第一八代校長（二〇一〇年度～二〇二二年度）は吉賀高校が島根県の「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」を受け入れ、

スタートさせた時の校長である。

島根県の離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業は、地域の特色を活かした教育を行うことを条件の一つとしている。島根県の高校魅力化事業のスタート時点では、これに部活動の強化、進路指導の強化を加えたものが魅力化の三本柱と考えられていた(二〇一三年七月、島根県立飯南高校飯塚校長へのインタビュより)。これに対して、吉賀高校は既に開始していた連携型中高一貫教育の強化を柱にしたのが特徴であった。

## 6-1 音楽の町

「離島・中山間地域高校魅力化・活性化の事業」は地域の特色を生かした教育を行うことを要件としている。しかし、吉賀高校の二〇一二年度の高校魅力化に関わる事業は後述するように中高一貫に関わる事業が中心であった。中高一貫に関わる事業は学校制度の特色であったという点で、今日の吉賀高校の地域の特色を生かした教育(地域課題解決型学習Ⅱアントレプレナーシップ教育)の取り組みとは、趣旨が異なっていたと言える。

そして魅力化がスタートした二〇一一年度には、もっと趣旨が異なっていた取り組みを試行していた。高校魅力化によって地域の特色を作ろうとしたのであった。二〇一一年度の高校魅力化は「吉賀を音楽の町にしたいとかいうような壮大な構想」で行われていたのである。このことについて第二〇代熊谷修山校長はインタビュの中で次のように語っている。

そうそう、吉賀は一人コーディネーターで先にいた人が、私が赴任した時にはもういなくなっていたんだけど、彼が吉賀を音楽の町にしたいとかいうような壮大な構想があって、魅力化も音楽部みたいなのを作ろうというので、ドラムだとかギターだとか、ごそつとそのお金で買っていると思うんです。だから私が教頭で行って整理したのは、その音楽部の位置付けでした。多分校内の十分な合意もなくやっていると思うんです。「とりあえず、そうしよう。」みたいな、まあ、一部の人の意見で、みんな買って、買った方がいいけど、「音楽部って何するの?」っていうような、行つた時にはそういうレベルだったです。だから一応魅力化の中で音楽部の位置付けというのをちよつと整理しました。

出典:「第二〇代熊谷修山校長インタビュ」

筆者らは全国の高校を訪問している中で、担当者が異動すると取り組みが続かなくなることがあると聞くことがある。学校や地域が一体で取り組む高校魅力化では取り組みが続かなくなるとは少ないのだが、吉賀高校の場合は、高校の力で新たに地域の特色を作ろうという構想を立てたが、担当者の異動と共に構想がしぼんだ。

「吉賀を音楽の町にしたい」という実践は、試行錯誤という意味をもつ実践であり、高校教育の役割を問い直すことに資する実践であった。音楽部の試行錯誤の反省は、二〇一二年度に開始された聞き書きを継続し発展させる考慮に反映されている。

## 6-2 地域活性化についてのビジョン——サクラマスプロジェクト——

吉賀町は地域人材育成（「将来的に地域を支える人材の育成」）を目標に掲げている。吉賀高校の高校魅力化・活性化事業の取り組みは吉賀町の地域人材育成プロジェクトであるサクラマス・プロジェクトと関係づけられて実施されている。

サクラマスはサケ目サケ科に属する魚で、ヤマメと同じ種類の魚であるが、河川に残留した個体がヤマメと呼ばれるのに対して、海降した個体は成熟し生まれた河川に帰り、サクラマスと呼ばれる。残置型のヤマメが比較的小型のままであるのに対して、サクラマスは大きく育つ。吉賀高校は地理的条件から一度は町外に他出した卒業生が、高校時代の学びに導かれてたくましく育つて吉賀町に戻り地域に貢献することを高校教育の目標とする。

吉賀地域中高一貫教育を軸に吉賀高校の教育内容をより魅力あるものにするにより、一人でも多くの地元中学生の入学へつなげ、また吉賀生が地域からの支援を得つつ、地域理解と地域への愛着を深めていく活動を通じて、将来的に地域を支える人材の育成を目指す取り組みを展開する。

出典：吉賀高校、二〇一三b、「平成24年度離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業実績報告書」

吉賀町は九年後の二〇二二年時点でもサクラマス・プロジェクトを行っているが、今日の吉賀高校は地域課題解決型学習を行い高校在学中に地域貢献を体験学習し、地域住民とのネットワーク形成を初めとした社会関係資本の形成を行っている。これに対して当時の吉賀町では、

「地域理解と地域への愛着を深めていく活動」という小学校で行われるふるさと学習に近い学習を行うことでUターンを促進しようとしていた。これに対して地域の特色を生かした教育によってUターン促進地域貢献人材の育成につなげるためのビジョンは二〇一二年度に行われた聞き書きから徐々に整理されていく（第一九代齋藤雅典校長へのインタビュー）、「第二〇代熊谷修山校長へのインタビュー」。

### 6-1-3 二〇一二（平成二四）年度の取り組み（第一期二年目）

二〇一三年三月の吉賀高校訪問時に当時の太田校長からいただいた吉賀高校作成の資料（吉賀高校二〇一三b）をもとに、吉賀高校の初期の取り組みを見てみよう。以下の取り組みは第一期三年間の事業期間の二年目の実績に当たるが、実施内容を見ると、中高一貫教育にかかわる取り組みが8つと多くなっていることや、そのうち、①の「中高一貫教育だより」を除く7つの実施内容がイベントとして行われていることが特徴である。

このように第一期二年目は、吉賀高校自体の魅力化というよりも、募集対策と関連付けられた中高一貫教育のイベントを柱としていることが分かる。上述のように吉賀高校は常に高校の閉校の危機意識をもっており、中高一貫は募集対策の重要な手段であると認識されていたものと考えられる。

#### （1）中高一貫教育にかかわる取り組み

- ① 「中高一貫教育だより」の発行
- ② 中高合同水質調査

③よしか塾の開催（町内四中学校の三年生と吉賀高校三年生（進学希望者）が一堂に会して、学習会を実施。吉賀高校卒業生四名と吉賀高校二年生二名が中心となって学習支援を行い、中日には一年生約一〇名が加わって、個別に中学生の学習支援を行った。ここでは、アイズブレイクの時間も作り、大学生・高校生・中学生の交流の場にもなった。）

④中高合同ロードレース（吉賀高校と吉賀中学校の生徒が、合同でロードレースを行った。高校男子の部（一二キロ約五〇名）に中学生男子六名が参加し、高校女子の部（八キロ約四〇名）に中学生女子五名が参加）

⑤科学フェスティバルの開催（町内で開催された「きん祭・みん祭・農業文化祭」で中高理科教員による化学実験室の開催。町内の五小学校の児童を招待し中高理科教員による化学実験室の開催。）

⑥中高合同地域巡検

⑦合同柔道教室

⑧教員研修の実施（中学校と高校の理科教員が集まって、化学実験室の実施に向けた研修会を実施。また、夏休み等で、町内五小学校の教員も交え、「サイエンス・キー・スクール」のための理科授業の研究会を実施。）

（2）学校行事の取り組み

⑨よしか祭・音楽祭の開催

「よしか祭」に、町内中学生約一〇〇名（中学校により三年生以外も参加）を招待し、中学生による合同合唱の発表、高校生音楽部による演奏会を行った。



- (3) 教育内容に関わる取り組み
- ⑩ 各種キャリア教育講演会の実施
- ⑪ 地域活動の展開
- (4) 部活動に関わる取り組み
- ⑫ 校外遠征の実施
- 運動部の県外遠征などにかかるバス借上げ
- ⑬ 活動実技レベルアップ事業の実施
- トレーニングコーチを招聘、フィジカルトレーニングコーチを招聘、高校トップチームを招いて、バレーボール教室、写真部作品のパネル化と町内小中学校、看板制作会社の方を、指導者として招聘。
- (5) 生徒募集・魅力PR
- ⑭ 学校案内の作成
- ⑮ 「広報吉賀」内での『サクラマス・プロジェクト』PR紙面の確保
- ⑯ ノベルティの作成
- ⑰ ホームページの更新
- ⑱ 学校PTA総会での広報活動
- (6) その他
- ⑲ 部人材の活用
- サクラマス・コーディネーター人材配置
- ⑳ 「吉賀発サクラマス・プロジェクト助成金」

○通学バス助成金

○ビジネス手帳購入補助(二〇二三年度用)

以上、吉賀高校作成の資料(吉賀高校二〇一三b)をもとに具体的な取り組みを列挙したが、初期の吉賀高校の高校魅力化の取り組みは多岐に渡っていること、部活動も含めて中高一貫の充実に重点が置かれていることが特徴的である。高校魅力化に取り組み残りの7校では、他校では進路実績の向上、地域課題解決型学習、部活動の活発化を高校魅力化の三本柱としていたのとは対照的である。吉賀高校の取り組みは中高一貫校であることを活かした取り組みであった。

吉賀高校の魅力化ではその後、募集対策が強調される中高一貫のイベントは徐々に後景へと退き、地域課題解決型学習(聞き書きを原点とするアントレプレナーシップ)が前面に現れてくるが、そのまえに、次節で吉賀高校は前述のように分析された町外進学の理由に対応するために二〇一二年度においても受験学力向上の指導に力を入れていたことを見ておきたい。

7 補習、習熟度別授業等

吉賀高校は上述の高校魅力化の取り組みと並行して、進学指導の充実によって入学者数を増加させようとした。このことも吉賀高校の試行錯誤であり、自分を問い直す作業の一つであった。

二〇一二年当時の高校魅力化原8校では、地域の特色を生かした教育(や地域課題解決型学習)、部活動、進学指導の三つが魅力化の柱と見なされる傾向があった。吉賀高校の場合は上述のように高校魅力化



表2. 国公立大学合格者数の推移

出典：吉賀高校 2013 d

1993～1997	1998～2002	2003～2007	2008～2012
3人	5人	10人	20人

開始以前には中高連携を募集対策の柱にしてきた経緯があった。また、次に見るように学習環境の改善や進路指導の改善にも大きな力を入れてきた（吉賀高校 二〇一三（a））。

学習環境の改善では、多様な生徒への対応として、習熟度別授業（英語・数学・国語）を実施。補習については一・二年生を対象に「夏期補習（前・後期）」、三年生を対象に「平日補習」「夏・冬・季補習」を実施。補充授業も行っており、一・二年生を対象に「夏期補習」時に開講。さらに、個別添削指導を一年次から必要に応じて対応。

受験生への学習指導にも力を入れており、①進路保障のための取り組みとして、平日補習（放課後一、二限）が六六日（六月～一月）。休日（土曜）補習が一七日（六月～一月）。夏期・冬期補習が一三日にも及んでいる。さらに、平日放課後学習会を平日補習と並行して実施。

こうした学習指導、受験指導はいわゆる進学実績として結果に表れていた。国公立大学合格を進学実績の指標とすると表2のようになる。

二〇一二（平成二四）年度末現在で、島根県立大学に七名、山口大学に四名の吉賀高校卒業生が在学していた。また、二〇〇七（平成一九）年度からは継続して、毎年三～五名が国公立大学に合格するようになった。卒業生が四〇名未満であることを考えると低くは

ない進学実績である。

8 二〇一二（平成二四）年度の新しい取り組み  
——平行して実施された試行錯誤——

吉賀高校は、これまで考察してきたように中高一貫教育の強化と部活動と学習・進路指導の強化によって入学者数確保を達成しようとした。二〇一二年度も中高連携を強化して、例えば学校祭の「よしか祭」で中学生が聴講する教育講演会や中学生が発表する音楽祭を実施した。

しかし、二〇一二年度はそれ以降のアントレプレナーシップ教育、地域課題解決型学習、都鄙間高大協働探究活動（東京の大学生との地域課題解決学習型の協働活動）につながる学習活動が始まった年でもある。

8-1 コンソーシアム等

島根県離島・中山間地域高校魅力化・活性化事業は、原則として町内に県立高校が一枚しかないこと、地域を中心にした事業実施組織をつくることを助成の条件としていた。助成金は高校にはなく事業実施組織に対して助成される。吉賀町は事業実施組織として吉賀高校魅力化・活性化推進協議会を発足させ、その実務面での検討会議としてプロジェクト会を組織した。高校魅力化の実践を検討する場であり、毎月開催される。発足当時のメンバーは町役場企画課・町教委、高校であった。

8-12 東京研修

町からの助成を得て「東京研修」が始まった。東京研修は、プロジェクトの中で発案されたものであり、高校一年生が秋に三泊四日の旅程で東京を訪問する。地元の吉賀町を外から見つめ直す機会となることを目指したものである。第一回から今日に至るまで吉賀町が財政支援を行っている。

地域活性化・振興に貢献できる人材育成を目指し、首都東京周辺の民間企業、施設等での実習体験等の学習活動を通して、自らの生まれ育った地域との対比の中で、生徒一人ひとりの地域発展活動への興味・関心を喚起し、主体的な進路選択のできる能力を持たせる。地下鉄などの公共交通機関を利用することで、都市部での生活も体験させる。

出典：吉賀高等学校、二〇一三、『吉賀発 サクラマス・プロジェクト』  
二〇二二年度高校魅力化研修会資料

東京研修はやがて青山学院大学および法政大学との都鄙間高大協働探求活動へとつながることとなった。二〇一三年度から校長に赴任した齋藤雅典校長が、東京研修の一環で東大の赤門見学をすることに疑問を感じ、『地域人材育成研究会』に高校生と大学生（青山学院大学生、法政大学生）の交流事業を提案したことで開始され、その後段階的に発展した。開始時点では高校生と大学生が相互に相手の視点で自身や自分の町を見ることに力点が置かれた。詳細は後述する。

8-13 聞き書きと聞き書き甲子園

聞き書きは吉賀高校の高校魅力化の骨格を形成することになった。以下、聞き書き導入の経緯と聞き書きが切り開いた可能性について考察する。

聞き書きは二〇一二年度に、当時のコーディネーターの発案で一年生を対象に開始された。二〇一七年度からは三年生を通して行われるアントレプレナーシップ教育の一年目として位置づけられ、行われた。

当時、聞き書き甲子園が注目を集めていた。聞き書き甲子園の主催は聞き書き甲子園実行員会（農林水産省、文部科学省、環境省、公益社団法人国土緑化推進機構、NPO法人共存の森ネットワーク）であり、二〇〇二年度に第一回大会が開催され、高校生がおもに「森の名人・名人」から話を聞いた結果を報告する大会である。森林環境教育の一環としてとらえられていた（安藤・興梧二〇一四）。吉賀高校生も聞き書き甲子園の大会に参加している。

日本では、聞き書きという手法は社会学者の桜井厚の影響を受けている（渡辺ほか二〇一八）。社会学では、社会的構築主義という考え方がある。人は語ることで自分の今と過去・未来に意味が与えられるという。社会的構築主義の考え方に立つなら、聞き書きの対象となった地域住民にとっては、自分の人生に意味が与えられ、さらに人生と地域とが関係づけられたと考えられる。

8-4 吉賀高校の聞き書きのねらい

初年度の聞き書きは、一年生の「総合的な学習の時間」の中で行われ、合計時数一五時限を使って、一年生三三名が地域のお年寄りから話を聞き記録を残した(表3)。

聞き書きは、吉賀高校の立場からは「地域の方からも必要とされる学校」となるためのプログラムと位置づけられた。人口六千人台の中山間地域の町で三三人(あるいは三三戸)が対象となったことは、地域住民にとって吉賀高校を身近に感じさせる効果は少なくない。

二〇一二年度の聞き書きのねらいは以下の三点であった。

- ① 温かなコミュニケーション能力を身につける
- ② 自活力とモノづくり・コトおこしのできる能力を身につける
- ③ 地域での生活や特色について深く知る

出典：吉賀高校、二〇一三b、「平成24年度離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業実績報告書」。

一番目に「温かなコミュニケーション能力を身につける」こと、二番目に「自活力とモノづくり・コトおこしのできる能力を身につける」ことをあげていることが興味深い。聞き書きが開始された当初は、吉賀高校は生徒の探究力を高める手段として行われるのではなく、つなげる力や地域課題解決力(自活力、モノづくり・コトおこし)の育成を目標にしており、それらは地元の共同体を生きる歴史を知る営みの

表3. 2012年12月聞き書き発表会発表タイトル一覧(話し手・作品タイトル)

三宅和人さん・仕事と共に歩んだ人生	寺戸忠次郎さん・親から子へ、受け継ぐ百姓
大庭尚さん・60年たった日	末岡正文さん・海外での体験
平田晴子さん・87歳のおばあちゃん	蔵本達則さん・蔵本さんの人生
山根乗教さん・今までの人生	山本幸枝さん・ムシロ編み
中村亨さん・総代の仕事	稲倉千鶴枝さん・自分のためより人のこと
田村正人さん・お百姓さん	村田知さん・竹細工
福江ハツノさん・産婆	大庭寛さん・おじいさんが好きな牛
山田浩さん・蔵板木	斉藤久男さん・斉藤久男さんの昔話
黒谷薫さん・人生において大切なこと	河野孝祐さん・農業と人生について
宗内祥子さん・宗内さんの味噌作り論	宗内金八さん・健康だからこそその92年間
三浦照夫さん・棚田の話	山本利幸さん・八81年間の軌跡
松本正さん・大工という仕事	長藤忠夫さん・今までやった仕事
山下梅子さん・有機農法と今の子どもたち	福原信二さん・神楽の斉藤さん
宗内富美枝さん・昔の仕事	羽野善雄さん・鴨による米作り
藤原一夫さん・シャクナゲの里について	花崎訓恵さん・天然酵母のパン作り
河野富士夫さん・レストランの仕事	川本隆光さん・どもたちの未来のために
山本正之さん・縄文時代	

中で行われる学びであった。

このような目標に導かれて行われた聞き書きは、初年度の段階で地域活性化や地域住民に対して与える効果があったことが読み取れる。地域住民への配慮や地域住民からの反応については、二〇二二年度の聞き書きの振り返り等に次のように書かれている。

・「生徒に何も話してやらなかった」という人もいた。また、「自分たちが話したこと、経験、伝わらない」というもどかしい思いをされた人もいたようである。

・話し手にとっても充実感が得られることも必要ではないか。(工夫)

・(相手方に)話を聞いてくれたと思ってもらうことも必要ではないか。

出典：吉賀高校、二〇二二c、「聞き書き今年度振り返り」(二〇二二年度報告書)(※2013年訪問時の収集資料)。

学校通信『めたせこいあ』三三三号は、聞き書き発表会に会場した町民の感想を掲載している。

○年配の方は地に足がついた生き方をしている。聞き書きを通して年上の人の生き方を学んでほしい。

○生徒にとっては全く知らないご高齢のところへ、自ら連絡してアポをとって、インタビューすることは、とても勇気が要ることでしょう。高校時代にこのような体験、経験をすることは、必ずや将来の生き方にきつとプラスになることと思います。

○報告はそれぞれよくまとめられていました。ただ発表する声の小さい人があり、聞き取れなかったのは残念でした。あの場で、そのことを言ってくださる先輩の方がおられました。もし、次のような機会がありましたら、しっかりと大きな声で伝えていただければ嬉しいと思います。

○自由という言葉は君たちには一番伝わる言葉だと思います。私は自分で自分の道を選んできたことを後悔していません。選択し、それに責任をもつという自由を得てほしいと思います。

出典：吉賀高校、二〇二二、『めたせこいあ』(吉賀高校学校通信)、(33) (二〇二二年二月号)。

この記事は次に見るように吉賀高校が生徒に対して町民からの期待を伝えること及び高校と町民の交流の発展を強く意識していることのと表れと考えられる(「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」および「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」)。

これ聞き書き甲子園とか出たりしているんですけど、これで子どもたちが地域に出ていくっていう形がスタートしたかな。……子どもたちの活動が地域の人の目にとまる。でもそのことで「聞き書き」ですから地域の方で語る人がいるわけです。その語る人たちも元気になるというような構図が少しずつ形となって出来上がっていきこうとしていて、それでやっぱり広く受け入れてもらえるようになったですかね。出典：第二〇代熊谷修山校長インタビュー

聞き書きは、二年目にすでに吉賀高校の高校魅力化の柱となり、その後、

アントレプレナーシップ教育やビジネスコンテスト参加へと発展し始める。

(二年目に)「結局聞き書きしてどうするんですか?」っていう話になって「じゃあ、二年目どうする?」って話になった時に、……次のステップ、吉賀町にこんないいものがあるってわかったんだったら、そのいいものを使って商売しようと考えました。

出典:「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」

それから川本町で古本屋やつとつた男性がいますよね? その方にも最初に来てもらいました。それがスタートだったのかな? 「聞き書き」を一年生でやって、二年目は『アントレプレナーシップ教育』にしようと、だから「聞き書き」でいいものを知るんだから、二年目はそれを使って何かをするという生徒の能動性、それが主体性になるという所ではあるんですけど、それを引き出すと。そうすると子どもが「吉賀町ってこんないい所があるんですよ。」「じゃあそれを使ってまた商品開発とか、観光開発とかそんなことをしようや。」っていうことになって、二年目のその時にビジネスコンテストに出したんです。

出典:「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」

以上見たように、聞き書きは吉賀高校の地域課題解決型学習の原型であり、四年後の二〇一七年度に学年をまたいで授業を統合したアントレプレナーシップ教育の一年生の授業に位置づけられた。聞き書きは生徒が地域に出て行くという形式の出発点であり、住民が高校に関心

をもったり元気になったりする出発点であり、高校生が吉賀町に関心をもつことの出発点であった。

## 9 吉賀高校魅力化の特徴

——試行錯誤と終わりのない問い直し——

吉賀高校の二〇一一年度以降の高校魅力化の事例では、吉賀高校はカリキュラム・マネジメントをずっと続けている。普通科教育を問い直し続け、吉賀高校の使命を問い直し続け、そして地域との関係を問い直し続けた結果、現在の吉賀高校版の高校魅力化に至っている。そして問い直しは続いている。なお、二〇一六(平成二八)年の中央教育審議会答申でも「社会に開かれた教育課程」はカリキュラム・マネジメントとセットで提唱された(中央教育審議会二〇一六)。

今の吉賀高校からは想像できないが、魅力化の当初は「お金があるからそれのできるものを作ろう」という様子だったという。

その時の吉賀高校の魅力化の取り組みは、部活でTシャツ作って中学生に配るとか、校名の入ったクリアファイル作ったりとか、ペン作っていたのかな? 何かそういうネーム入りの、ノベルティグッズを作るような、とりあえず「魅力化」として何かやらなくちゃいけない、だから、お金があるからそれのできるものを作ろうというような流れだったかな。

出典:「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」





吉賀高校の高校魅力化は試行錯誤と問い直しの歴史であった。島根県の助成事業がスタートした翌年には、第六節で見た合計二〇もの取り組みにチャレンジしている。以下、要約して再掲する。

- (1) 中高一貫教育関係の取り組み (①「中高一貫教育だより」、②中高合同水質調査、③よしか塾の開催、④中高合同ロードレース、⑤科学フェスティバルの開催、⑥中高合同地域巡検、⑦合同柔道教室、⑧教員研修の実施)
- (2) 学校行事の取り組み (⑨よしか祭・音楽祭の開催)
- (3) 教育内容に関わる取り組み (⑩各種キャリア教育講演会、⑪地域活動の展開)
- (4) 部活動に関わる取り組み (⑫校外遠征の実施)、⑬活動実技レベルアップ事業の実施)
- (5) 生徒募集・魅力PR (⑭学校案内の作成、⑮「広報吉賀」内での『サクラマス・プロジェクト』PR紙面の確保、⑯ノベルティの作成、⑰ホームページの更新、⑱学校PTA総会での広報活動)
- (6) その他 (⑲部人材の活用、⑳「吉賀発サクラマス・プロジェクト助成金」)

このような「それができるものを作ろう」というエネルギーや二〇の取り組みにチャレンジしようというエネルギーを「問い直し試行錯誤し続ける」エネルギーに発展させた大きなきっかけは「聞き書き」を行ったことであった。

「聞き書き」は一人のコーディネーターが提案し、過去の経験からその提案に感じるものがあつた太田校長や魅力化担当の熊谷教頭が賛成

して始まったのである。その後、聞き書きの実践を毎年新しくしながら、吉賀高校は普通科教育や吉賀高校の問い直しを継続し、今日につながる改革改善の方向と方法を見いだした。問い直しの過程は本稿で紹介したほか、地域人材育成研究会の『地域人材育成研究』第5号に所収されている「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」や「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」、「第二一代渡部俊郎校長インタビュー」を参照されたい。

吉賀高校の試行錯誤と継続的な問い直しは高校魅力化に用いる資源を育て、拡大させた。この観点から、吉賀高校が用いることができる資源の拡大を考えてみよう。

まず、利用できる組織や仕組みは、当初、中高一貫制による中学との協働があつた。当時の地域学校協働の資源はフォーマルな「吉賀高校振興会」であつた。その後「聞き書き」等の実践を通じて地域の側のインフォーマルな声を取り込んでいる。この機運の中で「吉賀高校応援隊」が発足し地域と高校のインフォーマルな協働が生じたのは二〇一四年であつた（第二〇代熊谷修山校長インタビュー）。吉賀高校応援隊には校外での活動を支援してもらつたという（第一九代齋藤雅典校長インタビュー）。その先にある吉賀町住民との本格的な協働は高校魅力化のさらなる継続と発展を経た後であつた。

コーディネーターの資源については、吉賀高校は第一八代太田校長の時代に二人の影響力がある人材を得ることができた。この二人の人材が聞き書きの取り組みを可能にしたといえる（第二〇代熊谷修山校長インタビュー）。なお、地元出身で他出経験もあり、地域との関係が深い（町内の保育園勤務の経験があり高校生を小さい頃から知って

いる）人材でもあり、そして私たちのような都市部の研究者のメンタリティにも通じているSコーディネーターは太田校長が離任した後に着任している。

資源としての大学教員は、今日では複数の大学教員が吉賀高校の魅力化に関与している。我々地域人材育成研究会のメンバーも含めて、関与のきっかけは高校や町が公的に（あるいは計画的に）招聘したものでない。吉賀高校の高校魅力化の取り組みに関心を持ち訪問を繰り返す中で関与するようになったのである。

近年、募集対策の手段として高校魅力化を始める高校の中には、寮を作り県外生募集を行つたり、公設塾を設立することが定番化している。また、地域を教育の資源として活用することで総合的な探究の充実や「探究学習」の充実を改革の目玉とする高校も増えている。

しかし、本稿の考察が示唆するところは、吉賀高校では終わりのない問い直しと多様な試行錯誤がなされ成果をあげた。とりわけ聞き書きをきっかけに地域学校協働が芽生えたり、キャリア教育と地域特色を生かした教育（や地域課題解決型学習）が深化されたりした。聞き書きはやがてアントレプレナーシップ教育へと発展し、第一九代校長齋藤雅典氏、第二〇代校長熊谷修山氏へのインタビュー（『地域人材育成研究』第5号収録）で語られたように、生徒の学習習慣の改善や荒れの解消という成果、さらには出口指導ではない進路指導や生徒の地域への当事者意識向上や自分自身のキャリアへの意識向上という成果をもたらした。

高校魅力化改革に定義はない。しかし吉賀高校の事例が示唆するところは、今日の高校魅力化では、何をするかを模倣することではなく、

どのように取り組むか、すなわち試行錯誤と問い直しが意義をもつということであった。

引用・参考文献

- 安藤愛・興枳克久、二〇一四、「森林環境教育としての『聞き書き甲子園』の社会的意義とその効果」『日本森林学会誌』九六(三)：一三三―一三一。
- 中央教育審議会、二〇一六、『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』(中教審第一九七号)(平成二八年二月二一日)。
- 中央教育審議会、二〇二二、『令和の日本型学校教育』の構築を指して〜全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現〜(答申)』(中教審第二二八号)(令和三年一月二六日)。
- 樋田大二郎、二〇二一 a、「第二〇代校長熊谷修山先生(二〇一六年度〜二〇一七年度)の語り——キャリア教育では「何を」とどこで「ガリアリティ」として重要になる」『地域人材育成研究』(5)：二七―五三。
- 樋田大二郎、二〇二一 b、「第二二代渡部敏郎校長(二〇一八年度〜二〇二〇年度)の語り——(地元の)吉賀町にとって吉賀高校はどうあるべきか常に考えながらやっています。——」『地域人材育成研究』(5)：五四―六九。
- 樋田大二郎・樋田有一郎、二〇一八、『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト——地域人材育成の教育社会学』明石書店。

樋田有一郎、二〇一四、「町存続の生命線としての高校存続。町活性化の最前線としての高校活性化」島根県立横田高校の挑戦」『青年問題』61(655)：四二―四七。

樋田有一郎、二〇二一 a、「第一九代校長齋藤雅典先生(二〇一三年度〜二〇一五年度)の語り——最初は、やること自体が目的」『地域人材育成研究』(5)：六一―六六。

樋田有一郎、二〇二一 b、「人口減少県の高校魅力化から全国の普通科の特色化・魅力化へ——どのように離島の高校改革が全国の高校改革に展開したか」『山陰研究』(一四)：一一―一二別冊。

文部科学省初等中等教育局参事官(高等学校担当)『これからの高等学校教育について』(令和二年一月二五日)。

六日市町史編集委員会、二〇一七、『六日市町史 第三巻』。

島根県教育委員会・島根県高等学校長協会、一九六八、『島根県高等学校教育二十年史』島根県高等学校長協会。

渡辺暁雄・小関久恵・遠山茂樹、二〇一八、『聞き書き』による新たな『物語』へ——歴史記憶世代をつなぐ『場』の創出」『東北

公益文科大学総合研究論集：Forum 21』(34)：三三―五三。

吉賀高校、二〇一〇、「中学生の進路選択と中高一貫教育の課題」(H二三年四月中高一貫教育基本構想)。

吉賀高校、二〇二二、『めたせこいあ』(吉賀高校学校通信)、(33)(二〇二二年二月号)。

吉賀高校、二〇一三 a、「5. 課題共有〜もしも吉賀高校が無くなったら〜」『島根県立吉賀高等学校(1期)「離島・中山間地の高校魅力化・活性化事業実施報告」(※2013年訪問時の収集資料)。

吉賀高校、二〇一三b、「平成24年度離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業実績報告書」。

吉賀高校、二〇一三c、「聞き書き今年度振り返り」(二〇一二年  
度報告書)(※2013年訪問時の収集資料)。

吉賀高校、二〇一三d、「二〇一三年三月地域人材育成研究会訪問  
調査時の説明資料」吉賀高等学校第一九代太田肇校長作成(※  
2013年訪問時の収集資料)。

吉賀高等学校支援協議会、二〇二一、『吉賀高等学校魅力化のあゆ  
み』。

吉賀町、「吉賀町の概要」『吉賀町ホームページ』(二〇二一年八月  
一四日取得 <https://www.town.yoshika.lg.jp/about/shoukai/>)。

寄稿

## 吉賀高校アントレプレナーシップ教育の歴史

島根県立吉賀高等学校教育魅力化コーディネーター 坂田紀之

1 吉賀高校の中でのアントレプレナーシップ教育とはどのようなものか

アントレプレナーとは？

独創的なアイデアと技術で新しい事業を起こす起業家を意味する。

アントレプレナーシップとは？

その起業家の精神のことで、吉賀高校における「アントレプレナーシップ教育」とは「起業家精神に学ぶ」ことを基本に置く。

生徒は実際に「起業」することも含め「独創的なアイデアと技術」で「無」から「有」を生み出す精神を獲得させることを目指す。

吉賀高校でのアントレプレナーシップ教育のテーマは？

ベースは「吉賀町」です。生徒が吉賀町をフィールドとして吉賀町内各地に足を運んで吉賀町の人と接し、吉賀町にある「ひと」「もの」「こと」に直接触れることや、コミュニケーションを通して吉賀町の課題を発見し、あるいはアドバンテージを発見することで、生徒のアイデアをもってその解決策や活用方法を考え出していくこと。

吉賀高校でアントレプレナーシップ教育を行う意義は？

吉賀町では「サクラマスプロジェクト」という吉賀町オリジナルのふるさと教育が町内「保育所・小学校・中学校」さらには地



域の公民館を中心に展開されている。このプロジェクトによって生徒はフルサトのことを肌で感じ、歴史や知識として吉賀町への愛着を深め、地域の一員としての自覚をもつようになる。

高校ではその発展として「アントレ教育」の中で、地域の課題を自分自身が能動的にかかわる「自己の課題」として取り組むように転換しプロジェクトを考案、実施していく。

## 2 吉賀高校アントレプレナーシップ教育の歴史

地域の古老に話を聞きに行く「聞き書き」が始まりだった。

二〇〇二年から始まった「共存の森ネットワーク」の主催する「森の聞き書き甲子園」の手法を基に、ワザビを作る人、助産師さん、炭焼きや林業などに関わる古老の一言一言に歴史を感じ、何気なく出てきた言葉にその人の生き様や、人生などを聞き取る時間であった。

「ICレコーダー」を準備し、録音されたものをすべて書き出す作業となったが、すべてを書き出すことは難しいこと、また、取材する生徒のほうにも話を引き出す力が求められ、個人個人の力量に差の出る始まりであった。

以下、吉賀高校の中でのアントレプレナーシップ教育を年表にした。

平成二四年度（二〇二二年）：サクラマス・ドリームプログラム（SDP）の始まり

サクラマス・ドリーム・プログラム（SDP）の発案。

一年生が聞き書き、二年生が吉賀町で何ができるか考える（ア

ントレプレナーシップ教育）、三年生が進路も視野に入れ、吉賀町で自分に何ができるか考える。この一連の活動を「サクラマス・ドリーム・プログラム」と名付けた。

一年生：吉賀町について知る（聞き書き）前年に続き地域や古老に取材に行く際「ICレコーダー」を準備し、録音されたものをすべて書き出す作業となった。その取材の中から「心に残った言葉」をキーワードに取り組んだ。

この年度の反省として、録音されたものを「書き出す」ことが主な活動となり、キーワードを発表することで終わってしまい、その後の考察や発展には至らなかった。

二年生：この年から「アントレプレナーシップ教育」という名前の下で取り組みが始まった。一年生の「聞き書き」の次の段階となるもので「吉賀町で何ができるのか？」を考えるものとして位置付けられた。

二月四日（水）「吉賀町活性化プラン発表会」を開催した。取材に関わった人や行政の方々に前にも、自分たちの考えたビジネスプランのプレゼンを行った。

チームコウヤマキの企画した「吉賀町で大きくなる夏々体験から受験対策まで、よしかの自然に全部お任せ」は幼児から小学生を対象とした受験対策や自然体験を、夏休みの自由研究まで含めたツアーであった。このプランは日本政策金融公庫主催の「高校生ビジネスグランプリ」のベスト一〇〇に選ばれた（応募総数一五四六件）



平成二五年度（二〇一三年）：「聞き書き」の発展・高校生  
ビジネスグランプリへの参加

一年生：ICレコーダーによる録音の書き起こしだけでは生徒の  
考察につながらないことなどの反省を踏まえて「聞き書き」を  
見直し、再スタートを切った。

地域の古老に限らず農業関係・文化関係・地域の商店など  
にも取材先が広がった。しかし、取材先が生徒の「知り合い」や、  
「知っているところ」などに限られたため、吉賀町内の新しい  
人や物の発掘などの広がりには繋がらなかった。

成果としては、町外からの生徒によって吉賀町内に限らず  
「津和野町」まで取材範囲が広がったこと。また、生徒全員で  
巨大な鹿足郡の地図「吉賀町聞き書きマップ」を作成し、自  
分たちの取材先などの「マーク」や「アイコン」を作成した。  
聞き書きだけでなく地域も考えることで生徒全員が関わるこ  
とができ、活動自体が「見える化」された一年であった。

二年生：八月に六チームに分かれて町内の六企業へ職業体験を行っ  
た。九月には職業体験報告会を開催した。

その後七チームに分かれて吉賀町活性化プランを考察した。

平成二六年度（二〇一四年）：青山学院大学との高大交流の始まり  
一年生：この年も古老などの「聞き書き」にとらわれず、生徒自身（グ  
ループで）が取材してみたい「人」や「もの」を選び、主体  
的に取材交渉を行い、聞き書き成果としてそれぞれの取材し

たものをパンフレットにして町内に配布した。

一〇月：東京研修の中で青山学院大学において生徒が吉賀町について初めてプレゼンを行った。プレゼンの前には大学生によるキャンパスツアー（大学生のキャンパス生活紹介）を行い、高校生にとっては普段見ることのない場所を案内してもらった。また、ワークショップ形式でお互いの地元での生活紹介を行った。

二年生：一二月四日二年生によるビジネスプラン発表会

平成二十七年二月六日（金）松江市島根県立産業交流会館（くまびきメッセ）問題解決型成果発表会に参加。吉賀町活性化ビジネスプラン「高速道路から ゆらら に続く道を作ろう」のメンバーが参加した。

二年生全員が日本政策金融公庫主催の「高校生ビジネスگرانプリ」に応募

平成二十七年（二〇一五年）：SDP（サクラマス・ドリームプロジェクト）の整理の一年

一年生：高校のクラス分けの中で「グリーンコース」が設定された時期でもあることから「環境」や「高津川」に関心をもつことになった。また次年度に「全国高校生環境サミット」が開催されることも決定し、それも含めてテーマを「高津川」に絞り八チームに分かれて以下の課題について聞き取りを行った。

河川工事が川に及ぼす影響

蛭とアユの関係性

高津川と有機農業の関係性

森林が及ぼす高津川への影響

高津川の生態系

家庭排水の現状から探る高津川

高津川の良さを生かした魅力の発信

高津川のアユの生態と状況

地域への取材や関係機関への取材を積極的に行うようになってきた時期であった。アンケートに限らず、地域の家庭や事業所を生徒が実際に訪問し、一〇〇件の聞き込みアンケートを行ったグループもあった。

一〇月：東京研修において青山学院大学の学生の前で、聞き書きで取り組んでいるテーマをそれぞれに発表し、その後のグループワークでアドバイスをいただいた。

青学食堂にてスペースを取っていただいて学生と一緒に昼食を摂ることで都会の大学生との距離が一気に近づいたように感じた一年であった。

二年生：七チームが吉賀町の活性化プランを考察した。年度当初から「高校生ビジネスگرانプリ」への全員のエントリーを目標にしていたため、プランだけではなく「お金」や「具体的な人」などがより具体的にプランに織り込まれなくてはならず、「夢のある企画」よりも「現実的なプラン」が多かった。

平成二八年度（二〇一六年）：キャリア教育とアントレ教育の融合の協議が始まり

一年生：「三〇年前から学び三〇年後につなげる」をテーマに考察や取材をし、テーマを掘り下げていった。

一〇月：東京研修、青山学院大学の学生の前で「聞き書き」で取り組んでいるテーマについてグループごとに発表した。また、八月に開催された「全国高校生環境サミット」で全国から集まった生徒と関わった生徒が「思ったこと」「感じたこと」「やり遂げたこと」について報告を行った。

二年生：七チームが全体的に「吉賀町の活性化」と「人を呼び込む」ことについて考察をした年であった。このプランのなかの「吉高ライスバーガーを売り込め」という企画を具体化し、レシピや商品を実際にショッピングセンターキヌヤへ持ち込み商品化にこぎつけた。吉賀高校のアントレの中で現実に販売される商品になるという大きな一歩となった。またこの商品は一月と二月で行われたキヌヤ「吉賀町フェア」において大好評を得、ヒット商品となった。

また、この年にプラン化された「カレンダー」は翌年の後輩に引き継がれ、吉賀町のカレンダーとして商品化された。先輩から後輩へのプランの引継ぎが初めて具体化された事例であった。

平成二九年度（二〇一七年）：高大交流の発展・聞き書きとアントレの統合と整理の時期

これまで一年生は「聞き書き」二年生は「アントレ」とすみ分けして取り組んでいたものを二九年度から「アントレプレナーシップ教育」に統合し、一・二年生の連続性を持たせた二年間での「アントレプレナーシップ教育」に取り組むという形で新しいスタートを切った。一年時の初めから吉賀町の課題を考え、ただ案を考えるだけにとどまらず実際に二年掛かって具体的な形に到着することを目標にした。

一年生：吉賀町魅力化・活性化プランをテーマに九チームで活動した。

この年から八月に吉賀町で青山学院大学をはじめとする大学生との交流が始まり、八月の時点で大学生と一年生が顔を合わせ、現在取り組んでいるテーマを示すことで東京研修の折に都会での共通な課題を見ることができた。吉賀町から見る都市部だけではなく逆の視点からの考察を行うことができるようになった。

取材を続け、吉賀町の現状を見の中で、町内にある小さな商店から「後継者問題」まで考察が広がったことが大きな気づきであった。

一〇月：東京研修、青山学院大学の学生が生徒の取り組んでいるテーマに沿った東京での取材先へアポをとり、半日をかけて地域巡検に連れて行ってくれた。夏の交流があったおかげで高校生と大学生の距離はいつそう近くなり、高校生の抱えている課題についての理解もあることで積極的な意見交換やアドバイスも生まれ、大学生にとっても高校生にとっても東京（都立）や吉賀町がより身近な存在となった。

二年生：具体的に吉賀町への貢献ができるものとして高校生が実際に関われるものや商品化できる具体的な提案が集まった年代であった。昨年のライスバーガーなどが実際に商品化されたこともあり、生徒の中にも「思いをもって動くことでプランが現実になる」実感も生まれてきたようである。このチームの中からカレンダープロジェクトを展開し、町内の名所とバス停を組み合わせたカレンダーを作り上げ商品化を行った。

また、これまでの発表形式を変え、ポスター形式によるプレゼンテーションとなった。これにより生徒が全員でプランに関わり、聞いてくださる方との距離も近く地域のみなさんの意見をより身近に聞くことができるようになった。

※この年から翌年にわたり吉賀町まちづくりアドバイザーの千田良仁先生（伊勢皇学館大学）にアントレに関わって頂いた。

平成三〇年度（二〇一八年）：高大交流の発展と全国高校生SBP交流フェアへの参加

・高校生の課題として長年指摘を受けていた「人前で話すこと」「自分の思いを伝えること」の苦手さを克服するために、人前で発表する機会を増やし、生徒全員が参加するためにポスター形式の発表に改めた。結果として人前での発表を苦にする生徒がいなくなったことは収穫であった。

・吉賀町役場高校支援室を中心にアントレに関する「探究課題候補」や「人材リソース・バンク」を募集し生徒の探究活動に活用させていくことになった。

・総合的な学習の目標を「こうなつてほしい未来」を「自ら創る力」を育成することに定め、その力を育成するために大小さまざまな課題を探究する活動を授業の核とすることとした。  
・アントレの授業で取り組んできた問題解決を「マイプロジェクト」として継続して取り組む生徒が現れ始め、県内他校の生徒と連絡を取りながら、お互いに刺激を受け、向上する姿が見られた。

・二月に高校近くの林業総合センターで開催していた「キャリア教育成果発表会」を吉賀町の中心にある「吉賀町民体育館」に移動することでアントレに関わる様々な方が参加できた。

・ポスター形式で発表することで生徒が当日に発表する回数が増やし（合計八回の発表）たくさん参加者に聞いていただく機会ができた。また発表者との距離が近いこともあり質疑応答なども大いに盛り上がった発表会となった。

一年生：主題を「まちづくり」として「吉賀町は非常に住みやすい町である」という仮説からまちづくりに不可欠な「農業」「商業」「漁業」「医療」「行政」の観点から吉賀町の取り組みや課題を調査することから始まった。調査する結果としてよりよいまちづくりのためには「何を」「どのように」改善していけばよいかを考察して行くことをテーマとした。

八月：青山学院大学・法政大学の学生に高校生が取り組んでいる課題を示し、探究の方法やプレゼンの仕方について大学生からアドバイスを貰った。

午後からは実際に町内に出て探索し、高校生の抱えている課題や吉賀町の現状を共有するフィールドワークを行った。



昨年に続き二回目の吉賀町を経験する大学生もいて、より吉賀町をお互いに理解する中で大学生との距離が一段と深まった年であった。また、吉賀町役場や地域の方々が積極的に関わっていただくようになり、高校だけではなく大学生が吉賀町に来ることで得られる効果や町民の変化を「町」として感じはじめ、改めて大学生を歓迎する基盤ができたような大きな変化の見られた年であった。

一〇月：前年の東京研修の発展として「課題に沿ったフィールドワーク」を目指して青山学院・法政大学の学生と一日かけて地域巡検を行った。

吉賀町に深くかかわってくれた大学生が、高校生のもつ疑問や課題に沿った都会と田舎の比較が具体的にできるような訪問先を設定してもらった。

最終的に青山学院大学に集合し、高校生と大学生でグループワークを行い「田舎と都会の違い」や「フィールドワークで感じたもの・得たもの」というテーマで発表を行った。

二年生：前年からの課題を引き続き深めていく学年となった。しかし、課題は掘り下げたもののそれを解決するにはどうしたらいいかという「具体的な解決方法」にたどり着かなかったグループが多かった。

その中でも「よしかみらいの活性化」に取り組んだグループや「水源会館」の課題に取り組んだチームはイベントを行ったり、ポスターを作成したりと実際に形に残したチームも現

れてきた。

伊勢 S.B.D.への参加：Social Business Project の略で高校生が主体となって地域の社会的課題に対して企画・販売・発信することで高校生の学びの機会を作る大会に中国地方から一チーム参加した。吉賀町にある障がい者福祉施設よしかの里と協働して販売した「なかよしプリン」をテーマに発表し「皇學館大學賞」を受賞した。

三年生：アントレⅢの実現

進路の決まった三年生がライスバーガーの新作「モチフワライスバーガー」を試作し「キヌヤ本部」においてプレゼン・試食会を行い商品化となった。

三年生が自分の意志で課題を見つけ、授業ではないところで「自分の思い描く夢」を実現した最初の例となった。

平成三二年・令和元年度（二〇一九年）：高大交流の発展と吉賀町との連携の充実期

- ・吉賀高校に地域の方を呼び高校生と密に話し合う機会を設けることで、生徒が町民の語る吉賀町への思いを直に感じる機会が増えた。
- ・大学生交流は吉賀高校のアントレ教育の中でも主軸となる活動となってきた。

- ・アントレの授業で取り組んできた問題解決を「マイプロジェクト」として継続して取り組む生徒が増え、「発表すること」「人に伝えること」で自分たちの思いをさらに深めて自走してい

くという理想的な探究の発展が見られた年代であった。

青山学院大学から島根県へ①：高大交流の中から「島根県の教育」に興味を持った青山学院大学の学生が島根県の教員試験を受験し、島根県西部の教員として採用された。高大交流から生まれた成果であった。

一年生：アントレの開始時期を早め、アントレに関する理解を深めるために授業自体に様々な教員が関わられるような体制を構築していった。

生徒には「アントレは未来を創る力をつけるための授業」と位置づけし、小さなことでもいいので自分にできること、自分にしかできないことを見つけ解決していくことを目的にした。

早い時期から伴走する教員を配置することで夏休みにかけて自分で活動するグループが増えてきた。

八月：早い時期から大学生と交流することができ、大学生が吉賀町を訪問する時期には高校生の関わっている課題を大学生が把握していて、その課題に沿った視点で吉賀町の探索ができるようになってきた。

吉賀町教育委員会が積極的に関わっていただくようになり、夏の授業外での交流では大学生と高校生が自然に話し合いを深め、協働して関わりを深めるような場を企画していただくことで大学生との距離が一気に近づくことができた。

一〇月：東京研修では大学生が高校生の問題意識に沿った「都会で



の共通する訪問先」を企画していただくことで、高校生は田舎と都会を自分の目で比較することができた。東京研修から帰ってからの吉賀町でのその後の考察や探求に大いに役に立つ交流が企画された。

二年生：グループワークが充実した年代であった。自分たちにあった課題を設定することで、楽しみながら課題解決に向かって行動するという充実した活動が展開されていた。

人に自分の意見を「伝える」ことが楽しいと感じるようになってきた生徒が増えてきて、発表会も嫌なイベントではなく、どうしたら自分たちの気持ちを観客に伝えられるかという議論をグループ内で行い、様々なアイデアを凝らしたポスター発表が展開された。生徒たちが楽しんだ年であった。

令和二年度（二〇二〇年）：高大交流の発展と全国高校生SBP

交流フェアへの参加

一年生：高大交流をオンラインで開催

コロナウイルス蔓延に伴い例年開催されていた高大交流事業は大きく変わった。オンラインで情報交換やアドバイスをいただくという新しい形が確立され、吉賀町の魅力や自分たちが取り組んでいる課題などをオンラインで伝えるという新しい課題に取り組んだ。

当初はzoomなどの機器を使いこなすのに戸惑っていたが機会を重ねることに慣れていき、自分の思っていることを「伝える」技術は向上していった。

二年生：個別の活動の充実

取り組んでいる課題ごとのグループに「担当教員」がつくことにより、個別の活動は充実して進んだ。地域に出かける活動にも学校として「公欠」扱いで地域での活動が認められるようになったことが大きな進歩であった。

昨年からの課題を引き継いで取り組むチームが多く、時間をかけて充実した課題への取り組みが多くみられるようになった学年であった。

青山学院大学から島根県へ②：高大交流の中から「島根県の社会教育」に興味を持った青山学院大学の学生が、地域づくり・人づくりに関わりたいと島根県益田市のコミュニティリーダーとして赴任した。昨年に続き高大交流事業から生まれた成果であった。

三年生：伊勢SBPへ二回目の参加

二年生の時からプロジェクトに取り組んでいた「それゆけ！コッペパン」チームがオンラインで開催された伊勢SBP (Social Business Project) フェアに参加した。五月の書類審査で全国一三校に選ばれ、八月に開催された「オーラルセッション&実践発表会」で最終プレゼン六チームに選出された。

八月二三日に開催された最終チャレンジアワードで文部科学大臣賞に次ぐ「審査員特別賞」を受賞した。二年次から時間をかけて自分の課題ととらえて進路実現にまでつなげるという吉賀高校ならではの先例となった。

3 おわりに：アントレプレナーシップ教育から得てきた力と現状、そしてこれから

a 始まりのころの状況とそこから見えてきた課題

- ・地域の魅力が語れない。
- ・小さいころから地域に浸れていない。
- ・地域のアドバンテージである自然を経験していない。
- ・地域の宝である「人」と関わることが少ない。
- ・人と関わるのが苦手。
- ・地域の課題を考える機会がなかった。
- ・自分の意見を自分の言葉として「語る」ことが苦手。
- ・地域を見ることとして外に出ていく機会が少ない。
- ・中学校まで「ふるさと学習」や「職業体験」をしていながらそれが高校の「アントレ」につながるものではなかった。

b 解決方法として取り組んだこと

- ・高校で「地域クラブ」を結成し地域に出かける機会を増やした。
- ・一時期アンケートを地域に配り地域の方の意見や思いを集めることを主体にした時期もあった（できるだけ地域に生徒を出し、地域の人と話すことをめざしたため）。
- ・取材のアポ取りなども生徒が行うことにし「自分で考える」機会を増やした。
- ・生徒ひとり一人に「名刺」を作り社会に出るときのマナー

も併せて指導した。

- ・地域の方ができるだけ学校に来ていただくように発表会などに案内をし、生徒と語る機会を増やした（高校の敷居を下げる機会を多くもった）。

・高校生の取り組みを地域に発信できる機会を増やした。

- ・ひとり一人が地域の課題について考える機会を設けた。
- ・発表の形式を「パワーポイント」からあえて「ポスターでの発表」に切り替え生徒全員が何度も発表する形式にした。
- ・一枚のポスターを全員が書き上げることでテーマを「自分事」と捉えられるようにした。
- ・生徒の思いを引き出す「伴走者」の育成の必要性を感じた。
- ・単年度のテーマにせず、高校生活を通して取り組む課題を見つけられるようにした。
- ・大きな課題ではなく身近なテーマを見つけられるようにした。

c 生徒の変化と得た力

- ・自分の言葉で「伝える」技術は向上した。
- ・アポ取りや取材などを自分たちで計画し「動く」ことに抵抗感がなくなった。
- ・「なんとなく」ではあるが「アントレって何？」について自分なりに語ることが出来るようになった。
- ・高校生が「自分たち」のために動いてきたことから「小学生」「地域の人」などと「ど」のように関わってもらえるのかや「どう協力してもらうか」などの作戦を考えるようになった。

・単年度の発表をゴールとせず息の長い取り組みをしていく生徒が現れた。

・高校生が地域の課題や解決法など「自分にできること」を模索しながら「実際に動く姿」を中学生の前で「語る姿」を見せる機会が増えた。

・人前で何度も話すことで自分の中で「思い」が確立されていき、なぜ動いてきたのかの「確信」に変っていく過程が見られた。

・中学校の生徒の発表会に高校生が出向き、アドバイスや意見などを伝える機会も増えた。

#### d 町の変化

・教育委員会が積極的に関わってくれようになり、中学校との連携がスムーズになった。

・町内小中学校校長会に高校も参加できるようになり、高校生の現在の取り組みなどを共有できる機会もできた。(サクラマプロジェクトの中での一貫性が見えてきた)

・高校生の発表に中学校の教員も参加してくれるようになり、高校生の動きを伝える機会が増えてきた。

・高校がポスター発表に積極的に取り組んだのと同時期に中学校も同じようにポスターでの発表に積極的に取り組んでいた。

・東京の大学生が吉賀町や吉賀高校と交流することで「島根県(吉賀高校)の教育」や「田舎での暮らし」に興味を持ち、実際に島根県に住むことになった事例ができた。都会からI

ターンする若者に向けて定住の流れも生まれてきた。

#### e 私が思っているこれから

・生徒の「質問する力」を育成していきたい。

・地域の伴走者、教員としての「伴走する技量」を育成する必要性。

・授業にとらわれずに自分事として動く力を引き出す技量の育成。

・生徒の「思い」を引き出していく大人の育成(少し重複…)。

・まだまだ地域にとって高校生は「お客様」……これを「対等に壁打ち」できる地域の大人になってもraitたい。

・生徒の発想がまだ限定的。もっと飛躍した(はじけた)発想を引き出す力を身につけたい。

・息の長い取り組みをしてほしい。

・マイプロなどで他の高校生徒との交流の必要性。

・全国の先進的に取り組んでいる高校生を実際に見る機会の必要性。

・新しい形だけでなく「生徒に合った歩み方」もある。生徒に合わせた歩み方も必要。



編集者注…本稿は坂田紀之コーディネーターがプロジェクト会で報告した資料を、本人にお願いして加筆修正いただいたものである。坂田コーディネーターは、第一九代 齋藤雅典校長が着任した二〇一三年度から吉賀高校のコーディネーターをなさっている。出身は吉賀町であり、吉賀高校の卒業生である。吉賀高校卒業後は関西の大学に進学し、吉賀町に隣接する益田市にJターンした。その後、吉賀町にUターンして一七年間にわたって保育園長として勤務、そのあと五五歳の時に吉賀高校のコーディネーターとなった。以上の経歴から分かるように、坂田コーディネーターは「地域内よそ者」（町外での経験があり、町外とのネットワークを持ち、しかも町内の事情や町民をよく知っている）である。また、保育園長時代の教え子が吉賀高校の生徒となっているので高校生との距離が近いという存在でもある。

投稿

## 海士町の都市農村交流ツアー「AMAワゴン」の記録と 隠岐島前高校再生に至る前史

有限会社エコカレッジ代表取締役

総務省・地域力創造アドバイザー

島根リハビリテーション学院・特任教員

デジタルハリウッド大学・非常勤講師

尾野寛明

はじめに

本稿は、二〇〇六～二〇〇八年にわたって開催された、島根県隠岐郡海士町（あまちょう）の都市農村交流ツアー「AMA（あま）ワゴン」の記録と、それが廃校寸前だった隠岐島前（どうぜん）高校再生にどのように至ったかをまとめたものです。

隠岐島前高校が奇跡の再生を遂げ、日本の僻地教育の政策そのものを変えてしまったことについてはメディア・論文等幅広く取り上げられており改めて触れるまでもありません。ただ、都市部から教育再生に関心ある若者をどのように呼び込んだのかについては謎に包まれており、各一方で「どうやらAMAワゴンという交流事業がきつ

かけのようだ」と言及される程度にとどまっています。お問い合わせは多数いただくのですが主宰者であった私自身もその意義について長く言語化できていませんでした。この場をお借りして分かる限りのことをまとめましたので活用いただければ幸いです。

「AMAワゴン」というのは、二〇〇六～二〇〇八年にわたって島根県の隠岐諸島・海士（あま）町で行っていた都市農村交流プロジェクトです。尾野がまだ一橋大学大学院商学研究科の修士課程、二四歳だった頃のプロジェクトです。

結果として多数の移住者を輩出し離島の高校が再生するきっかけとなりましたが、もともとはハッピーを着て「田舎に暮らしませんか」と呼びかける移住対策に大きな疑問を感じていたことからでした。嫌気

が差していたといつてもいいかもしれません。

### 「田舎×○○」を組み合わせて特化する

全国各地で「移住フェア」といった類のものが開催されていて、多くの来場者を集めています。各ブースには魅力を詰め込んだ力作のパネル展示が並び、ハッピを着て懸命にPRに努めるスタッフの姿が見られます。でも、もうそんなのやめたほうがいいと思うんです（ハッピー着て移住PRに全く意味がないとは言いませんが）。漠然と田舎暮らしに憧れている層に闇雲に頭を下げて「田舎暮らししませんか」と参加募集するのはもう終わりにできないかと思っていました。

で、そのためには「田舎×○○」を掛け合わせてテーマをしつかり絞り込む作業が必要だと思っただけなんです。周囲の田舎体験ツアーを見ていると、どこも「極上の田舎」、ただそれだけを全面に押し出している。確かに参加者も最初は極上の田舎に感動してくれるんですが、不思議なものですぐに慣れてしまうんですね。そして感動した先に「自分の力でなにかに役に立てないか」と思うんです。

なのに、一方的に凄いでしょと延々と風景を見させられ、多少の相談会や懇親会はあるにせよ、急に住みませんかどうですか・次はいつ来てくれるのと迫られる。駄目なお見合いや婚活事業の典型例のようなことを平気でやっているんですね。相手だってあなたの力になってあげたいし、どうやったら支えてあげられるか、どうやってお互い協力して生活を築いていくか、共通点を探るのが関係を深めていく一歩ですよ。なのに「私はこんなにすごい」「あなたを幸せにします」ばかり主張されてはたまったものではないですよ。

漠然と住んでほしいではなく、どんな人に住んでほしいか。林業の担い手を確保したいなら「田舎×林業」、健康増進や医療従事者に力を入れたら「田舎×医療」、ITやテレワークの可能性を広げたいなら「田舎×IT」といった具合に絞ってテーマを提示すべきなんです。これが絞りきれないと結局「田舎には大きな可能性があります」と漠然と田舎を猛ブッシュしてしまうことになるのです。

絞るということは、その分野について責任持って学びを提供することもあります。田舎の鳥獣害対策の先端事情を学べた、地域医療の最前線について学びを深めた、地方のテレワーク事情は想像以上に進化しているぞと学びを得て、参加者は初めて満足するんですね。極上の田舎の景色はあって当たり前。それ以上を目標さなければなりません。

そして、「移住するかどうか分からないけれど可能性を感じたから、○○の分野で自分のできる範囲で協力したい」と思ってもらうこと。そして戻った後もそのつながりが細く長く続けば、新しい移住の形がそこから生まれると思っていました。

### 海士町の「次の一手」

海士町に通うようになったのは二〇〇五年頃からでしょうか。当時尾野は一橋大学の学部四年生。師匠の関満博氏（一橋大学名誉教授・地域産業論）から「海士町という凄い町がある、修学旅行で大学を見学してみたいというからゼミで受け入れてやってくれ」という指令が。今では修学旅行でふるさと教育プログラムを取り入れるのは当たり前になりつつありますが、当時としては考えられないことでした。熱心

に市民活動に携わる大学周辺の地域住民が参加する中で爆笑と感動のふるさと自慢プレゼンを披露したことで、地元紙（山陰中央新報・二〇〇五年六月二四日）に「海士中学生、一橋大学で講義」と一面にデカデカと掲載され、大成功に終わったことから交流が生まれました。

当時、既に海士町は「島まるごとブランド化」と称して産業創出策を講じ、各種メディアに頻繁に取り上げられ、全国的に注目されるようになっていました。そんな中、「二通りの産業創出策はやり終え、あとは実際に運営していくだけ」として、さらに「次の一手」を模索するようになります。私も毎月のように足繁く通い、役場の方々と議論し続けていました。

どうやらその一手とは隠岐島前（どうぜん）地域に唯一残された高校（隠岐島前高校）を存続させることのようなだという結論が見えだしたのが翌二〇〇六年。二クラス制だったのが人口減で一クラス状態が続いており、島根県でも廃止が本格的に検討されていました。当時ですら一〇〇名近くのＩターンを受け入れていた海士町、高校がなくなってしまうとその流れが妨げられかねないという危機感がありました。

### 離島の教育を考える×ちよつと田舎体験

都市との交流に力を入れていたこともあり、教育再生に関心のある都市部の若者呼び込めないかという構想が出来上がります。島の教育を考える二泊三日のワークショップ+ちよつと田舎体験という異色のツアーが発足しました。つまり「田舎×教育」というテーマに絞ったわけなんです。

二〇〇六年、尾野も（奇跡的に）大学院生になり、一橋大学院商学



出前授業のグループワーク、若者が中学生と一緒に考える

研究科・関満博研究室（当時）と、海士町教育委員会との共催で、東京・大阪と海士町を結ぶ交流ツアーを開催しようということになりました。

ツアー名称は、某民放番組の「ラブワゴン」をもじって、「海士ワゴン」はどうだという話に。海士町はよく「かいしちょう」と読み間違えられるので便宜上「AMA」がいいとなりました。予算も限られていたので自分で大型免許を取得してマイクロバスを借り上げ、役員職員と交代で運転。名古屋、大阪・と学生を拾いながら境港を目指して夜行にて約一〇〇キロを駆け抜ける弾丸ツアー。三年間にわたり、派生で生まれた番外編企画も含めて二〇回以上開催される都市農村交流イベントが生まれました。

過疎地の教育などというテーマに都市部の若者が興味を持ってくれるかという不安もありましたが、これはとてつもない流れを作れるかもしれないという期待もありました。

#### 僻地教育で都市と農村がつながる

というのも、教育で世の中を変えたいと思うような若者は当時も多くいましたが、教員や教育政策に携わる職種に就くか、青年海外協力隊として途上国の教育水準向上に奔走するか、教育系の国際機関で働くかといった選択肢しかなかった時代でした。そして、ちよつと教えられる能力がある程度では太刀打ちできない世界でもあり、現地で打ちひしがれる日本人も多く見ていました（＝インドのIT企業で働いていた頃に実際に目の当たりにしていた経験が大きかった）。

そんな中、「日本の過疎地の学校を救え」という命題が示され、なんか凄い島があるらしいから行ってみようという訳も分からぬままギユウ

ギユウのマイクロバスに乗せられ日本海の離島を目指す。極上の田舎体験でまず感動し、そして、教育再生のためにあなた達の力を貸してほしいと言われて感動した若者たちは、多くが海士町の大ファンになっていきました。そして「自分の能力で役に立つことがあれば貢献したい」と何度も赴く若者が生まれ、仕事が忙しくて再び行く余裕のない人は都市部で交流会を主催したりと、主催者も想定しない広がりが見られていきました。

当時は東京の社会起業家コミュニティに出入りする若者が「まだ海士町行ったことないの？」みたいな会話が平然となされるような状態で、東京都内で「海士」と書かれたTシャツ（通称「あまT」）を着た若者の目撃情報が続出するなど、大変な盛り上がりとなっていきました。

#### ツアーなのに出勤授業に駆り出される

島に来たツアー一行は観光もそこそこに、地元中学校または高校で開かれる「出勤授業」のプログラムづくりに没頭します。毎回ゲスト講師はいますが、参加者も全員アシスタントとして参加します。若者たちは夜な夜な激論を交わし、毎回信じられないくらいレベルの高い授業が提供されました。ゲスト講師の人たちも離島の高校が存続するためにと惜しみなく知恵を提供してもらい、キャリア教育といったものになかなか恵まれない離島の中高生にとって働き方の考えを深める貴重な機会となりました。

ときには出勤授業が終わった後に地域住民向けに「高校維持存続に向けたフォーラム」「地域教育勉強会」といった別プログラムまで組まれてしまい、ツアーは一体どこへ行ったのとなってしまうようなこ





授業の振り返り、左が岩本悠氏

ともありましたが、不思議とみんな大満足していました。見るに見かねて周辺のおっちゃん「船出してやるから少しは釣りでもして遊べ」なんて助けてもらうことも……。

毎回いきあたりばったりな企画でしたが、三年で東京と島根の離島を二〇往復したバスツアーに参加した若者はのべ三〇〇名あまり。一度参加した人が仲間を連れて自分で遊びに来ることも増え、それも含めると五〇〇名とも一〇〇〇名とも言われますが誰も把握できていません。

そんな広がりを見せていけば、一定の確率で移住者が現れるのは自明の理でした。直接的・間接的なつながりから二〇名近くが海士町へ定住するに至ります。教育に関心のある都市部の若手リーダーが続々と離島の海士町に移住し、今では当たり前となった「教育コーディネーター」という謎の肩書が生まれたのもこの頃でした。

#### ゲスト講師と岩本悠氏

毎回のツアーにはゲスト講師を招いていました。選定基準としては、離島の教育再生をどうすすめるべきか一緒に考えてくれる、元氣な若手リーダー。今では国レベルで活躍する人だらけでよくこんな人達が集まってくれたと驚くような面々ですが、当時は離島の極上の海鮮と特産の放牧和牛を言い訳に手弁当で気軽にお願いできました。彼らに海士町での中高生向けキャリア教育出前授業を企画してもらうということでした。予算を確保していたというのが内情でしたが、発信力のあるリーダー達が積極的にツアーのことを宣伝してくれて参加者の集客も非常に助けられました。

その初回到ゲストを依頼したのが岩本悠（現・一般社団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム代表理事）でした。出会いは二〇〇三年頃、当時アマガニスタン学校建設プロジェクトを旗揚げしていた岩本氏が主宰する学生起業家・NPOリーダーの学びの場「学生リーダー塾」というものに誘われたところから始まります。その一環で東京都初の民間人校長として杉並区の公立中学校で教育改革に奔走している藤原和博氏が目玉科目として実践する「よのなか科」でプログラムを作ることになり学生リーダー塾の面々で伺ったのです。

その後は流れ、何を間違えたか岩本氏は大手企業に就職して腐りかけていました。A M A ワゴンの企画が立ち上がったときから、「初回のゲストは彼しかいない」と最初から思い描いていたのです。出前授業の発想も、岩本氏に紹介してもらった「よのなか科」の要素をふんだんに取り入れています。数奇な出会いであります。

二〇〇六年五月、初回の出前授業は大成功に終わります。当時の町長だった山内道雄氏、現副町長で当時財政課長としてA M A ワゴンを支えてくれていた吉元操氏の二人も「岩本氏を教育再生の軸に据えるべく招き入れる」という構想が一晩で決まりました。幾度となく通い、二〇〇八年に完全移住するに至ります。

#### 廃校寸前の離島の高校が本当に復活

その後も豊田庄吾氏（現・公立塾隠岐国学習センター・センター長）がA M A ワゴンの二年目・八回目のプログラムで出前授業のゲスト（厳密にはゲストに同行した補佐役）として来島し、その後岩本氏の相棒役になるなど、続々と役者が揃っていきます。

彼らと地域関係者の努力により隠岐島前地域の三町村が連携した「島前高校魅力化プロジェクト」が無事に立ち上がり、多感な高校時代を過疎地で過ごす「島留学」プログラムが発足し、離島でも国公立大学に進学できるサポート体制を提供する「公営塾」が設立。そして離島の高校は今や全国から人を集める人気校となってきました。

存続危ぶまれる地元の隠岐島前高校活性化にあたっては、二〇一二年より一学年二クラス編成が復活することが決定し、交流戦略の一つの目的であった「交流を通じた島の教育再生」が達成されたことになりました。A M A ワゴンがこれにどこまで貢献したのかは議論の余地が残りますが、「優れた教育コーディネーター達を外から呼び寄せる」という当初の目的は達成されたのかと思っています。また、A M A ワゴンで訪れた外部識者を活用し、島の教育再生を考えるために相当な数の講演会や勉強会が開催されたという点では貢献は少なからずあったと思っています。

#### 賛否両論

果たして三年間の一連の企画がどれだけの成果を残したのかは私にもよく表現できません。若者が大挙して押し寄せて、地域を荒らして帰っただけなのか？ はたまた、外の若者に刺激されて地域や学校が活性化されたのか？ そんな賛否両論が、山ほど語られました。

その中で、客観的な話をするならば、二〇名近くが間接的なつながりから海士町へ定住するに至り、島根県の定住施策にも少なからず影響を与えました。「ふるさと島根定住財団」においては、田舎体験プログラムの一環として「県外発着のバスツアー」を開催した場合に助成

金を支給する制度が誕生しました。全国の五府県で同様の施策が導入されたことが確認されています。広島県が首都圏の若者呼び込みで中山間地域課題解決と一緒に取り組む施策として平成二七年度からスタートした『ひろしま里山ウエーブ拡大プロジェクト』もA M Aワゴンの仕組みが取り入れられたものです。

反面、迷惑をかけた人もたくさんいました。参加した若者が連日連夜酒盛りで大騒ぎなのはしょっちゅうでして、店や宿泊施設でならばまだしも、島の集会所や招かれた島民のご自宅で延々と騒いでいたといったクレームの対応に追われました。体験プログラムに約束の時間通り現れない、約束の人数が全く違う、寝間着のような服装で現れる、など、数えればきりがありません。都会の若者が田舎では絶対やってはいけないことを端から端まで体現してしまうような有様でした。尾野も主宰者ではありませんが集客に手を取られていて肝心の現地企画が調整しきれず島の人に負担をかけたつばなしでした。企画がスタートした二〇〇六年当時は尾野も二四歳、若さを言い訳にはできませんが誤解を招く言動も多くあったのは事実です。

二〇〇六年六月に島根大学地域社会問題研究会でA M Aワゴンの取り組みを報告したのですが、私も当時修士一年目の院生ですし上手い発表であったとは言えず、研究会メンバーからは「そんなツアー何の意味があるの」と酷評の嵐でした。それを見かねてオプザーバー参加の島根県庁職員や民間社長が「こういう元気な活動を評価しないでどうするの」と指摘が入るなど騒然としてしまいました。

過疎で廃校寸前の高校が全国・海外からも志願者が集まる学校へ生まれ変わることができた経緯を詳細に記した著作「未来を変えた島の学校・隠岐島前発ふるさと再興への挑戦」(山内道雄、岩本悠、田中輝美、



出前授業が終わって一緒に給食

二〇一五年）が出版され、この中にもA M Aワゴンのことが触れられています。数々の教育再生の担い手がA M Aワゴンをきっかけに移住してきたと振られていたのですが尾野の名前は伏せられており、「一橋大学の学生が企画してくれた」としか紹介されておりません。悪く言う人も多く、名前を載せられなかったと田中輝美氏より聞いています。

と、思いきや、令和元年に海士町が町政五〇周年を祝う式典を開催することとなり、その際に選定された「町の活性化功績者一〇〇名」に選んでいただき、式典にご招待いただきました。これだけでも賛否両論ぶりが感じ取ってもらえるのではないかと思います。

### 無茶苦茶なのにみんな虜になる

当手を振り返ると、よくこんな無茶苦茶な企画が運営できていたものだと思えばかりです。巷の田舎体験ツアーでみられるような「田舎暮らしのすすめ」「起業のすすめ」といった凝ったプログラムは一切ありません。とりあえず離島にやってきて、うまい魚を食べたら、中学校・高校で出前授業があるから講師と一緒に今晚中に授業内容考えよという適当っぷり。あとは自分たちで課題を設定して勝手に学んで帰ってといった、本当に高飛車な企画でした。

それでも毎回のゲスト講師の面々は離島の高校が存続するためにと惜しみなく知恵を提供してもらい、若者たちは夜な夜な激論を交わし、毎回信じられないくらいレベルの高い出前授業ができあがっていくのは楽しいものでした。それは島の教育再生の原動力にもなったし、そこで学んだ多くの若者が、今では全国各地で地方創生のリーダーとし

て活躍しています。

言うまでもありませんが、何とか島の教育を存続させたいという海士町の関係者がなければここまでの動きは実現していなかったと思います。既に全国でも名の知られる地域づくりの最先端地域なのに「あなた達の力を借りたいんだ」と一人ひとりの若者に時間をかけて接する姿は畏敬の念すら感じましたし、そんな熱い島に誰もが虜になっていく不思議なツアーでした。バスもあれだけ走らせましたが奇跡的に無事故（高速道路でタイヤのパンクが一回あったくらい）、なにか不思議な力に支えられていた気がします。

### 「風の人」になる原点

交流が進むうち、私なんかよりよっぽど熱意ある教育再生のリーダーたちが出入りするようになります。私は言ってみれば「立ち上げ屋」でして、ゼロから物事を作り上げるのは得意なのですが、ある程度業務が回ってきたすと企画の適当さが目立ってくるようになりました。それでも発起人だからと大事にしてもらってはいましたが、自分がデカイ顔しているようで性に合わなくなり、出入りする機会が減ってきました。Iターン者で構成される会社（株式会社巡の環）が設立され、島に常駐している人たちの手でもっと丁寧に運営したほうが良いという判断もあり、A M Aワゴンは四年目から私の手を離れることとなりました。

そして、尾野自身は島根県江津市、雲南市と他地域から呼ばれるようになっています。この頃から「風の人」と呼ばれることになりました。種を運び、芽が出る頃にはいつの間にかどこかへ行ってしまう





今となっては貴重、豊田氏海士町初上陸の出前授業光景

人ですね。気づけば国の関係人口施策にまで「風の人」なんて項目が盛り込まれるようになってしまいました。AMAWゴンの企画運営は、私自身にとっても、今の働き方を確立させる転換点のようなものでした。

チャンスを提供してやる心構えで

チャンスは都会だけにあらず、田舎へ積極的にキャリアを磨きに飛んでいく、そんな時代が来ることを確信したのもこのときでした。ツアーを企画していた当初から僻地教育に関して、日本（というか世界）にどこにもない議論と学びがあり、多くの若者を虜にしていきました。東京にいるより何故か日本海の離島にいたほうがよほど情報を得られると、そこに参加した誰もが腰を抜かしていました。そしてその情報量と重力は年々増しています。今の知名度を見れば説明するまでもありませんね。

志があっても、何千万人いる都会でどんなに頑張ってもせいぜい三軍止まりかもしれない。人口二五〇〇人の離島の町なら即一軍。「田舎暮らししませんか」とハッピーを着て移住フェアでニコニコしているのがいかに時代遅れか、はっと気づいてくれたら私としてもこの上ない喜びです。田舎から〇〇の分野で「チャンス」を提供してやるぞ、あなたの力が必要だ、学びと成長の機会を提供してやるぞ、どうだ来てみたいと思っただろう。そういう姿勢なら、田舎であっても人を寄せ付けることは可能なんです。そして、移住者が現れるのは自明の理というほどヨソモノの輪が広がり、関心ある若者が競うように離島を目指していきました。



そんな「頭を下げない移住対策」に発想を切り替えていくべきだと執念を燃やした東日本大震災ちよつと手前の時代の記録でした。そして、「海士町だからできたんでしょう、他では無理だよ」と詰まらぬことを言い始める大人も現れ、さあどうしたものかと思いつつ呼ばれたところへ流れ着く、風の人としての働き方が本格的にスタートしていききました。

もつと知りたいと思ったら

「新聞記者、テレビなど相当数取材に来ていただいたのですが、ほとんどボツになっています。このA M Aワゴン、見た目の単純さに比べて、イベントとしての仕組みを説明すると非常に難解になるため、ほとんどの方が途中であきらめてしまうようです。

その中で、参考になりそうなものとして、資料を列記しておきます。

1 尾野寛明 『中山間地域におけるコミュニティ活性化と雇用創出』自治体戦略としての都市農山漁村交流、島根県隠岐郡海士町を事例として『一橋大学院商学研究科修士論文 二〇〇七年〕……当時、ツアーを一〇回終了した時点でまとめた文章です。開催当時のデータなども収録しています。

2 尾野寛明 「中山間地域振興と都市農村交流」(関満博編『中山間地域の「自立」と農商工連携―島根県中国山地の現状と課題』新評論、二〇〇九年)……一橋大学院の研究チームで島根の地域おこしを研究していた際に、一トピックとして執筆したものです。

3 現代農業二〇〇九年八月増刊『農家発若者発 グリーン・ニューディール 地域創造の実践と提案』に、「過疎とたたかう古書店、都市の若手と農村を結ぶ人材ネットワーク」として、A M Aワゴンの取り組みを寄稿しました。ただの田舎体験ではなく、「田舎×教育」など「田舎×〇〇」の掛け合わせで関心層を取り込んだ運営の仕掛けを解説しています。

4 山内道雄 『離島発 生き残るための一〇の戦略』(NHK出版、二〇〇七年)……当時の海士町長が執筆された本です。ごく数行ですが、A M Aワゴンのことも触れてくれました。

5 羽鳥 圭 『新事業推進のための一ターンの支援体制』(海士(あま)町の地域経営を事例に)『(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士論文 二〇〇八年)……後輩でA M Aワゴンの運営などにも携わってくれていた羽鳥君が客観的に論じてくれています。

※本稿はエコカレッジウェブサイト (<https://corp.eco-college.com/amawagon/>) 上の記事をもとに加筆・修正したものである。



『地域人材育成研究』第5号の著作権の全ては地域人材育成研究会に帰属します。ただし、出典を記載してあれば、本誌の一部または全部を印刷物か電子データかの形式を問わず、複製や改変や再配布することができます。本誌をみなさんで活用いただけましたら幸いです。

ただし写真に関しては、写真を抜き出して複製や改変して利用する場合には、島根県立吉賀高等学校の許可を得ることを条件といたします。本誌に使用されている写真は、吉賀高等学校から提供を受け、本誌での使用の許可を得ています。

## 著作権ポリシー

〈編集後記〉

私は正岡子規の「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」が妙に気に入っている。

最近、ふと気になってネットで調べたところ、この句は子規が奈良を訪問し、宿で柿を食べているときに東大寺の鐘が鳴ったのを句にしたと書かれていた（井口時男「井口時男が読む『教科書の俳句』第1回 正岡子規①」）。さらに調べたところ、子規は『ホトトギス』（第四卷第七号 明治三四・四二・四五）に、「柿も旨い、場所もいい。余はうつとりとしているとボーンという釣鐘の音が一つ聞こえた。……あれはどここの鐘かと聞くと、東大寺の大釣鐘が初夜を打つのであるという。」とあった。井口時男は「子規は事実そのままより『句法』の強さ、すなわち詩的効果というものの方を重視しているのである。」と書いている。東大寺を法隆寺に置き換えたという事実に接して私は納得したり戸惑ったりしている。

私は「令和の日本型学校改革」や「地域に関する学科」の設置に子規の句と同じ納得感と戸惑い感がある。受け入れる前に、今は置き換える前の高校魅力化を記録することに全力を注ぎたい。

いつもながら、びんずネットの金子あかね氏・金子純一氏にビジュアルで丁寧な編集をしていただいた。感謝いたします。

（地域人材育成研究会代表・樋田大二郎）

# 5

## 地域人材育成研究

### 第5号

二〇二二年二月三十一日発行

特集…各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

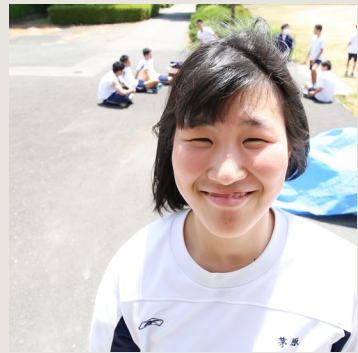
島根県立吉賀高等学校の

高校魅力化（1）

Print ISSN 2435-3604  
Online ISSN 2435-3612  
ISBN978-4-910384-05-4 C3037

本誌の全文の電子ファイルは次の地域人材育成研究会ウェブサイトで開催しています。  
<https://rhrd.net/>

デザイン…金子あかね・金子純一  
編集・発行…地域人材育成研究会



## 高校魅力化プロジェクトとは

その地域・学校でなければ学べない独自カリキュラム、学力・進学保証をする公営塾の設置、教育寮を通じた全人教育の三本柱で、多くの生徒が行きたい、保護者が通わせたい、魅力ある高校にするプロジェクトです。

グローバルとローカルを結ぶグローバル人材の育成、答えが一つに定まらない時代に、決断を答えにする、二一世紀スキルを持った人材を育成します。

<http://c-platform.or.jp/>

<https://miriyokuka.com/>





ISBN978-4-910384-05-4

C3037



# 地域人材育成研究

Regional Human Resource Development Studies

編集・発行：地域人材育成研究会

Edited by The Forum on Regional Human Resource Development

# 5

地域人材育成研究会ウェブサイト

<https://rhrd.net/>



9 784910 384054

2021年12月